# 岳山

第十五年

第二號

# 山岳

第十五年第二號　大正九年十一月發行

## 目次


西澤　國師岳　東澤　冠松次郎……一頁

臺灣中央山脈横斷記　濱谷泰次郎……一三

秩父行　文學士　田部重治……三四

三峠山　法學士　又木周夫……四三


## 圖版


○濁水溪の上流……對頁一六

○尾上駐在所より見たる能高山○花蓮港木瓜溪……二四

○西方より見たる三峠山最高峰……四〇

○三峠山の最高峰（西南より仰ぐ）……四八

## 雜錄

○丹澤山塊に關する資料（武田久吉）○釜澤行（木暮理太郎）○河岸の左右と河堤の內外及雲の表裏（山本德三郎）○黑部峽谷の步道（木暮）○コロラド州內の高峰（H・T）

## 登山案內者

○平穩村登山者案內人組合

## 雜報

○朝香宮殿下御登山○上高地の大荒れ○霧島山上に大競艇所○小倉村登山口○山小屋閉鎖期○各高山の登山客○北海道の初雲○富士の初雪○大阪高商山岳會○會員通信

## 會報

○本會規則の變更○本會規則の變更に就て○警告○第十回小集會記事○會務報告○新入會員○交換及寄贈圖書○本會規則○投稿規定

## 英文欄

卷末附錄として英文欄を添へたり

# 西澤　國師岳　東澤

冠　松　次　郎

西澤は有名な七ツ釜の不動から京ノ澤の小屋迄を溯り、大嶽山道を國師岳に登り、甲武信岳に連なる國境山稜を辿つて右に折れ、金山澤（東澤上流）を降つて東澤に出た紀行の概略である。

## 西　澤

梅雨期に差し迫つてゐるので澤歩きを氣遣つたが、幸に天候の調子がよいので、四五日位は大丈夫と見込を附けて、飯田町發の夜行に乘り午前四時二十分（大正九年六月九日）鹽山驛に着き、それから四里秩父往還を笛吹川に沿ふて上つて行く。去年から取りかゝつたと云ふ東京電燈會社の笛吹川水力電氣の工事で沿道は中々賑はいて、道路も改修され鐵管やモーターなぞを運んでゐるので、人夫が絡繹として一昨年とは隔世の感がある。發電所を三ヶ所設けるのだが幸ひに天科が最奥で、その先へは何の設計をもしないのは結構な譯である。午前八時過に天科に着き庄太郎の家を出たのは十時少し過で、道すがら大嶽山那賀都神社へ詣でる。神官が西澤方面に明るいので暫く行く先の話なぞを聞き、名刺を置いてそこを立ち出で、社前を流れる中ノ澤に沿ふて登つて行く。志す處は西澤にある、少くともその七ツ釜位は見物したいと思つて私は來た。

廣瀬から子酉川に沿ふて二俣（西澤東澤の合流點）に溯り、その先の石落尾根を登つても西澤へ降れる。これは五萬分の一金峰山圖幅を見ると歩道が入れてある、その終點あたりから西澤に向つて降るので、七ツ釜よりも遙か上手の七ツ釜と京ノ澤の小屋の中間あたりに出るのでは興味がない爲大嶽山

神社から上つて芹澤から來る道と合して七ッ釜へ降ることに豫定をした。芹澤まで出ては餘程遠廻りになるし、それにこの道は大嶽山神社へ參詣出來るので都合がよい。西澤は二俣から溯行することは先づ不可能で、東澤との合流點の六七丁上の魚止ノ瀧から七ッ釜の間を通つた人は殆どない。上釜の者が一人餘程以前に通つたと云ふてゐたが、この間にはまだ五ッ淵七ッ淵の險があるとのことで、私もその内是非探つて見たいと思つてゐるが、漫然と秩父を歩くつもりで入ると少し荷が勝ち過ぎると思ふ。

大嶽山の立派な森を通り抜けると中ノ澤の細溪を縫ふてつま先上りの登りとなる。行く手は皆草山となつてしまつて四五年前植林したと云ふ檜や杉の矮樹疏らに生へてゐる丈で、眞晝近い日射を遮る何物もない。强烈な日に照り付けられて草いきれのする斜面を登つて行くと、土用頃火山の裾野を歩く樣な苦しい氣持になる。顧みると何時しか富士山が裾山の間からその麗頭を高く擡げて、六合目邊まで一面にある殘雪が朝日を受けて桃紅色の光を放つ。もう古禮、笠取方面の山々が可なり高くなつて、裾から山脊を縫つて行く笠取の路がよく見える。

三四十分も登ると一丈餘の石碑の建てられてある處で路が二つに岐れる、左に折れるのが國師岳の登山路で左前方に聳えてゐる黑木の茂つた尾根を越して京ノ澤の小舍へ降るもので、私達はこの路へ入らずに尙澤に沿ふて炭燒路を登つて行く。前方には淡綠色の美くしい笹山が幾つも連らなつて、その左端から二番目の鞍部が西澤へ行くタボ(乘越)だと庄太郎が指さす。澤の水が漸く少く清水の樣に細ると小さな炭燒小屋の前に出た。炭燒は二人とも餘り暑いので木の枝を編んだ日遮の下に寢込んでゐる。丁度正午になるので其處を借りて中食を用ひ小一時間程午睡をして夜行の疲勞を休める。午後一時に小屋を出て澤の窪を登り、大きな緩斜面に出ると程なくなだらかな尾根上に登り付く。一面の小笹原に檜の大木が疎林をなして、その中を一筋の細經が尾根を通じて西に向つて走つてゐる。遙か

右下に廣瀬方面がパノラマの様に展開して堤の様な山側に峠の道が鮮かに刻み込まれ、時々トロッコが樂しそうに山坂を辷つて行く。もう甲武信木賊破風の喬岳は東澤の谷を壓して蒼黑の威容を連ねてゐる。一翳の雲なくすみ渡つてゐる奥秩父の連山はさすがに雄大に見える。

六七丁も行くと芹澤から來る路に合する。同じ様な丸い笹山を上り氣味に行くと、追々山の様子が奥深くなつて大窪澤の頭に出る。この澤は西澤の支流で二俣から二三丁上て西澤へ合流するもので、私等は既に西澤の領に入つた譯である。大窪澤の上流は名の示す如く隨分大きな椀狀の窪地になつて下流の方を見通した所では可なり樂な澤らしく見える。この邊の尾根は表側は笹山の連亙だが一歩裏側へ入ると欝葱たる深林となつて、闊葉樹林に栂や落葉松が交錯して、今迄見えなかつた石楠や山躑躅が林叢をなし、その桃色や紅色の美くしい花が丁度滿開である。

夕飯の菜にする爲楢の仆木に付いてゐる椎茸をあさりながら笹山を四ツ程越すと、黑木の二三本目立つカヤトの山にでる、この先にはもう一つ高いカヤトの山があつてその先に續く山は皆黑木に蔽はれてゐる。午後二時少過。尾根へ出てから約一時間を要す。先刻のタボがこのカヤトの山の窪にあたるので五萬分の一圖幅にある芹澤路の終點にあたる、私等は此處で右折して大窪澤と西澤との間に出てゐる尾根に沿ふて大窪澤の側を降つて行くのであるが、もう一つ細徑が西澤に向つて小さな尾根上に附けられてある。この道を西北に向つて略同高度を五六丁程行くと、栂の茂つた大きな岩壁へ出る、オックエさんと土地の者が云ふてゐる處で、毎年四月になると村の者が打連れて參詣に出かけると云ふ、その時分にはこの路も草や笹を刈られて餘程分りよくなると云ふ。私は其處迄行かなかつたので何が祭られてあるのか知らないが、西澤の谷の方へ突出してゐる處なので、少し注意すれば尾根からよく見える。

暫くの間石楠花の茂つてゐる崖側を行きそれから尾根上へ出て栂の木下道を縫つて行く、約四十分

程で栂林が疎らになつてゐる尾根のたるみに出て休む。此處で細徑が二分する、左下へ降つて行くのは西澤の大淵（五萬分の一圖幅の西澤の西の字と澤の字との中間位にある池の様な淵）のある附近へ出る路で、庄太郎は七ッ釜へはまだ初めてなので、此處を大淵へ降らうかと云ふたが、私は七ッ釜迄是非行きたいと思ふて居たので、尙尾根へ續く前方の細徑を辿つて三十分餘も行くと、又休み場の様な尾根の小平地へ出た。まだ前方へ小徑が通じてゐたが、隨分降つたので此邊まで來れば七ッ釜附近へ降りられるだらうと思つて、尾根に分れて可なり廣い急斜面を栂や山毛欅檜などの間を辷りながら澤へ向つて下つて行く。

最早この處が目的の西澤になる。この邊が東澤ならば闊葉樹の若葉が夕日に輝いて、谷中が優美な春の景色を展開させるのに、此處は溪谷が餘りに深く陰沈たる森林の底を辿つてゐるせいか、まだ午後三時頃だと云ふのに、何となく四邊が薄暮くそして前方の見通しは更にきかない。人跡稀薄の西澤は栂、落葉松、檜などの針葉樹の大木が闊葉樹を壓して縱横に峽谷を埋めてゐるので、壯大は壯大だが如何にも暗く凄い感じがして、東澤に對する様な溫か味や親和力に乏しいのは已むを得ない。尾根から二十分程降ると溪聲が聞え、間もなく溪流の中を行く様になる。尙暫く小澤を降り最後に二丈程の小瀧の下を廻ると、私等は突然西澤への落口に吐き出された。然もその出合が丁度七ッ釜の横腹に當つてゐるので私は思はず快哉を叫んだ。午後四時。

鬱々たる西澤の大森林の中を迅雷のはためく如く溪谷を震撼させて咆哮疾走する七ッ釜の奔川は、凡そ五六段の飛瀑が大小の釜を挾んで、約百米突の谷底を目がけ、直立に近い急角度を以て落下して行くので、瀑は白龍の如く、釜は深碧に凝つて、その壯觀言語に絶すとでも云ひたい處だ。今迄靜かな尾根や小谷をのみ歩いてゐたのがこゝへ降つた時は急に聽覺や視覺を刺戟されたので、私は暫時佇立したまゝ駭目これを久くした。東澤に比べて水の大きい西澤が、三間程に壓縮されて壁立數丈の懸

崖の間を狂奔して來る樣は凄まじいもので、それが七ッ釜迄來て欝勃たるその勢力を放散するのだから、西澤も七ッ釜に到つて正に怒濤冲天の勢を示してゐる。

この上流五六丁の處にまだ一つ瀧と釜とがある、それを加へて七つになるのだと思ふが、私に見えたのは五つであつた。第一のものが三丈程の瀑になつてその瀧壺から直に第二の五六丈のものが迸り出てゐる。この第二のものが尤も壯んなので、瀑の左側に立て廻された灰黑色の岩壁が半圓形に大きくえぐれ、奇拔な釜となつてそれが瀧壺の釜の水と共に溢れて第三の小瀑を形ち造る。この第二の瀑の左側の岩壁の刳れた內側が不動尊にあたるので、土地の者の話しては岩の襞の苔が丁度不動尊の樣な形をしてゐるのだと云ふ。この瀑を不動ノ瀑と云ふ、即ち七つ釜の不動である。第四の瀑は見下ろしたのでよく分らなかつたが可なり長い瀑で、その下を第五のものが釜を挾んで連續してゐる、そして遙か直下で谷が急に左折してしまふので其先は見ることが出來なかつた。兎に角この瀑を最下底から仰いだならば、恐らく百米突近くの五六段の飛瀑となつて、それは實に豪壯奇拔なものだと思はれる。私は時間の都合でこの下まで降らずに中途から戻つて上流に向つた。

第二の瀑の右岸の崖上をへづつて七ッ釜の上手の河原に下り、稍深い徒渉をして左岸に移り、暫く行くと岩の間に七ッ釜不動尊と書いてある幅一尺長さ一丈程の札が置いてある。そして其附近處々から生溫い鑛泉が湧出してゐる。又徒渉をして右岸に移り、三四丁程行つたが適當な夜營地がないけれども日暮近いので右岸の大きな岩の間に宿をとることにする、時に午後五時。六月と雖も溪谷の夕は中々寒い。庄太郎は焚木を澤山下ろして來ると、今度は大木の皮々疊一疊位に剝ぎ取つて、一人づゝそれを莚の代りにしてその上へ油紙を敷き、合羽を冠つて野天へ横臥する。川上から吹き下ろして來る風が岩の間から吹き込むので中々寒い、それに地盤の惡い處で石がゴツ〳〵して身體が痛い。夜行で前夜よく寢られなかつたのでどうやらまどろんだが、夜營地としてはあまりよい處ではなかつた。

# 國師岳

十日。晴。昨日より空がどんよりして何となく雨の近いのを思はせる。午前六時發夜營地の左上の崖側を匐ひ上つて河原へ降つたが、行く先は淵奔流と壁續きで澤の中は通れない、已むを得ず少し戻つて可なり上の森林の下を藪を分けて上り、荷を縄で下ろし小澤から本澤に降る。少し行くと三四丈の大きな瀧が懸かつてその下が又釜になつてゐる。離れ過ぎてはゐるがこれが前述の七ッ釜の一つではないかと思ふ。こゝで瀧の下を徒渉し左岸に移る、瀧の傍は一面の滑岩で危險なので崖側の藪を分けて暫くして澤へ下りかけたが崖が非常に急峻なのにその下が淵で前進が出來ない、又戻つて漸くして右岸に移る。夜營地より約二時間を費す。此間尤も險惡にして蒼々たる西澤の急流が油の様な淵になつて、兩岸に狹まる斷崖の間を曲折衝突しながら流れて行く。これより上流は追々河巾が廣くなつて急に歩きよくなつたが、溪谷は頗る平凡化してしまつて、その美くしさと面白さとに於て東澤の敵ではない。西澤は七ッ釜の上流七八町迄の間が絶景で其上流に至つては平々凡々到底推奬に値しない。

これから全く河床のみを行く。約三十分も上ると右岸の大きな滑岩の上を細い瀧が流れてゐる。石塔尾根の路を登つて西澤へ降ると此處へ出るので、來年あたりは東澤から路が付いて西澤の檜を東澤へ伐り出すと云ふ計畫で、その爲に釜ノ澤と二俣へ大きな小舍が出來たと云ふ。そろ〳〵東澤西澤の恩賜林もこゝ數年を出でずして多少の荒廢を見ることだらう。尙少時行き何心なく右岸の崖下を見ると岩壁の窪に脊負梯子二ッ立掛けてある、不審に思つてその中を見ると棕梠縄の大束が二把に米が五升位とその外鍋が大小二つ入れてある。米はもうふやけて木綿の袋が處々崩れ脊負子の縄もボロ〳〵になつてゐる、庄太郎は首をかしげてゐたがこれは三年前この先の大淵で死んだ岩茸採のだと云ふ。

午前八時四十分大淵へ着く。兎に角西澤の名所の一つだが、名の示す如く立派なものではない。低

い瀧の下を徑十二三間の池の様な淵になつてゐるのだが、周圍が明る過ぎるので西澤の奥にある様な奥深い感じは些ともしない、釜ノ澤の上流のリャウモンの瀑の方が遙かに幽邃である。こゝで親子三人の岩茸採が魚釣をしてゐたが、二人が飯の仕度に二三町下へ降りた後で殘りの一人が淵へ辷り込んで死んだらしく、戻つたときには淵の落口へ死んで浮んでゐたと云ふ。私はこんな淺い淵でも死ぬものかと不思議に思つた。それから約一時間半程上ると右手から薊澤が合流する。この澤は可なり水量はあるがごく樂らしい、薊澤から半町程上に三四丈の立派な瀧が落ちてゐる。これは二俣の上のと同じ様に魚止ノ瀧と云つて西澤もこれから先には魚がゐないと云ふ。魚釣も大概七ッ釜から大淵迄の間をあさつて、大淵邊から上つて、先に來た尾根から里へ歸るのだと云ふことだが、私の通つたときにはあまり魚の影を見受けなかつた。瀧の右手の崖をへづつて又澤へ出て少し行くと右岸の林叢の間に京ノ澤の小屋が見える。午前十時二十分。小屋に着いて中食を用ふ。五萬分の一圖幅によると薊澤（國師岳登山路の手前にある澤）が丁度登山路の所で出合つてゐる様に入れてあるが、實は四五町程下でその間に前記の魚止ノ瀧がある。京ノ澤の小屋はあまり形勝の地に建てられてないがまだ頑丈で當分使用に堪へられる。

正午小屋を出發して廣い河原や洲の中を縫つて行く、この邊は落葉松の森林になつて、その大木の若葉が殊に美くしい。約七八丁で右手の崖側に取付き暫く急峻な熊笹の藪を分けて登ると一面の栂林で、尾根へ出ると勾配が甚だ緩かになり、立派なそして暢氣な登山路を行く様になる。尾根の中程の大たるみへ出て休む。此處から見たあざみ澤は隨分廣い谷になつて森林も中々立派である。京ノ澤の小屋から二時間程登ると追々急峻になつて樹木がひねつこびてくると、石塔尾根が右手に目八分に見え、その國境の尾根から第一の鞍部が可なり下つて見える。磊々たる岩尾根續きになりそれを二つ程越すと最後に大嶽山奥の院の岩窟の飛び出してゐる岩峰に登る。そして其次の隆起を越して、午後三時

半に三角點のある國師岳の頂點に辿り着いた。然し眺望は頗る惡かつた。今しも千曲川の谷から起つた雲は、見る間に八ヶ岳、金峰、朝日を遠慮なく抹殺して、奥仙丈の上へとかゝつて來た。遠い飛驒山脈の方は霞んで見えない。顧みると甲府盆地の方も雲が多い爲、赤石山系は愚か富士山すら見ることが出來なくなつた。好く晴れてゐるのは秩父側ばかりで、この方面丈は兩神山も見える、三寶山から雁坂嶺其先に連らなる連嶺も鮮かである。約三十分休む。時計を見るともう午後四時になる。濃霧が何時の間にか笛吹川の方から吹上げて來たので瞬間に模糊たる白霧の中に包まれてしまつた。一ッ手前の隆起へ戻つてそれから甲武信岳の方へ連なる尾根に沿ふて下る。初めの計畫では國師岳から石塔尾根を少し下つて、始めての鞍部から石塔澤へ下る筈だつたが、濃霧の爲め石塔尾根の切開が判然しない。尤も一ヶ所森林の中を右下へ切開が付いてゐたのでそれだとは思つたがもう日暮に間もないし誤つて薊澤の方へ入り込むと東澤へ出ることが出來なくなるので、石塔尾根を諦めて國境の尾根を三十分程降つて、斜右に急斜面を窪崖に向つて金山澤の上流を下る。

この澤の上流は隨分荒れてゐるし、支尾根の間が崩壞して小さな瀧が幾つも連續してゐるので一寸歩き惡い。栂の小尾根を降つて小澤を渡り又左方の尾根を暫く降り、夜營地に適當の處を探しながら行く。小瀧を二三降り二間餘の瀧の横を廻つてその下に出て、漸く小平地を見付け時計を見ると午後六時になる、場所が如何にも惡いが此先で時間を費すのが不得策だと思つて夜營の支度をする。此處は金山澤の上流國境の尾根から約一時間半程下つた處で、澤の水量も未だ少い。夜營地に選んだものの一方は山側になつてゐるからよいが、背後は一間程直いて瀧に落ち込んでゐるのでその飛沫の煽りで馬鹿〳〵しく冷える。この夜は一晩中焚火を盛んにしたが脊中が冷えてよく寢られなかつたその爲に風邪を引いて翌日一日惱まされた。山中は霧が益々濃くなつてつい下流の尾根迄見えなくなつた。焚火の煙が逆に山上に吹き上げられ時々霧小便を煽つて來る。この窮谷で大雨に遭つたらそれこそ出

るも引くも出來ない、そうかと云ふてこの瀧の下にはとても長く居られないので、一晩中何となく沈鬱な氣持になる。夜中に時々目を覺ましては亂雲の間から無理に二三の星を搜しては安心して又一しきり眠りにつく。それでも幸に明方になると雲行が大分穩かになり、急に雨の降る模樣もなくなつたので午前五時四十分(十一日)下流に向つて降る。

暫く澤の中を降ると瀧になり、その下が又なだらかな流水になつて暫くすると又瀧になる、一時間近く同じ樣な地勢の處を行く內溪流が急に陷沒して十二三間の瀧となつた。この瀧は七十度位の丸い大きな岩壁を辷り落ちるので、可なり立派に見える。崖側の矮樹に摑まつて橫に下つて瀧壺に出る。この附近の瀧は重に六七十度位の急斜の岩に添ふて流れ落ちる極めて穩かなもので、その瀧壺も西澤の樣に釜をなさない。一二丁行くと左岸の崖に徑二間深さ一間餘の鑛石試掘の跡がある。それから二丁程下ると左手から稍小さな澤が落合ふ。その奧にも小瀧が懸つて尾根の崖側が崩壞してゐる、この澤も隨分荒れてゐるらしい。午前六時五十分。石塔尾根の續きを當面に仰ぐ、もう隨分下つた。これから下の金山澤は實に鮮麗なるよい澤になつてゐる、兩岸から優しく蔽ひ冠さつてゐる闊葉樹の若葉は漸くほぐれたばかりの透き通る樣な綠の網目を谷川の上へ投げかけて、その間にすく〳〵と延び上がつてゐる落葉松の淡綠の煙りは、私の春の渴を醫するに充分であつた。中凹になつて鮮褐色をした花崗岩の川床の上を淺く流れて行く淸麗無比の谿水は、水盤の上へ水を溜めた程の淺い美くしい瀨や淵を殘して、樂しそうに又せはしさうに落走して行く。溪水を追かけて魚の樣に流水の中をのみ辿つて行く。こうした風の樂しい溪の中を三十分程行くと、谷の樣子が少し荒くれて、石が高くなり淵が大きくなると、右から壯大な岩の押し出しを見せて、石塔澤が合流する。可なり大きな澤で金山澤に比べて餘程荒蕩たるものらしい、これからは水量は殆ど倍大になるが谷川は依然として美くしく穩かである。辷ることのない花崗岩の川床を、脛まで濡せば川の中ばかり樂に步けるので如何にも氣持が好

い。兩岸の森林が益々壯大になると信州澤が左から入つて谷が左へ向くともう向ふに釜ノ澤の出合が見え、その左岸突き當りに大きな新らしい小舍が建てられてある。午前八時二十分。小舍に着いて休憩。薊澤と間違へてゐまいかと始終危ぶんでゐた床太郎は、釜ノ澤の出合を見下して安心したと云ふてゐた。

## 東　澤

登山家にとつて森林の荒廢程なさけないものはない。一昨年の春東澤を溯りこの出合に辿り着いて始めて濃密豐潤なこの深林を望んだときは、木暮田部君等がどう此處を分け上つたのかと暫くの間首を傾けた位だつた。然るにもう今年はこの出合に茂つてゐた檜林が殆ど伐り盡されて、何となくからりとしてしまつた。そして二間に三間程の小舍が出來て僅かに二三年前の面影すら見られなくなつた。この分で西澤東澤の檜を伐り出されては、あの鬱蒼たる森林を鎧つてゐる、そしてその大赭岩の嵬崔たる奇峭とを以て東澤西澤を壯嚴してゐる寧ろある意味でトッサカ尾根よりも遙に貴い石塔尾根を、どれだけ墮落させることだらう、梓山の戰場ヶ原のことを思ふとゾーッとする。どうせ共喰ひの世界でもせめてマッチ函の樣な都會から一時でも逃れて自然の新鮮と崇高とを受け入れるのに都合のよいこの邊の山水位は原始のまゝに殘存して欲いと思つた。

檜の切株を越えて釜ノ澤の瀑を見に行く、何しても東澤の本流丈あつて水量も多いし、落口からして壯美で、くの字なりに落ち込んで來る三段の最下段の瀑は東澤掉尾の壯觀である。この三つの上流で釜ノ澤が最も雄大、信州澤は鮮麗、金山澤は何れもの中間に位してゐるが、上流の荒れてゐるのは釜ノ澤以上である、石塔尾根から來る石塔澤に至つては更に險惡の相を呈してゐるだらう。

私は初め二日目に釜ノ澤の出合まで降つて、翌日釜ノ澤を溯つて甲武信岳へ上り、眞ノ澤を栃本へ

出る豫定もして見たがそれは餘り蟲の好い話なので前程を考へる。時計は午前九時になる。これから東澤を下れば正午過ぎには二俣へ出られる、そうすると午後三時頃に笛川館や山縣屋へ泊るよりも、一そ鹽山迄飛ばして午後五時三十九分の夜行で東京へ歸らうかと思ふと、歸心矢の如く山水巡禮の心も急に軟化して急いで釜ノ澤の小舍を立出で流の中を拾つて東澤を下る。

東澤を降ると云ふことが自分には何となく樂しい思ひをさせる。これから豐麗な深林、純美な溪水その中を膝まで濕せば樂に徒渉の出來る樣な至極呑氣な谷渡りを始める。庄太郎は時々左岸に傾いて淀んでゐる淵の中へ石を投込んでは岩魚を驚かす、河床が通れなくなり左岸の押し出しを絡んで又流水の中を行くと、幾回か折れ曲つて糀岩の下を東澤の小舍へ出る。糀岩と云ふのは東澤の小舍の對岸上流に露出してゐる大岩壁で、それに一面に著いてゐる青苔が糀の樣に見えるのでこの名がある、東澤の名所で土地の者の目印になつてゐる所だ。中食を使つてゐると巉岩千有餘尺の石塔尾根の中腹で駒鳥が壯んに囀つてゐる。それから又河床へ下ると間もなく木暮君の所謂廣河原へ出て左側を上る樣になる、登りかけると河の方へ出た小山の大木の下に檜の端切を無造作に積み重ねて小さな山の神の祠が出來てゐる。これは八丁山の神と云ふので鷄冠谷の入口からこゝまで八丁あると云ふ。私には十數丁もあるかと思はれた。これから愈々髯摺岩の險にかゝる、一昨年通つた樣に路を取れば、八丁山の神から少し下へ山側を行つて髯すり岩の手前で谷へ降り、對岸へ移り、この岩を越した時分に左岸へ戻るのだが、其後この岩壁が大きく剝ぎ落ちて河原の方が通り惡くなつた爲、又昔日の如く丸い七八間もある大岩壁の襞に沿ふて形ばかりの路が付けられてある。恐ろしく險阻な處だ恐らく東澤中での難所でこんな所は秩父には少ないと思ふ。岩の襞をへづりその凹にボートで植込まれた心細い丸太の上を辿つて、上り氣味に四五回曲折してへづりを終り、暫く崖側の路を行く、この邊は川床から十數丈の高さになつて一縷の路が九十度に近い急峻な崖側の上を通じてゐるので、一足辷らすと飛んだ

目に遭ふ。

それから三丁程行くと崖上に露出したつる〳〵な大岩の上へ出て、楓の枝を摑んで足の親指の先でへづつて行く。ヒョイと下を窺くと十數丈の下を摺りへらされた荒砥の樣な花崗岩の河床が、藥研狀に窪んだのが綜錯して、其底深く穿鑿して流れる溪水は殆ど見えない。庄太郎はホラの貝の上だと云ふ。ホラの貝と云ふのは木暮田部中村の三君が數年前初めて東澤へ入られたとき迷ひ込まれた大きな釜のある處で、釜の形が如何にもホラの貝に似てゐるのでこう云ふ名が付けられてゐる。兎に角西澤では七ツ釜、東澤ではホラの貝共に笛吹川上流の奇景で恐く秩父附近では最も見るに足るものだと思ふ。

又一ヶ所針金が釣してある所を通ると石楠花が茂り始めて、安樂な歩道が崖側の笹の中を通じて下り氣味に鷄冠谷の方へ向つてゐる、それに付いて急ぎ足で行くと尾根のたるみへ出て道が二つに分れる上へ行くのは鷄冠山の鞍部を越えて釜ノ澤の奥へ出られるので、庄太郎は獵をした時分にはよく此の道を通つたと云ふてゐた。私等は鷄冠谷に下り瀧の下を河原へ降つて右岸に移り、砂丘の藪を行くと二俣手前の大きな小舍へ出る。五間に十二三間位のもので一時的のものらしくもう屋根は全く破れて殆ど小舍の用を爲さない。小舍の前を斜に徒渉して、ヌク澤の手前の岩壁に立てかけてある大梯子を匍ひ上り、瀧の上でヌク澤を渡つて山側の密林の中を行く。風のない森閑たる東澤は數尋の底にきらめく淙々たる溪川の音と、遙か西澤山の裾で囀るゼニトリや山鳩の寂しい音を聞くのみで、なだらかな山坂を鬱勃たる新綠の下を潜つて行く氣持は何たる爽快のことであらう。

東澤も鷄冠山の崖側からヌク澤を越え、遙か下に西澤東澤の合流點を見下して、ナレイ澤に到る間の溪觀は新綠の驕奢そのものである。『光り合ふ二つの山の茂りかな。芭蕉』。西澤の山と東澤の山とが茂り合つて、その綠の光波が交錯してゐる燃える樣な若葉の底を、白泡を吹き青波を揚げて流落して行く子酉川の水の美しさを眺めると、私は只もう山靈の饗する春の宴(ウタゲ)に恍惚として、忙しい旅をして

ねることも全く忘れ、林間をそゞろ歩きする樣な悠長な氣持になり、この深麗愛すべき溪谷に別れるのがなやましくなつた。

この谷には珍らしくなるナレイ澤を渡つて、青笹川の小流を瀧の上で横ぎり、林叢の間を急ぎ、あの春らしい青々とした廣瀨奥の山々の見えるバラ平へ出る迄は私の心はまだ〳〵桃源をさまよつてゐた。廣瀨の圖墾地へ出てトロッコの疾走して來るのを見て急ぎ足で身を躱はしたり、ダイナマイトで路傍の岩を割る音に驚かされ、それから水力電氣の工夫等が到る處の酒場で醉ひさゞめいてゐるのを見るに及んで、私の夢は全く破られてしまつて私は只あくせくと秩父往還を行く平凡な旅人となつてしまつた。庄太郎の家へ立寄つて晝食を認め、午後三時少し過ぎ天科を出て鹽山まで急行したが、鹽山の町へ入ると生憎上り列車が出てしまつたので、已むを得ずその夜十二時過の列車で翌早朝飯田町へ歸つた。

東澤の秋の美しさは私が嘗て木賊山の崩崖から望んだときに甚深の印象を受けてゐる。滴たる樣な新綠に代ふるに燃ゆる樣な紅葉がこの深い〳〵闊葉樹の溪山を彩つた時分、駒鳥や時鳥が霞める春の空氣をゆるがせる鋭い叫の代りに、溪山に浸み入る樣な澄み渡つたさ男鹿の聲の聞える深秋の頃、私は二俣の小舍あたりで夜營をして、東澤のホラの貝、石塔尾根の高見岩（こゝは東澤西澤の流域が一目に見渡せる處）、それから西澤を魚止から上へ七ッ釜まで溯つて見たいものと思つてゐる。

# 臺灣中央山脈横斷記

濱谷泰次郎

臺灣の山岳に就ては、既に本誌上にも、野呂氏の中央山脈の全般に亘る概説があり、尾崎氏の南投

廳下の新高山登山紀行もあり、又關口氏の南投より花蓮港へ横斷せられし通信も記載されて居るが、私の是迄の考へでは、蕃界の奥地には生蕃が跋扈して居つて、到底吾々の如き一平民の單獨旅行を許されず、且又手輕に行く事も出來ないものと思つて居つたのである。それで臺灣の山岳に對して生字引と云はれて居る野呂寧氏に、せめて山地のお話だけでも伺ひ度いと思つて、私は渡臺した其日の午後早速野呂氏のお宅を訪問した、所が、山へ登る希望があるならば、南投から中央山脈一萬尺の能高を越えて花蓮港へ拔ける郵便道路があるから、夫を行けば通れない事もないだらうとのお話しで、南投廳長御厨規三氏への紹介狀を貰ひ、お蔭を以て中央山脈一萬餘尺の大峭壁の中部を、西から東へと安樂に横斷し得たのである。

## 新高山に就て

既に山岳第一年第二號より數冊に亘つて尾崎氏の精細なる紀文が出て居つたが、最近ではも少し手輕に行ける樣になつたのであるから、聞いたまゝを書いて見る事にした。先づ南投廳南投を起點として、一番の汽車にて南下、滿仔に下車し、夫より手押臺車にて濁水溪畔を溯り、集々を經て水裡坑に至り(此間南投より約四時間)、臺車を捨てゝ濁水溪を渡り牛轠轆着。之よりは尾崎氏の取られしと略同一路を進み、少し溯りたる所より濁水溪と別れて陳有蘭溪に沿ひ、約四里にして內茅埔に着。夫より溪の右岸を五里九丁溯れば最奥の蕃社東埔社に至る。尙八通關迄約五里、此間に駐在所四ありて、何れも賴めば實費宿泊を許さるゝのである。八通關は中央山脈の一鞍部で、海拔一萬尺に近く、夫より新高山主山迄は約一里半、往復半日の行程であるとか、八通關より花蓮港廳トラクラク溪に沿ひて玉里方面への新道路も近々通ずるとの話。八通關迄は此七月(大正九年)頃に開通する筈で、八通關駐在所が建設されると、其所を起點とすれば、新高山は勿論、秀姑巒山(一萬二千六百五十尺)、大水窟

山（一萬二千二十八尺）、マボラス山（一萬二千五百六十尺）などへの登山も餘程便利になることであらうと思ふ。私は不幸にして新高山は只の一度南投驛附近で見たのみで、又新道路開鑿前であつたから登ることも出來なかつたが、遠望しただけでは何等の奇もなく雄大なる趣もなかつた、夫は飛驒山脈や、赤石山脈の如き殘雪の存しない爲めである。

八通關迄の道路は能高越えの道路と大差ないとすれば、後者は南投廳下に於て、勾配は二十分の一平均であると云ふのであるから、夫から押して大して嶮しい道ではないと思ふ。蕃狀も目下の所では平穩であるから心配はなく、各駐在所間には必ず電話が架設してあるので大變便利である。然し蕃地へ入らるゝ方は、豫め南投廳警務課理蕃係長の伊東綱太郎氏に面會されて、山の事に就いて精しい事を聞いて置いた方がよいと思ふ。又蕃地へ入るには、普通には警務課へ行つて入蕃許可書を貰ふ必要がある。然らざれば二百圓以下の罰金を課せらるゝとの事。

南投を起點として新高山迄及能高横斷道路の里程を示せば左の如くである。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 南投 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 五里 | 集々 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 十一里四町 | 六里四町 | 內茅埔 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 十六里三町 | 十一里三町 | 五里九町 | 東埔 | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | 約五里 | 八通關 | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | 約一里半 | 新高山 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | 南投 | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | 五里 | 集々 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | 十六里四町 | 十一里四町 | 埔里社 | | | | | | | | | |
| | | | | | | 二十二里八町 | 十七里八町 | 六里四町 | 霧社 | | | | | | | | |
| | | | | | | 三十里十六町 | 二十五里十六町 | 十四里十二町 | 八里八町 | 能高 | | | | | | | |
| | | | | | | 四十七里三十二町 | 四十二里三十二町 | 三十一里二十八町 | 二十五里二十四町 | 十七里十六町 | 花蓮港 | | | | | | |

## 南投より日月潭迄

南投廳南投街は、北よりすれば臺中で帝國製糖の汽車に乘かへ、約二時間。南よりすれば本線二八水より明治製糖の輕鐵にて、約一時間半で達する。市街は頗る靜寂、廳舍と一寸した公園及蕃產品陳列所の外には、何等見る可きものもない。宿は南投ホテルと云ふ一寸したのがある。

野呂氏よりの紹介狀を持つて、御厨廳長に面會し、入蕃の事については理蕃係長の伊東綱太郎氏が萬事斡旋の勞を取られたので、頗る安穩な、そして愉快な横斷旅行をなし得た事は、大に感謝する次第である。

大正九年五月十一日。晴、曇、雨。連日の降雨は名殘なく晴れて、始めて新高山より北に續く一萬尺の中央山脈の諸峰を見た。然し武藏野に立つて秩父連山を見た位の程度の印象を殘したのみで、格別一萬三千尺の高山を望見したと云ふ壯嚴なる氣分を味ひ得なかつたのは、假令、些の殘雪を認めざりしとは云へ、餘りに臺灣の山なるものゝ、遠望の平凡なるに、いさゝかならず失望せざるを得なかつた。人に依りて違ふであらうが、私の得た最初の印象は斯の通りである。

伊東氏に見送られて、午前六時五十分發の南行き列車に乘込む、芭蕉畑や檳榔樹の林を眺め、約三十分にして濁仔（ナコとも云ふ）に着。既に南投より電話もあつて、兒玉警部補の出迎を受け、用意されたる臺灣製糖の臺車にて六時四十五分、愈々奥地に向つて出發する。臺車は內地で云ふトロの事でその上の椅子に腰をかけ乍ら、苦力に押されて行く、汚い電車や煤煙の多い汽車よりも却つて乘心地がよく、速力も登りでない限りは可なり早い。降りなどは一寸氣味が惡い程走る。單線であるから、曲り角に至ると、前方から來る臺車と衝突を避ける爲めに互に呼鈴を吹いて、警戒を與へる。道は濁水溪の河床、田畑の間、想思樹の並木の中などを行く。奥の方の山には既に雲がかゝつて、重苦しい

濁水溪の上流　濱谷泰次郎氏撮影

雲が段々と平地に向つて押寄せて來る。畑盡きて濁水溪の溪畔に出で、右岸の斷崖に横はる危げなる棧道の上を通る。下には灰色に濁れる濁水溪の激流が、渦を卷いて流れて居る。此邊で尾崎氏の紀文を一寸思ひ浮べる。氏に依れば、臺灣中部の諸川皆清澄なるに反して、濁水溪の本溪のみ獨り濁れりとか云はれて居るが、私の見た所では、野呂氏の御説の如く、臺灣の此邊りの川は、大部分は清澄と云ふ文字を使へない程度に濁つて居ると思ふ。尤も隅田川や淀川位の水を、臺灣邊りでは美くしい水として取扱はれて居る方もあつた樣であるから、私の清澄と云ふのは、内地の溪流の水の如きを指したので、支那や臺灣のではない事を斷つて置く。又却つて濁水溪夫自身に於ても、本流は上流に至れば決して濁流ではなく、割合に美くしい水が流れて居り、濁流の源は支溪の万大溪である。

崖の鼻を廻り、又一しきり畑の中を走ると、集々へ達する。名の如く附近の物貨の集々地で、田舍としては、割合に活氣のある街である。尙一里許り行くと、道は再び濁水溪の畔へ出る。之より水裡坑迄の間に、過日來の降雨の爲めに、臺車道の破壞した所があるので、泥道を五六丁歩かされて仕舞つた。再び臺車上の人となり、十時三十分水裡坑に着。濁水溪は之より急に溪幅を狹め、流も一層急となつて、山ふところへ入るのである。新高山へ行くには、當所にて濁水溪を渡り、南方牛輾轆を經て、陳有蘭溪に入るのは前記の通りである。

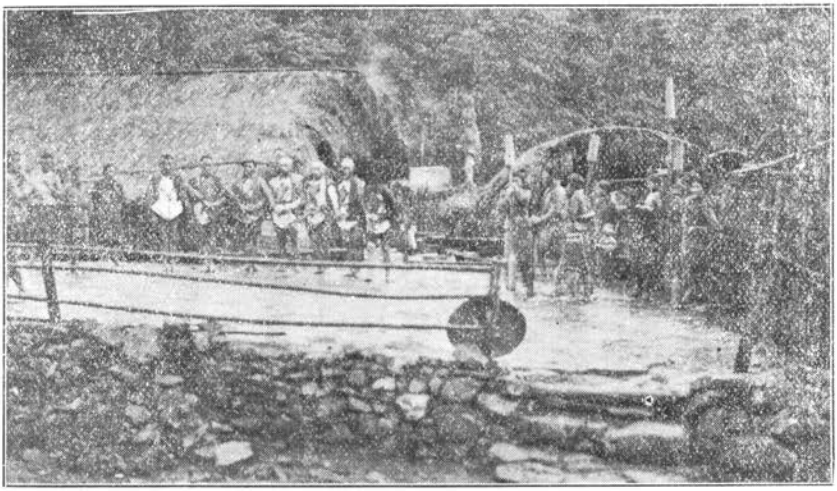
濁水溪を右に送り、支流水裡溪に入る。谿は狹く、流れは小さく、水のみは割合に澄んで居るが、景色は頗る平凡。道は登り一方となつて臺車の進みの遲いのと、風通しの惡い爲め、暑くつて頗る閉口。人家は殆どなく、稀に芭蕉畑の間に一二軒を見るのみ。山には樹が多く、美くしい鳥や蝶が飛んで居る。牛糞に群つて居る蝶も、内地の馬糞にとまつて居る樣な褐色の汚いのではなく、不釣合にも白や黑や赤で色採られて居る。一時間程行くと、土人の茶屋(蕃人に非ず)が道の兩側にあつて、バナヽや素麵などを鬻いで居る。二時間許りで新年庄に入る。臺車を待たして置いて、發着所に入り、晝

食を濟して、一時出發。溪は東に折れ、道も相變らず流れに沿ふて右へ曲る。景色は益々平凡。ヒラ〳〵と飛び交ふ蝶の外に、何等目を樂しませるものもない。一時三十五分茅埔(フンポ)着。水社より巡査補の賴氏の出迎あり、臺車を捨てゝ、臺灣人の人夫に荷を負はせて出發する。臺車道を四五丁行くと、右より日月潭から發する日月溪が合する。臺車道は夫を渡つて水裡溪に沿ひて埔里社へ。私達は日月溪の谿へと入る。怪しい空は遂に雨となつて、レーンコートで身體を包んだ爲めに、蒸暑い事夥しい。流れは急で、山も迫つて兩岸は絶壁をなして居る。對岸に移ると、そこに石印社化蕃が半裸體で釣をして居る。道はやがて流れと別れ、稍急な闊葉樹林中の登となる。然し坂は七丁にして再び坦路となり、行く事數丁にして釣橋を渡る。長さ二百五十八尺、高さ六十五尺。曰く思案橋とは、思ひ切つて俗っぽい名付方である。三時前日月潭西岸の水社に着。家は一軒。函碧樓と云つて、丘上に建ち、割合によい家であつた、家の附近より目下に湖が見える。山は雨に霞んで淡いけれども、翠は深く、湖上は靜かにして鏡の如く、頗る幽邃である。家の前の坂をダラ〳〵と降ると水社の駐在所だ。紹介された當の池田巡査は、熱帶性マラリヤに罹つて、臥床して居られたので、代理に村尾巡査に石印社見物の事を賴んで置く。天氣さへよくば今日中に見物する筈であつたのが、如何にせん此雨では、一歩も踏出す事が出來ない。小降となつたので家へ歸る。夕刻より濁水溪方面の雲が盛に活動を始める。雲が切れて、思はぬ高い所に、水社大山(海拔七千二百二尺)の頭が見える。湖邊は寂として鳥さへも囀らない。白い雲が翠岱をかすめて去る衣づれの音が、湖上を傳はつて耳朶に入る樣な氣がする。

日月潭は、我が北海道を少しく平たくした樣な形をして居つて、北東部の不規則の菱形の部分を日潭と稱し、其西南端より南へ入る細長き入江を月潭と呼び、兩潭の合ふ所に、楔の如く味仔山と云ふ周圍四五丁の島が聳えて居る。湖面は海拔二千四百六十二尺、周圍五里弱。取卷く山は、東南部の水社大山に續く山の外は、概して低く、湖面より五六百尺位しか拔け出してはゐない。然し黑き迄に茂

れる水社大山のあるために、山湖として充分の靜けさを保ち、幽雅の氣をたゞよはして居る。實に臺灣一の絶勝の地であつて、暑い臺灣で働く人達に取つては、是非共必要な避暑地であり、慰安地でなければならない所である。水も清冽と迄は行かなくとも、可なりの美くしさを有して居る、然るに此臺灣の仙境である唯一の天然公園も、近々開設する日月潭水電工事に依つて、大部分はメチャ〳〵にされるのである。工事の内容は、濁水溪の上流姉妹ヶ原の下流の所（濁水溪諸溪中、最も汚濁せる万大溪の合流點より下四五里の所）より、吾々が最も忌み嫌ふ濁流を隧道に依つて日月潭に流し込むのである。そして湖中の清魚を絶し、湖水を汚濁するを以て滿足せず、更に湖面を現在よりも百尺上げて、杵聲を以て名高き石印社を滅し、味仔山を水底に溺らすのである。山湖の價値は、水の清きと山の高きとにある、水面を上げて山の仰高を低くすれば、夫だけ幽邃の度を減じ、水が濁れば夫だけ清爽の氣を失ふのである。私は横斷旅行を終へて後、東海岸航行の船中にて、總督府の高等官某氏に會し、話が日月潭水電の事に及ぶと、某氏のいふには『成程日月潭は臺灣の勝地で、實に惜しいものである、然し更に大きく臺灣の産業の發展上の點から見れば、そんな事は些細の事である』と。貴官達は本島大發展の後に於て、人性を慰安する場所の最も必要なる事を更に御存知ないと見える。臺灣には落差の甚だしい、水の豐富な溪は到る所に見出されるのである。景勝の地の少なき本島に於て、殆ど唯一と云はるゝ勝地を犧牲に供して迄も、一ヶ所に於て幾万馬力の電力を求むるの要はないかと思ふ。

五月十二日。霧、雨後晴。霧雨のシト〳〵と降る中を、村尾巡査の案内で石印社化蕃の杵聲を聞く可く湖上の人となつたのは午前七時半。味仔山の横を過ぎ、凄き迄に靜寂なる湖上を滑るが如くに行く。翠黛細かなる山は、霧雨に煙りて淡く、水の中迄も茂れる湖岸の樹は、微動だもしない。寂漠を破るは只櫂の音のみ。舟は綠の波紋を殘して、靜かに石印社の入江に向つて進む。



日月潭石印社　（濱谷泰次郎氏撮影）

石印社の蕃人は化蕃と云つて、智識の程度は熟蕃と生蕃との中間に位し、己れ自らも生蕃に對して化蕃と稱して居るのである。熟蕃とは花蓮港廳及臺東廳下の平地に居るアミ族の如く、本島人と殆ど文化の程度の異ならざるを云ひ、生蕃とは現在の所謂蕃界に住する未開人種であつて、生蕃中にも臺東廳中の高山蕃の一部及臺中廳下シルピヤ山附近の蕃人の如き兇蕃と、既に殆ど他に危害を加へない歸順蕃とに區別せらるゝのである。

石印社に上陸して先づ蕃屋を見る。茅及竹造りの暗き建物で、屋内は土間。勿論腰かける樣なものもなく、其室の三隅に竹製の寢房があり、人の居る時は必ず燃火をして居るので、室の天井や柱などは、煤煙の爲め黑光に光つて居る。杵、臼、瓢其他炊事用の木器が雜然として並べられてある。やがて屋外で蕃衣を纏ふた五六人の女が、杵付きを始める。六尺前後の兎の杵の如き樫の杵を以て、直徑二尺位の偏平な石の上に、粟を盛り上げ、足で石の外に溢るゝ粟をかき寄せ乍ら搗くのである、然し今では只見物客に見せる時のみ此式を採るので、平時は普通の杵臼を用ふるのである。試に其杵を臺石上に落すと、石はボーンと異樣な反響を傳へる。夫が五六人各自に一個宛の杵を絶えず細かく交互に

調子よく石上に落すので、杵の長短に依りて、或は高く、或は低く、其靜かな哀調を帶びた杵聲は太古を色採る日月潭の山水に反響して、非常に快きリズムを耳に傳へる。傍で男の群の踊が始まる、手をつなぎ合せて飛廻るだけで、何等の面白味もなく、蕃人に相應しき原始的なものであつた。

數刻の後に吾々は石印社を辭して、再び湖に浮び出た。舟が可成り遠ざかり行く迄、石印社から傳つて來る太古の妙音を聞いた。現在の日月潭と共に、如何にしても永久に保存して置かなければならない臺灣の名物の一つである。

靜かなる湖上を極度の歡樂に醉ふたる人の如き快さを感じ乍ら、舟行を續ける。

## 埔里社を經て眉溪迄

湖の東北隅に上陸したのは午前九時二十五分であつた。村尾巡査と別れ、人夫と二人で、直に坂路にかゝる。登りは僅に五分で、後は降りのみとなり、タバン社の部落を過ぎ、九時五十五分臺車道に出で、右折して二三丁で、大林に達し、再び臺車に乘りて埔里社に向ふ。之より埔里社迄は殆ど降りのみ、七哩の行程は一時間二十分にて走り、十一時半埔里社へ着く。途中、埔里社耶馬溪と稱する溪流あれども、水清からず、山美くしからずで、何等の奇勝にも接しなかつた。

浦仔より埔里社迄、軌道三十四哩、約一日の行程である。埔里社は埔里社平原の約中央に位し、蕃界との接續點で、又附近の物貨の集散地であるが、臺灣製糖の工場の外に、名勝としては何もないのである。支廳に行きて支廳長木浦角太郎氏に面會し、氏の案内で埔里社特産館を見た。只の土産物丈で、蝶及蛇の皮の外に格別目新らしき物もなかつた。

日月館にて晝食を濟し、埔眉鐵道の臺車に乘りて出發したのは午後一時四十分。空はカラリと晴れ渡つて居るが、高い山のある方面には、未だ大分雲が屯ろして居る。東北に向つて進むこと約三十分

にして、右に一寸大なる谷（地圖には眉溪とあれども、眉溪は南港溪の上流の本溪卽ち今私が乘りつつある臺車道に沿ふ谿の事で、眉溪と云ふ地名もある）を送り、吳蚣崙より再び山ふところに入る。水は濁流ではあるが、谿は廣く、山も雄大で、左岸には闊葉樹が繁つてゐるが、右岸は樹が少なく、山容もゆつたりとして居て、山を蔽ふ雜草の靑々として居るのも、快き感を與へる。埔里社耶馬溪と稱して繪葉書に迄賣出されて居る溪流よりも、餘程氣持のよい谷である。人家も少なく、田や畑もなく、又人通りも至つて少ない。左の山腹に瀧を見る頃（三時十五分）より狹まつた溪は、釣橋を左に送つてから再び開げ、右より來る稍大なる澤を過ぎ（三時三十五分）、一しきり萠ゆるが如き闊葉樹の疎林の間を通り拔けて、四時五十分臺車の終點にして蕃界の入口なる眉溪（バイケイ）に着く。

## 霧社蕃界に入る

臺車の終點には、小家が一二軒ある許りで、霧社からワザ〳〵出迎に來て呉れた板垣巡査部長と、眉溪駐在所の巡査某氏と、蕃人の人夫の外に、人間は見當らず、頗る淋しい所である。人夫は玆より蕃人であつて、額に黥をした色の淺黑い、頰骨の出た、目のギョロ〳〵した男が、蕃刀を首にかけて裸體に蕃布を纏ふて立つて居る。隨分氣味のよくない形である。

此所より溪は二分し、左折するは眉溪の本流で、北上するは支流であつて、眉溪の駐在所は、支流の合流點近くの右岸にあるのである。吾々は本流に沿ふて進む。溪は急に狹まり、兩岸は見るも恐ろしき懸崖をなし、樹木は晝尙暗き程茂つて居る。流れは、穴の如き峭壁の底深く、岩を嚙んで奔流して居る。如何にダイナマイトを使つて、開鑿したとは云へ、かゝる所へ道路を附けた警務係の人々に對しては流石の蕃人も驚いた事であらう、而も道は頗るよく、もう少し幅を擴げれば、俥でも自働車でも通ふ位である。峽谷は約半里も行くと開けて北折し、草山の中腹を斜に登つて行く。途中で龜殼花（クヮカクホイ）

と云ふ毒蛇を見る。長さ三尺位で、茶褐色の割合に美くしい蛇であつた。

眉溪より一里半、一時間を要して、六時霧社に着、直ちに霧社支廳へ行き、支廳長長崎重治郎氏に面會して後、霧社倶樂部に入りて泊る、純然たる宿屋である。

當地は中央山脈合歡山（一萬一千二百尺）より西南に低下する尾根の一鞍部にあつて、西北は南港溪の上流眉溪に面し、東方は濁水溪の上流に臨んで居て、海拔三千七百五十尺。合歡山より續く尾根は、櫻ヶ峯にて八千百三十尺となり、タッタカ（霧社より二里强、眺望よく、臺灣第一と稱せらるゝ合歡の瀧を遠望する事が出來るとの話である）を經て霧社迄低下し、再び高度を增して、五千六十八尺の關頭山となり、獅魯凹山（五千三百四十六尺）となり、ラクラク山（五千九百八十八尺）大尖山（六千九百五十四尺）と漸次高まり、遂に日月潭の東に聳ゆる水社大山となり、再び低下して、濁水溪と水理溪との合流點に沒するのである。霧社の所在地は此支脈の中央より稍北部の最も低き峠の上にあるので、管内の住民は、各駐在所、支廳及夫に附隨する賣店の人達を除くの外は、殆ど蕃人であつて、最も多きはタイヤル及ブタンなどの種族であるといふ。

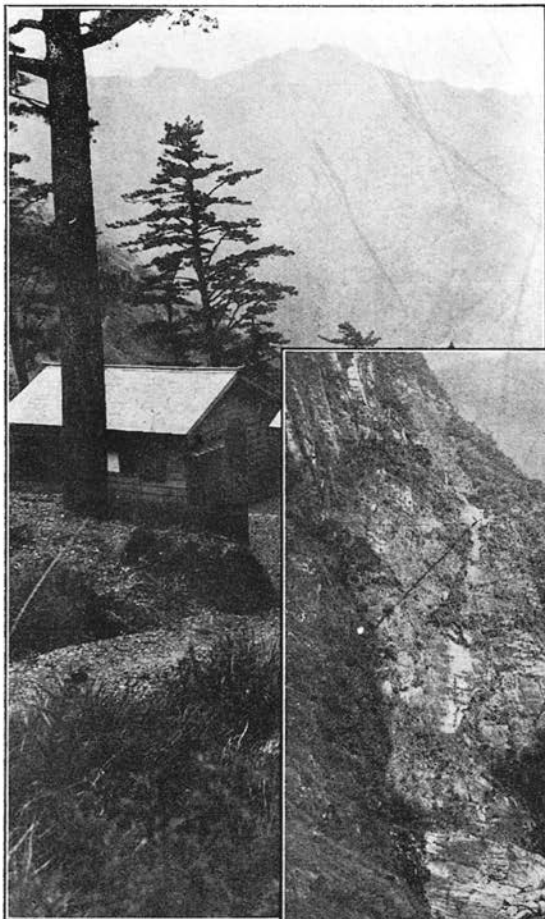
五月十三日。快晴。午前六時起床、直に東面の障子を開けば、流石三千七百尺の高地のこととて、濁水溪より吹き上ぐる朝の風は冷たく、渡臺以來始めて身體の緊張するのを覺えた。空はカラリと晴れて、東に聳ゆる一萬尺の中央山脈は、透明なる大空に屏風の如く連つて居る。眞東のドーム形の大塊は海拔一萬一千尺の能高山、北に續くは同じく一萬一千尺餘の蒋萊主山、南には濁水の溪上高く一萬九百三尺の千卓万山が、其岩頭を惜げもなく碧空に露して居る。しかし何れも雪は皆無く、山高きが故に貴からず、見た目には何等の感動をも與へない、此高度を飛驒山脈邊の高緯度の地へ持つて行つたならば、如何に美くしい山が出來上ることであらう。

九時支廳を訪ひ、板垣巡査部長の案内にて蕃童公學校を見る。現在の生徒男女併せて百四十六名、

何れも蕃布を纏ひ、裸足で、中には額に黥をして居るのも奇觀である。全級を四年に分ち、校長教授教授補の三人にて一切の學務を扱ひ、教課書などは、總督廳より特に發行された蕃童教科書を用ひて居る。程度は勿論内地人のに比して低く、四年と云つても二三年位の學力しかない。それでも全然數理的觀念を缺いてゐる蕃人に、五桁六桁の算術を教へ込まれた教員諸氏の努力は、並大抵の事ではないと思ふ。當公學校の設立されたのは、大正三年四月で、夫以前は蕃童教育所と呼んで居り、始は殆ど强制的に入學せしめし故、父母達は恰も人質に出す樣に感じて居つたといふ。勿論其時分から學費の一切は教育所で負擔し晝食さへも與へて居つたのである。尤も現今では、教育者諸氏の不斷の努力に依て、漸次好成績を擧ぐるに至り、好んで彼等から登校する傾向を生じて來たといふことである。授業は朝の八時から正午迄。生徒は一里二里も遠方から、山を越え谷を渡つて通學して居るのである、唱歌、國語、習字、算術などなか〳〵巧く、發音などは却つて本島人よりも明晰の樣に思はれた。

學校を辭し、南手の坂を少し登るとバーラン社蕃社に着く。霧社に最も近い蕃社で、茅葺の小屋が三々五々木の間に見すぼらしい頭を駢べて居る。蕃屋の周圍の下部三尺程は石を以て壘み、室内は入口より尙三尺も掘り下げてあるから、外見の低い小家も内部へ入つて見ると存外に廣闊である。しかし何れも煙の爲めに黑く光つて居る樣や、寢房家具農器などの狀態は、石印社で見たのと大同小異である、彼等は住宅の外に必ず床の高い倉庫を有して穀物を蓄藏し、之を開くのは吉夢を見た後でないと如何に饑えても辛棒するのである。普通一家には一夫婦のみ住ひ、子供が結婚すれば、必ず別居するのであつて、青年男女間には、野合の如き惡行もなく、其他一般の風習は、我が武士道に似寄りたる所が多いとの話である。

霧社へ歸りて、蕃物交換所を見る。蕃布・鹿皮・麻・穀物などありて、マッチ・色木綿・毛絲などと交換するので　其取引は悉く原始的の物々交換である。尤も普通商人には蕃人と直接取引をなす事を禁



上　尾上駐在所より見たる能高山

下　花蓮溪木瓜溪

濱谷泰次郎氏撮影

じ、若之を犯す者には二百圓以下の罰金を課するのである。當支廳管内に於ける蕃人の勞銀は、一日雇三十錢、山人夫は一里十五錢の割で、内地に較ぶれば勿體ない位安いのである。

目下の蕃狀は殆んど平穩であつて、只シルビヤ山を取卷く高山蕃の一部及新高山の南方臺東廳下の高山蕃の一部が歸順せぬのみである。併し一體に蕃人の首狩りは發作的に起るので、一度よい首であると思へば矢も盾もたまらず、急に相手方を蕃刀（長さ二三尺、内地の鉈に似て先の尖れるもの）を以て突刺し、苦悶する所を石の上に首を持つて行つて叩き切るのである。其外首狩の場合には、狩得た首を甌の上に乘せ、口より酒を注ぎ、其首の切口より血と共に甌の中へ流れ込む酒を、踊り狂ひ乍ら飲むのである。現今歸順して居る蕃界とても絶對に歸順したとは云ひ得ないのであるから、吾々が蕃地を旅行する際には、萬一を慮つて銃を持つた巡査諸氏の護衛を附せらるゝのである。しかし山中に於て、一度蕃人が蜂起すれば、到底護衛の一人や二人では何の役にも立たないのである。

倶樂部へ歸つて中食後、根元巡査の案内でタロワン社下の櫻溫泉へ行く、當霧社附近には櫻樹（内地のと少しく違ひ、赤い花が咲くそうである）が多く、それ故に櫻ヶ峯や櫻溫泉などゝ云々名を内地人が附けたのである。

道は所謂南投廳より花蓮港廳へ拔ける中央山脈横斷道路であつて、毎日一回の郵便が相互より發せらるゝのである。濁水の北岸に沿ひて行く山腹の道路は、内地の縣道にも比す可き坦路であつて、路傍には割合に眼界を遮る樹は少ないが、見渡す全溪は悉く密林を以て蔽はれ、翠の波を漂はして居る。行く事一里餘にして道は横斷道路と岐れ、右の方、溪へ向つて降ると間もなく濁水の溪畔に出で、夫に架せる鐵線橋を渡れば路の左、溪畔にタロワン溫泉なる櫻溫泉の浴舍を見るのである。私の今夜の宿舍なる櫻溫泉倶樂部は、橋の手前を左に折れた所であつて、溫泉守の夫婦と子供及臺灣人の下男が居るのみで、頗る靜寂なる場所であつて、見渡す溪間には此四人の外に蕃屋さへもなき所である。

浴舍は無人の小家で、水晶を溶した樣な湯（炭酸泉）の中にゆつたりと身を沈め乍ら、濁水溪を見渡す心地よさ、始めて深山らしさ透明な感がヒシ〳〵と身にせまり來るのを覺えた。溪は橋の下手より兩岸絶壁をなし、連日の降雨に濁れる銀灰色の水は岩を嚙んで流るゝ其凄じさ、夫が午後の日光に映つて時ならぬ銀鱗を飛して居る。湯の後の道はタロワン社に通ずる道で、蕃刀をさげたり、刺又（鳥を刺す竹製の槍）を持つた蕃人が煙草をふかし乍ら通る。裸で湯に入つて居る私は、思ひ出した樣に氣味惡さを感じ乍ら、周章として湯から上つて、倶樂部へ歸つた。時間は未だ早いのであるが、谿の深い爲め日は蔭つて、山の半面は既に暗く、見上ぐる青空のみは明日の好晴を保證する樣に冴え渡つて居る。臺灣でも山地には鶺鴒が飛んで居つた。

## 廳界線迄

五月十四日。晴、霧。午前五時起床。空は紺青に冴えて殘月は山の端に沈まんとして居る。釣橋を渡つて溫泉へ飛込む。玉の樣な湯を透して見る手足は蠟細工の樣に美くしい。日は未だ昇らないが、しきりに小鳥が囀る。激しい流れの音は頭の中の不淨分子を洗ひ去る樣に思はれた。

午前六時十五分、倶樂部の人夫に荷を負はせて出發する。道は直ちに急な登りとなり、雜木林や、粟畑の間を通つて、約二十分にして横斷道路に出る。日は漸く山の半面を照し始めて、能高山を紫色に染める。右手の谷底深く溫泉や、タロワン社の部落を眺め乍ら、道は稍下り氣味となつて、六時五十分濁水溪に架する一大鐵線橋に出る。高さ三百五十六尺、長さ二丁。溪に架すると云ふよりも寧ろ山から山へ渡す電線の樣に、恰も虹の如く山の翠を區分して居る。濁水の本流は溫泉の上流にて北折し、此釣橋の下を合歡山の方へ流れる。私達は夫より東へ岐れて能高山より來る支溪に沿ひて、尙も山の中腹を斜に登つて行く。途中で私の連れた臺灣人の人夫が、行交ふ蕃人と何か交渉を始め、遂に一蕃

人に荷物を渡して自分はサッサと歸つてしまふ。言葉は通ぜず、致し方がないから、少々氣味が惡かつたが、其蕃人に荷物を負はして前進を續ける。しかし其男は割合に親切で、途中で木の實を採つたり鳥の巣より卵を探し出してくれたりした。日は全く出て能高山のみ殊に傑出して見える。七時四十分ボワルン駐在所着。今朝倶樂部より電話で頼んで置いた人夫がなかつたので、郵便屋に能高迄荷物を持つて來て貰ふことにして、八時十分獨で出かける。道はよいし眼界を遮る樹も少ないから、眺望も至つてよく、從つて足の進みも早い。能高山、干卓万山などが著しき高さを以て屹立して居る。蒋萊主山南峰も高さに於ては夫等の山と大差はないのであるが、今自分が其一部に取ついて居る爲か、仰ぎ見る山容は頗る平凡である。右手對岸の谷底にマヘボ社、ブガサン社などの支流に沿ふ最奥の蕃社が見える。九時十五分トンバラ駐在所着。當道路に於ける最後の蕃社で、之より奥花蓮港廳曲水附近迄は駐在所以外に蕃社さへもないのである。

トンバラを九時半に出發する。大した登りもなく、氣味の惡い蕃人や、氣の張る護衛もないので、結局氣樂で思ふまゝに道草をし乍ら前進をつゞける。稀に蕃人に逢ふの外獸にも出逢はない。蕃人には必ず犬がお供をして居るので、ウーとうなつて來るから却つて其方が氣味が惡い位だ。間もなく左より澤が落ちて來て、夫に長さ三十八間の釣橋が架つて居る。又間もなく四十一間の釣橋を渡る。標高が大分增して來たので、所々に高山らしい針葉樹が茂つて居る。サルオガセや石楠も目につく、蝶も鳥も飛んで居る。又草地には躑躅も咲いて居る。又々二十六間の釣橋を渡つて、內地の唐松の枝幹に普通の松の葉をつけた樣な針葉樹の疎林に入ると、間もなく尾上の駐在所だ（十一時）。其林の間に見える草地は遠見には奈良の三笠山の樣に美くしい。能高山は谷を隔てゝ鼻を突き合さん許りに屹立して居る。夫から西へ續く尾根が割合に高い爲めに、新高山方面は遮ぎられて見えない。

此所には三組の巡査諸氏に數名の蕃人及本島人の隘勇が居る。隘勇と云ふのは當今では全然駐在所

の人夫兼下男であるが、以前支那領時代には、蕃人監視の爲めに隘勇線（警戒線）を設け、其監視人として內地の青年團式のものを集めて、これが警護の任に當らしめたのが起原であるといふ。

此所から能高駐在所迄約二里であるから、時間の餘裕も充分あるし、天氣も氣づかいないので、中食の御馳走になつて長い間遊ばして貰ふ。能高より中武、鳴尾兩巡査の出迎ひを受け、午後二時に出發する。稍急な坂を十五六分登り切ると、後は殆ど爪先登りとなる。高度を增して來た爲めか、少しの坂でも割合に息が苦しい。針葉樹が追々と多くなつて來て、一位や石楠の大木も其間に見受ける。リンダウ三葉ワウレンなども目につく。尾上で餘り長く遊び過ぎた爲めに遂に空は曇つてしまつて、霧が卷き始めた、しかし針葉樹の梢を霞める霧の景色も、久しぶりに接する高山氣分で、惡い感はしない。四十五間と云ふ釣橋を渡つて間もなく、三時四十五分、能高駐在所へ着いた。霧で全く見通しは利かないが、西南の方面には可成り多くの山が見えそうである。此所は海拔九千七百尺とかで、檜造りの立派な客室（八疊二間）があつて、三面はガラスを以て建て廻し、專用湯殿や便所なども淸潔で、夜具や丹然などはお蠶ぐるみとは少なからず面喰つて仕舞つた。如何な高貴な方が御泊りになるかは知らないが、一萬尺の山の中でこんな贅澤な眞似をしなくつてもよさそうなものである。內地では宮樣だつて山へ御登りになる時はお蠶ぐるみの贅澤はされはしまいと思ふ。石楠の床柱の前に坐つて巡査の奧さんの御手料理で、甘い夕食にありつくのは、內地の山では想像さへも許さない所で、馬鹿に贅澤な氣分になつてしまふ。

此所には警部補の薄井氏の外に三組の巡査夫婦と、數名の隘勇とが居つて、一萬尺の高所に一小部落をなして居る。位置は菁萊主山南峯の西南腹にあつて、能高山とは全く離れて居るから、菁萊主駐在所と云つた方が適當に思はれた。尤も花蓮港廳下に菁萊溪駐在所と云ふのがあるから、夫と間違へない爲めに斯く名附られたのかも知れない。霧社より八里八丁。一日行程としては頗る容易である。

五月十五日。霧雨。晴。天氣が氣になるので夜半に起きて雨戸を繰つて見ると、空一面星がまばゆい程輝いて居つたので、安心して再び朝迄眠る。然し朝起きて大粒の霧雨を飛ばす風が、ヒュー〳〵と檜の梢を鳴らして居るのを見た時の怨めしさ。がつかりしてしまつて一日滯在しようと思つたが、既に花蓮港廳の聯隊山（連帶山とも書く）駐在所より廳界線迄出迎ひの巡査が出發されたと云ふので、仕方なしに鳴尾巡査の後に就いて八時五分出發する。

道は駐在所の後より直ちに急な登りとなる。本道は駐在所より南へ中央山脈の菁萊主山南峰と能高山との釣尾根の最底部を迂廻して本路と合するのであるが、餘程遠くなるから現今では殆ど通る人がないそうである。

流石一萬尺の高所の事とて息苦しい事夥しく、又歩みも頗る重い。八時二十五分森は開けて草原となり、尙五分にして池の端なる花蓮港廳と南投廳との境界に着く。一帶に緩傾斜の草山であるから、晴れた日には眺望はよさそうであるが、霧の爲めに何一つ見えず、只谷底から吹き上ぐる寒い風の音を聞く許りである。折角の一日が此雨では致し方がない。下で想像して來た三十幾座の一萬尺の大山岳の展望は全く不可能となり、山へ登り乍ら山を語る資格がなくなつてしまつた譯である。眺望は皆無ではあるが夫れでも高山に居ると云ふ氣分だけは味ひ得た。然し內地の山の七八千尺位の所に居る感じしかなかつた。

廳界點には兩廳より毎朝登つて來る蕃人郵便人夫の郵便物交換所があつて、小さくはあるが雨露をしのぐに足る小家がある。

## 最高點を越ゆ

聯隊山駐在所よりの出迎ひの巡査と共に、菁萊主山南峰の東南面を斜に登つて行く、地勢は急に變

じて今迄の草山は斷崖を横切る岩石道となり、鋭く薙ぎ落されたる山壁には針葉樹が黑々と茂つて居る、勿論深き底は霧で見えないが、木瓜（モッコ）溪の上流、菁萊溪の西股の上流に臨んで居るらしい。九時二十分海拔一萬七百五十尺の本道路最高點に達する。日本アルプスの最高點白峰北岳よりも高きこと尚二百餘尺、然し今自分がそんな高山の上を通つて居ると云ふ感は少しも起らなかつた。鳴尾巡査と別れて降路につく、急な坂路は凄き迄に茂れる針葉樹の密林深く續いて居る。十時五分聯隊山駐在所を右下に眺め乍ら、尚も森の道をひた降りに降る、聯隊山より小一里で朝日駐在所着、此所には可成立派な客室を存するので、泊るには都合がよい、廳界から二里强である。

十一時出發。森林の中の道は、降つても降つても容易に盡きそうもなく、益々深くなる許りである。石楠の花が思ひ出した樣に、萬綠中に淡紅一點を染めて居る。所々に「此邊毒草あり注意」の立標を見る。一度龜殼花の毒蛇に出逢つた外は、人間は勿論、獸にさへも出逢はない。午後十二時二十分、菁萊溪の畔へ出て、長さ四十七間、高さ七十二尺の鐵線橋を渡る。橋の直ぐ上流に四五丈の瀑布がある、溪の奥は菁萊主山であろう、山巔は見えないが、恐ろしい絶壁が、谿を壓せん許りに峙つてゐる。

橋を渡ると緩傾斜の登りとなり、日が照り始めて、そろ〳〵暑くなつて來た。十二時四十五分菁萊溪駐在所着。地圖には溪の西に記載されて居るが、夫れは誤である。天長山峠の直下にあつて、菁萊溪に面する山岳を見るにはよい所で、霧さへなければ、能高山も見えるらしい。兎に角浮世から離れた靜かな別天地で、美くしい客室もあるから、泊めて貰ふにはよい所である。私も船の都合さへよかつたら、是非一泊したいと思つたが、花蓮港の新聞によると、十五日北行、十六日南行出帆とあるのでやむを得ずバトラン迄降つたのである。

能高で貰つて來た半煮の辨當をつかつてから、一時三十五分出發、此所迄は荷物は郵便屋に托したのであるが、之れから先は各駐在所の蕃人（即隘勇）が次から次へと屆けてくれる、道は稍急であ

る。二時十分七千二百尺の天頂山の頂上を通過する。山と云つても實は峠で、菁萊主山から東南に低下する尾根の一部である、降路は約十分にして天長山駐在所着。十分間休憩した。

菁萊溪南岸の山に屯して居る雲が盛に活動して居るのを眺め乍ら、尙も密林中の急坂を降り、三時十分萬兩林着。もう此邊迄來ればサカヘン社などの蕃社も近く、大分人里に近附いた氣がする。三時二十分出發、森林も稍開け、降路も大分樂になつて來た。四時曲水駐在所着。十五分休憩。夫より下は樹も疎になり、所々に畑などがあり、又時々蕃人にも出逢ふ。一しきり稍急な坂を降ると、山の蔭の平にあるバトラン駐在所へ着く（五時十五分）。此附近での大きな蕃社で、蕃物交換所などもある。旅裝を解いて早速湯に入り、山中としては勿體ない位の甘い夕食を御馳走になる。

能高より行程約九里、即ち能高最高點約一里。夫より聯隊山迄約一里。朝日迄約一里。菁萊溪迄約二里、天長山迄三十丁。萬兩林迄三十丁。曲水迄三十丁。バトラン迄一里半。

## 木瓜溪に沿ひて

五月十六日。半晴、半曇。天氣は大してよくもないが、降る心配はなさそうである。然し奥の方の高い山は密雲で鎖されて居るから、昨日能高で滯在しても、今朝の眺望は駄目であつたであろう。

昨夜一所に泊り合せた花蓮港廳の永代氏と一緒に午前七時五分出發する。此駐在所の奥さんは大變親切な方で、山から降りて來た私に取りては連日の疲勞を一日で醫する思ひがした。

昨日の降りで足を痛めたので、少々歩きにくい、坂を降り切つた所、木瓜溪と北より合する支溪との出合の本流の方に、石門橋釣橋が架つて居る（高二百十六尺、長さ五十六間）。菁萊溪は何時しか名が變つて、もう此邊迄來ると木瓜溪と呼び、初音の東にて花蓮溪に合して海に注ぐのである。水も割合に清澄で、景色もなか〳〵捨難き趣がある。七時四十五分瀧見駐在所着。十五分休憩。溪の兩岸は

頗る高く、綠黝の森林を以て蔽はれ、溪に面せる絶壁は白骨の樣な肌を露はして居る。道路（右岸に沿ふ）より俯瞰する溪は夥しき深さで、岩に激する流れは頗る壯烈である。八時二十分万代橋を渡る、長さ一町二間、高さ二百九十六尺。右岸の大峭壁の中腹に渡せる橋で頗る奇觀を呈してゐる。道も絶壁の中腹を走る細徑であつて、一歩を過てば千仞の谿底に逆卷く激流の泡とならなければならない、實に蜀の棧道も啻ならざる所である。

万代橋　（濱谷泰次郎氏撮影）

谿は稍開けて九時烏帽脚（ウボーキヤク）駐在所着。十五分休憩。之より下流は山の傾斜も緩み、流れも廣まり、九時五十五分赤壁駐在所を素通にして、十時十五分銅門駐在所に入る。此所に始めて酒保ありて、サイダー・ビール・鑵詰など一寸した食料品を鬻いで居る。駐在所も木瓜溪域での最大のもので、駐在される人の數も多い。

夫より山は開けて景色も平凡となり、釣橋にて對岸に移り、川床の坦道を行く事約一里にして蕃界最後の初音駐在所に着く、時に十一時二十分。途中、榕樹溪の駐在所を左に見る。

全く山から離れて、茫々たる花蓮港の草原を、臺車にて二十分東行して初音驛に至り、十一時四十

四分の汽車にて花蓮港へ向つた（行程約五里）。

## 後記

私の通つたのは臺灣の山岳のホンの一部分に過ぎず、且又肝心の山巓は霧で展望することが出來ず、誠に殘念であつたが、山に對する感想は割合に平凡であつた。一體に蕃地に駐在する人々は、高度に於て景色に於て、內地の山は臺灣の山の足元へも寄りつけない樣に思つて居る。しかも官廳の報告には、內地に一萬尺以上の山は、富士を筆頭に北岳御岳など合せて、七座しか載つて居ない、どう云ふ所で調査したのか知らないが、私の記憶では十一二座あつた筈だと思つて夫を主張すると、『何に、御役所の報告に七座とあるもの』、お前の樣な素人が何う云つたつて駄目だと云はん許の調子で、又內地で最高の富士山でさへも、臺灣の山を踏破した者には屁でもないと云つた具合であつて、てんで內地の山岳は眼中に置いて貰へないと云ふ有樣であるから、如何に飛驒山脈や赤石山系の雪の壯觀、裸々たる岩山の雄大なる事を說明しても、こう云ふ人達に取りては只高いと云ふ一點をのみ頭に入れて、夫より低くければ從つて登り易く、景色も平凡であると斷定を下すので、實景を目のあたりに見せない限りは、到底信じないのである。實際德本峠の上に立つて穗高山を見たり、或は新越乘越邊から望む立山劍岳の如き壯烈なる印象を與へる山は、臺灣に於ては初春に於ても全然ないと斷言し得るのである。只私の感じたのは、谷深く嶮しき爲め、絕壁や釣橋のすばらしいのと、森林の美くしさとである、然し內地にだつて黑部川や野呂川の如き深谷もあれば、又森林美と云つても上河內に比べては到底問題にはならないのである。其他霧社方面の蕃界の狀態なども吾々には目先が變つて居つて面白く、日月潭の杵聲も忘れられないものゝ一である。

地圖は參謀本部の二十萬分の一の圖があるが、臺灣では品切であつた、よしあつた所で蕃界へ入れ

ば殆ど參考品に止るのである、私の持つて行つたのは總督府教育會で發行した三百萬分の一の地形圖で、全島を四枚に分ち、全部で一圓五十錢であつた。內容は三百萬分の一であるから推して知るべしであるが、割合によく出來上つて居つた。私の通過した道筋では、花蓮港廳方面の蕓萊溪駐在所の位置が溪の西岸に記してあり、夫より下の蕃社や駐在所の位置も誤つてゐた。地形は割合に似て居るといふ程度に於て正確と云ひ得るのである、尤も現今では大部分測量も了つたとの話であるから不日五萬分の一の正確なる地形圖が發行されることゝ思ふ。

# 秩父行

田部重治

## 多摩川の水源

梅雨が明けてから間も無い頃、甲府平から見える筈の山々は、處々、白い綿のやうな雲に蔽はれてゐるが、雨だけは、茲、四五日の間は來さうにも無いと考へらるゝ落付いた空模樣に、朝の四時二十分に鹽山着の汽車から降りて、翠綠は輝やく朝の空を、凉風に着莫蓙をそよがせながら、雲峰寺の山門まで足を輕らかに運ばせる。山門の前の茶屋の戶障子に、うどん、酒肴と書きつけてあるのに心ひかされてはいる。腰をかけながら、うどんの出來るまで待つ間に、一つ二つこゝらの地理をきくと、主人の話はそれからそれへと絲を引くやうに中々面白い。

こんな高い處でもずつと以前に洪水があつて、其の爲めに家が流されたことも知らずに旅をして、

宿屋に呑氣に寢ころがつて居たことや、其時、雲峯寺の前の信玄の隱し湯も一所に流されて仕舞つたが、其湯はあゝして放つて置くことが惜しいほどよく利くことや、嵯峨鹽の鑛泉が此處から二里しかないこと、それから話が、昨年獨逸人が秩父の方へ山越をした時、東京市の水源に毒を流さるゝ恐があると云つて、山梨縣の警察署では巡査を尾行させたと云ふことまでに飛ぶ。

茶屋を出て峠に急ぎかゝると、途中草イチゴが澤山實つてゐる。廣からぬ道を馬とのすれ違は可なりうるさい。峠道はじりじり上りに可なり良く續いて、未だか未だかと見返りながら登つて行くと、富士が後ろに見えて、殘雪が頗ぶる多い。峠の頂上から流れて居る流れが無くなりさうで、中々無くならない。丁度水が無くなる時分に、左右の山嶺から山鳩の聲や、カッコウの聲がして、山は愈々靜かである。頂上についたのは八時半で、行く手には秩父の破風山の優秀な姿が見える。

多摩川水源保護の植林のため、柳澤峠の頂上から殆んど高低なしの道を山側に沿うて將監峠まで作られたことが、私等には何よりの幸ひであつた。今迄は峠から落合まで降つて、それから高橋、一ノ瀨二ノ瀨三ノ瀨と上つたり下つたりして、やがて、又、將監峠にかゝると云ふことは、一通りならぬ骨であつたのが、此道が出來てからは多摩川の水源を山側に沿うて、ぐるぐる廻りながら眺められるやうになつた。下の茶屋で問うた時に、「峠の頂上から將監までは四里もありませう」と云ふ答をきいて本當に嬉しかつた。全く、峠から上り下りして將監峠に向ふよりは、一里位は遠廻りしても、面白い景色を眺めながら山側を廻ると云ふことが、遙かに有難いと想はれたのであつた。

頂上から左へ其の新らしい道に沿うて這入つて暫らくすると、所々道が崩壞してゐるところがある。山側には未だつゝじが澤山赤く咲いてゐる。多摩川上流の村々から上つて來る右の方の道へは眼も呉れずに、只左へ左へと山側を迂ねつて行くと、やがて水神社へ登る小徑が分岐するところへ來る。こゝらでは道の上から來る冷水が澤山小さな溝を作つて流れてゐる。私等はこゝで一休みした。もう其時

は一時半であつたが、今までに途中水の有るところでは乾麺麭を喰つて居たので、餘り腹が減つて居ない。此處から見た多摩川の源流は谷一つぱいに翠綠に埋もれて、黃葉の秋の美しさを憶はしめる。水神社のある附近は圓々として草山靑々と重なり合つて、つゝじにあやめが一面に咲き亂れてゐる。多摩川上流一帶の山々の眺望は可なり複雜で且つ雄偉で、大菩薩一帶の山々及び秩父國境の山々は、黑々として、其間に幽暗な神秘境を形ち作つてゐる。

こゝからしばらくすると山側は右の方へぐるりと廻つて、針葉樹の間にはいる。深山に這入つたやうな心持がやつと味はれるやうになつた。ところどころ四五人位這入つて泊れるやうな小舍が殘つて居るのは、此の道を作つた當時の名殘のものであらう。唐松尾、牛王院等の山側を迂ねつて將監峠についたのは三時過ぎであつた。慥かに柳澤峠からは四里には遠いと想はれた。

## 瀧川谷

將監峠に立つて秩父の方を遠望した人は、行手遙かに重なり合ふ山又山、悉くが黑々とした針葉樹に蔽はれてゐるのを見て、殆んど氣が遠くなるほどの奧深さを感ずるであらう。慥かに此處から見た秩父深林の美はしさは、十文字峠、雁坂峠に優るものがある。此處から秩父へ行くには道は二つあつて、其右を取り大洞谷を直接に下つて三峯に達するか、さも無ければ左を取つて、やがて右折して惣小舍谷を降り、大洞谷の道に合して三峯に達するか、或は左の道を行つて、やがて左折して瀧川谷に下つて栃本に達するかしなければならない。

私等は瀧川谷を下つて栃本へ拔ける考へであつた。將監峠から左の道を取つて、五六町行くと、仙波ノ小舍がある。小舍は約三四人を收容するに足り、其の傍から淸水が湧いて居るので、野宿には申分がない。將監峠からこゝらあたりまでの大洞川に沿ふ栂の林は、秩父でも外では見られぬ整然たる

林相をもつて居る。仙波ノ小舍から五六町行くと、徑は二つに分れて、右すれば惣小舍谷に降つて、やがて大洞林道に合し、左は瀧川谷に降り込むのである。丁度こゝへは將監峠から三十分を要した。右の徑は分岐點から直ちに降り込むのであるが、左の徑は嶺を少しく登つてからやがて激しく降るのである。瀧川谷の存在は殆んど秩父を語る人には認められて居ないが、それは此の谷は殆んど如何なる出達點からも隱されて居る位に巧妙な幽隱な地位をとつて居るからである。此の溪谷に降り込まうとする人は、向つて行く栃本は何れに存してゐるかを語ることは出來ない。只底暗いほど黑々とした雄大な溪谷の彼方に十文字峠らしき紫色がかつた山の姿を幽かに認めるのみである。徑は激しく降るが、降り切る底は見えないので、絶えず不安の心持にされる。やがて小さな溪流があらはれて、しばらくそれについて行くと、やがて、又、それと別れる。それから先は、徑は山側のみを行つて居る。しかし徑と云つても、山側を削つて作つたと云ふよりも、岩角や樹の根の間に丸太を置いて、それを通るやうにしたところが多いので、氣疲れが甚だしい。棧道又棧道が絶壁を行くので、歩行が頗ぶる遲い。私等は可なり高低のある徑を行つて、丁度、六時頃に水晶谷の溪流のほとりに出ることが出來た。多摩川の上流を溯ぼつて直接に鴈峠を越えて、こゝへ出ることも出來るのである。溪流には架橋があつて、其手前に破れ小舍がある。こゝから先は徑が激しい登りになりさうなので、此の小舍に野營することと決した。勿論、私等の計畫は鹽山から一日の內に、出來べくんば栃本までも行きたいのであつたが、睡眠が不足であつたのと、柳澤峠から將監峠までの間が、豫想外の時間を取つたのと、瀧川谷の降りが思つたよりも急で、徑が惡いのとで、すつかり豫定が狂つて仕舞つた。携へて居た食物は乾麵麭だけであつたが、それは可なり豐富であつたので安心だつた。外に砂糖をもつて居て、飯盒で砂糖湯をこしらへ、乾麵麭を浸して喰つた。メリヤスのシャツ一枚の外には、別に寢具は持つて居なかつたが、燃料が割合に豐富なので、餘り寒い思ひをしないで能く寢た。

翌朝五時小舍を出て釣橋を渡つて向うへ登りはじめた。私等の寢た谷は山と山との間に抱かれた狹いところではあつたが、蔭の幽隱な、溪流の美はしいところであつた。水晶谷はこれから先は盛んな瀧の連續を以て深い溪をころげ行くらしいが、溪は急に且つ深い林の間を行くので何物も見えない。只、ワナグラ山の急峻な側面の林相は目覺めるほど鮮やかに美はしい。これから先は徑が激しく登つて、やがて栃本から廣瀨へ通ずる雁坂新道と合してから俄かに道らしくなる。豆燒澤の架橋を渡る前に徑は下つて、やがて又登りになる。途中二人の岩魚釣に會うたが、もう栃本へ一里しかないとのことであつた。しばらくすると植林があらはれて來る。雁坂舊道と合してから間もなく瀧川谷と入川谷との合流點に達し、もう栃本が間もない。栃本の大村方へ這入り込んで、晝飯の用意を賴んだのは、九時半頃であつた。瀧川谷の入口から見た壯大さは、其林相が大洞谷のそれよりも劣つてゐる爲め、這入つて見ると聊さか減がれる感じがする。しかし、それは慥かに林相を味ふよりも寧ろ溪谷の雄大な輪廓を見て樂まるべき種類に屬するものであることを感ぜしめた。

## 十文字峠

栃本の村も農科大學の寄宿舍が出來てから、聊さか面目を新たにして、大村方の湯殿も改造されてゐる。晝餐を終へてから梓山さして出掛けたのは、十時四十分であつた。梓山までそれからは遲過ぎるとは知りながら、連れの石坂が日程を急いでゐるので、遲くとも今夜中には梓山まで强行しなければならなかつた。兩面神社から、愈よ、峠にかゝると中々暑い。私は此峠を通ることがこれで五六度にもなるが、栃本から梓山へ越すのは今度で二度目で、其外は梓山から栃本へ越したこと計りである。栃本からの方が殆んど登りの連續であると云つてよい。水が一二箇所あるが、それは峠の丁度半ば位ゐの處にあるので、それまで中々我慢し切れない。大村方で聞いた時、峠を約一里位行つたところに

石地藏があつて、そこから荒川の方へ一寸下り込むと水があるとのことであつたが、降つて又登るのは面倒なので、其儘通過して仕舞つた。鶯の聲は遠近に聞える。此峠が江戸への近道と云ふわけで、日に百人許りの通行人があつた頃、茶屋があつたと云はれて居る白妙岩は、栃本からは約二里で、此の峠の内の最も眺望のよいところである。此岩の存在は、注意しなければ、氣が付かないで、通り過ぎて仕舞ふ恐がある。それは道から左の方へ約五六歩登れば達せられるやうに足跡がついてゐる。丁度私等の辿りついた時は、日がかんかん照りつけて、岩の上にじつと坐つて居ることも出來ないほど暑い。淺間山や八ヶ岳が手に取るやう見えるが、北アルプスは今日は白雲の爲め蔽はれて見えない。荒川の溪谷の山々は五月とはうつて異つて、一面に黑々とした深林で根元までも蔽はれて居る。白妙岩から少しく行つて蔭のあるところで休んでゐると、一人のカルサンを穿いた男が、信州の方から忙しさうにやつて來て、私等の傍に腰を下す。水のある處まで未だ遠いかと問へば、

「未だ未だ餘つ程ある。とてもえらい峠だ。お前さんがた、今日中にや、とても梓山までは、六ヶ敷いだ。」

と忙がしさうに云ふ。

此男は梓山の落合から栃本の向ふの落合へ引越す積りで、栃本の向ふの落合の模樣を見に行くのであるが、生業が理髮師だけに、鏡を脊負つて此峠を通ることを考へると、今から心配になると云つてゐた。

此男と別れてから隨分急いだ。約一里半位で右の岩の下から清水が流れてゐる。朝からの渴を此處で心ゆくばかりいやして行く。峠は益々幽に梅の林はいつ行つても盡きることを知らない。處々倒れた樹木の切口に通行人の名や、呑氣な俳句などが墨で書きつけてある。丁度、峠の頂上から十町ばかり手前の嶺の窪みにさしかゝると、向ふから五十位の人に會ふ。峠の頂上までの距離を問ふと、私の

疲れた樣子を氣の毒に思つたらしく、「もう近いですが。如何です、此の下の小舍で御泊りなさつたら。風呂も沸してありますし、疊も新しく入れてありますし。」と親切に云つて呉れたが、連の石坂が二三町先に行つて仕舞つてゐるので、跡を追ふより外に仕樣がなかつた。

丁度、此の窪みから股ノ澤の方へ切分が出來て、そこで下駄の材料を切り出す小舍があるのであつた。道理で、斧の音が間近くに聞えてゐる。峠の頂上についたのは、六時半であつた。登り下り七里の殆んど栂の幽林で蔽はれて居て、時々疲れた時分に、右に中津川の溪谷を、左に赤澤、股ノ澤、眞ノ澤等の溪谷を展開して見せた峠も、もう一里近くで終りを告げるのであつた。もう左に音をたてゝゐるのは千曲川の上流である。

## 梓山

徑はそろそろ降りはじめる。段々降りが急になると溪流の音が幽林の間に聞えて來る。夕日は栂の間にさし込んで、其根元にある羊齒が赤く染め出される。峠を降り切つて八丁ヶ原に降りついたのは七時であつた。徑は大分變つて八丁ヶ原に降りつくところは、以前の徑よりは一二町上流に位してゐる。原は昔のやうに美はしく、見返へる峠の木立は舊の如くに水々しい。八丁ヶ原を過ぎて戰場ヶ原にかゝると、月は三寶山のほとりに出て、宵の明星は行手の空にきらめいてゐる。戰場ヶ原の立木がすつかり切られて、無殘な殘骸を殘してゐるに過ぎないが、尙ほ殘れる落葉松は長い影を地上に印して、千曲川のほとりには、白樺の林が月にぴか〳〵光つてゐる。梓山の村近くに徑の左にあつた白樺の森は、今も尙ほ殘つて、月の光が其間に霜のやうに輝やいて、山ぎは近くに水鷄の音が頻りとしてゐた。疲れた足を引ずつて信陽館に著いたのは九時前であつた。

合宿の御客さんが、ランプ屋さんと木こりとで、私等と合せて總勢四人であつた。蕎麥の出來たの

西方より見たる三峠山最高峰　又木周夫氏撮影

があることを聞いて、それを喰つて、床に就いたのは、十時前であつたが、其夜は疲れて居たにもかゝはらず、神經が過敏になつて、中々睡られなかつた。同宿のランプ屋さんが、眞夜中に聲張り上げて、寢言にうたを歌ふやら念佛を唱へるやらするので、眼がさめがちである。

## 八ヶ岳の裾野

明くれば今日も空は申分なく晴れて、山々の翠綠は未だ若々しい彩どりを見せてゐる。今日は千曲川に沿うて、やがてそれと別れて八ヶ岳の裾野を長坂まで辿つて見やうと云ふのである。梓山の寢られぬ一夜も、朝の空のさら〳〵しいのに、頭の中までも覺めるやうな心地がする。秋山を經て居倉の手前の小高いところから八ヶ岳の横岳、權現岳が雄偉にあらはれて、裾野は青く只飽くまで青くのびのびと擴がつて居る。居倉と大深山との間で、小川山が大きな黑々とした姿をあらはに圖拔けしめ、千曲川の沿岸では水田の蛙の聲賑やかに、河原には一面に待宵草が黃色く咲いてゐる。原、御所平を經て樋澤から八ヶ岳の裾野にかゝつて千曲川と別れる。長坂に向ふ道は、板橋川を渡つて少しく行けば左に分岐してゐる。右は海ノ口に向ふのである。私等は左に板橋に向つて進んだ。これから先は全く八ヶ岳の裾野の人となつて仕舞ふのである。

しばらくすると道は樹間にはいつて、遠くに鷄聲が聞える。八ヶ岳の赤岳が殘雪を中腹にもつて眞近くに立つてゐる。板橋の村が俄かにあらはれて來る。もう十二時過ぎである。村は甲州街道に沿うて細長く連つて、二軒の宿屋と一二の飲食店とをもつてゐる。こゝは海拔四千尺以上、八ヶ岳の赤岳へは最も近いと云はれてゐる。私等は、あちこちで晝飯の用意を斷はられた擧句に、とある農家らしき家でこしらへて貰つた。東京の淺草で生れたと云ふ三十許りのカルサンを穿いた女の人の料理で、晝飯を喰つて、こゝから二里先の國界へ急いだのは一時であつた。私等は益々裾野へ深く這入りつゝ

あるのであつた。私等は髪のやうに直い三間幅の大道を、八ヶ岳の雄偉な姿を右にして、金峯、小川山に續く嶺と野邊山原の涯しも知らない青々とした高原を左にして進むのであつた。此の雄大な望洋たる高原の趣致をあらはすには、如何なる形容も適當でない。處々、幅一間位の流れが、草と雜木と桔梗と、女郎花との間を輕らかな音を立てゝ走つて居る。國界に近くなつて道は、しばらく乘越のやうなところを通ると、そこには小舍があつて、あたりに材木が積み上げてある。之は八ヶ岳の深林を切り出してゐる所であつた。乘越のやうなところを越えると、道は迂ねつてやがて大門川を渡ると國界の村につく。こゝは板橋と同じく海拔四千尺以上、人家は僅かに四五軒で、內一軒は飲食店で、あと一二軒は宿屋である。之等は皆、裾野を行く馬子や行商人の爲めに存してゐるものである。茫々たる裾野の一角に一年の大部分を寒風に晒されつゝ、之等は何の快樂を求めて、こゝに集へる人々であらうか。汽車が未だ甲府から諏訪の方へ通はぬ以前には、此の街道が可なり賑はつたのであるが、それが今や段々寂れて、裾野の村々は一軒去り二軒去りして、只、ほんの村の面影を止めて居るに過ぎないのであるとのことである。此處に殘れる家々は、祖先の昔からの土地を離れがたない人々のみである。私等の道をきいた飲食店では、四五人の馬子が酒を飲んでゐた。私等はこゝから少しく街道を離れ、裾野に深くはいり込み、川俣の部落を訪づれて、やがて井出ヶ原に拔け出る積りであつた。國界から二つ目の澤を上つて念場ヶ原にはいつて、川俣村に急いで行くと、徑は慥かにあるが、地圖にある家は見當らない。恐らくは地圖にある二軒の家はいづれかの窪みか、樹間にあつて、私等の眼にははいらなかつたのだらう。茫々たる裾野の一角に僅か二軒の家を以て形づくられた一つの村よ！

徑はやがて川俣川を渡つて登ると、上には用水が流れてゐる。そこから更に上ると、徑は二つに分れて、右を行くと井出ヶ原にはいる。草原を徑は色々に分れてゐるが、成るべく右を取つて急ぐ。やがて徑には澤山の草イチゴが一面に實つてゐるところがある。未だ時刻は早いので其を喰ひながら行

く。行く手には針葉樹の丘陵が左右に連なつてゐて、徑が其を兩斷するのかと思つて近づくと、急に其は左に折れて、しばらくすると、俄かに水田があらはれて來る。私等は斯うして西井出村で甲州街道と合して仕舞つた。そこから長坂まで二里の道はすつかり平々、凡々。唯、其間の村々のよく開けて居るのに驚かされる。長坂の停車場附近は新開の地らしく、盛んに新らしき家が建てられてゐる。停車場の前のウドン屋へはいり込んだのは、正に八時頃、すゝけたランプは暗いことおびたゞしい。其夜の汽車に乘つて、東京へ着いたのは、翌朝未明の頃であつた。(大正八年七月)

# 三峠山

又木周夫

## 一

三峠山といふ名は、最近まで殆ど知られて居なかつた。然し山その者は可なり以前から注目されてゐたことは、「山岳」第八年第二號所載の「東京郊外池袋より望める秩父群山」と題するスケッチに、毛無山として記入されてゐることから推しても想像するに難くはない。それではなぜ三峠山が毛無山と誤記されたのであらうか。陸地測量部發行の輯製二十萬分一「甲府」號には、河口湖の東北で正しく此山に相當する位置に三ツ峠山と記入してある。然るに地質調査所發行の二十萬分の一地形圖「甲府圖幅」を見ると、此山と思はれるものに毛無山といふ名が記され、其東微北に此山の別名三嶺山が書き入れてあるが、勿論毛無山の方が標高が高いから、之を主峯と見るのは正當な見方である。聞く所に依

ると彼のスケッチに顯れた山名を定める時、三ッ峠山と毛無山と孰れを取る可きかに就ては、輯製圖の方は初から問題とならずに、地形圖の毛無山が採用されたのであるといふ。所が地質調査所の二十萬分一「富士圖幅」にも、甲斐國志の所謂櫛代山と思れるものに毛無山の名がある、それで兩者を區別する爲に之を西毛無と呼び、前者を東毛無と稱するに至つた次第であらう。

此山の展望は或は櫛代山には一籌を輸するかも知れないが、尙ほ非常に良好であらうとは、東京市中又は近郊から、若しくは小佛高尾の附近から、此山を遠望したことのある人に早くから矚目されてゐたのは事實である。けれども大正三年の正月小倉伸吉君が登山されたといふ話を聞いてから五六年を過ぎた今日、依然としてこの名山に登る人の少ないのは、此山の眞相が未だ充分に世に知られない爲であらうと思ふのである。

## 二

三峠山は、三嶺山とも、三峰山とも稱せられてゐる。甲斐國南都留郡の北部に位し、西麓には河口湖が綠碧の水を湛え、北は笹子峠に連り、南は遙に富岳と相對してゐる。最高一七八五米の峯を盟主として、鍵形に東西及南北に走る一連の山で、御坂山塊の一部を爲すものである。之を南東麓小沼村附近から仰ぐと、峨々たる巨巖峯が天空を摩してゐるので、近付き難いやうな嚴肅さを感ずるのであるが、西麓河口村方面から眺めると、南都の三笠山を想はせるやうな優しい姿で、人をチャームする。最高峯から東に走る峯、及び北方八町峠に續く部分は、概ね森林に覆はれてゐるが、南に走つて、吉田の北に終つてゐる尾根は、美しい茅戸の峯である。私がこの山に遊むだのは、前後二回に過ぎないけれども、山登りの好きな人達にとつて、この山程完全に山登りの愉快を味はしてくれる山は少ないと思つた。而もそれは東京附近に住む人の爲めには、僅に一日の行程である。私は玆に下手な旅行記

を書き度くない、それで單にこの雄麗端雅な名山を紹介するに止めて置く。

登山の愉快は山を科學的に研究する以外に、大自然に接し得られることにある。大自然の懷に飛び込むだ私達は、僞り難い人間の微弱さ不甲斐なさを、つく〳〵と感ぜずにはゐられない。ほんとうに私達は人間らしくなるのである。人間、一個の人間として、大自然の前に立つのである。虛僞もなく僞善もなく、富も、地位も、總てのものを投げ出して、心の誠に歸ることが出來るのである。山は大自然の一つの表現であり、又最も有りのまゝの大自然の姿を、私達に示すものである。その嚴肅な半面と、慈愛に滿ちた半面とを以て、私達を戒め、私達を愛する。私は、山を敬愛せざるを得ない。

三峠山に登つた人は、その壯大、峨々たる巨巖が、頭上を壓して、そこに大自然の嚴肅味を感ぜざるを得ないであらう。昔この山に高僧が住んだといふのも、故あることである。私は巨巖のみを以つて、安値に大自然の嚴肅味を物語るの妄を爲すまい。それは一つの表現であるに過ぎないからだ。茅戸の尾根は、美しい曲線を畫いて、私達に柔い毛氈を布きつめてゐる。南には富士の姿優しく聳え、西は瑠璃を溶かして注ぎ込むだやうに、河口湖が碧の水を漲らせて、周圍の山々や村落や森の影を映してゐる。靜かに渡つて行く舟さへ繪である。頂上からは山の端に西ノ湖が一寸窺はれる。晴れやかな日には、西の空は白峰や赤石の連嶺に閉される。私が春の初めに訪れた時には、更に遠く日本北アルプスの山々さへも眺められた。久しくスウヰスの風光に憧れてゐる私達は、この景色に對して、スウヰス以上の美しさであるとさへ感じた程であつた。見晴しのよい山といふものは餘り澤山はない。この點に於てもこの三峠山は最も見晴しのよい山の一つと言つても過言ではないと思ふ。殊に春尙淺い頃に、殘雪を踏むでこの山を訪れて見給へ、最早山麓には若芽が萠え初めてゐるのに、遠近の山の峯々には、春光に輝く殘雪が何とも云はれない美しい光を放つてゐるし、富士の峯は五合目以上を未だ眞白な雪に蔽はれて、白扇の形容そのまゝの姿である。白峯・赤石の連嶺は白金の屛風を立て連ね

て、殆どその全部が眺められるのである。特徴のある北岳、間ノ岳、農鳥、惡澤、赤石、聖などは、直ぐそれと知ることが出來る。やはり北岳の鋭い白金のピラミッドは私達の心を惹きつけずには置かない。北の槍や穗高から以北と思はれる邊の山々も、雪を戴いて紫に霞むで見える。近い山々は更に言ふまでもない。北は大菩薩岳續きの山々から、遠く秩父奥山をも望むことが出來るが、それを一々識別することは私には困難であつた。東から南に當つては、丹澤山塊、大群山、御正體山などの道志川上流の一群の山々が、黑い姿で蹲つてゐた。

三峠登山口の達磨石　（武田久吉氏撮影）

## 三

三峠山は古來の名山である。東桂村字下暮地より上る道が本路である。陸地測量部の五萬分ノ一の地圖は、何故かこの道を記入してゐない。道は下暮地から溪流に沿ふて行く。やがて達磨石の處から北に山道となつて、最高峯の東から南東に派出された一つの尾根を登るのである。久しく荒廢してゐたのを今年の五月頃、下暮地の青年會が修理したとかで、五月の末に行つた時には處處に木を切り倒した跡などがあつた。土

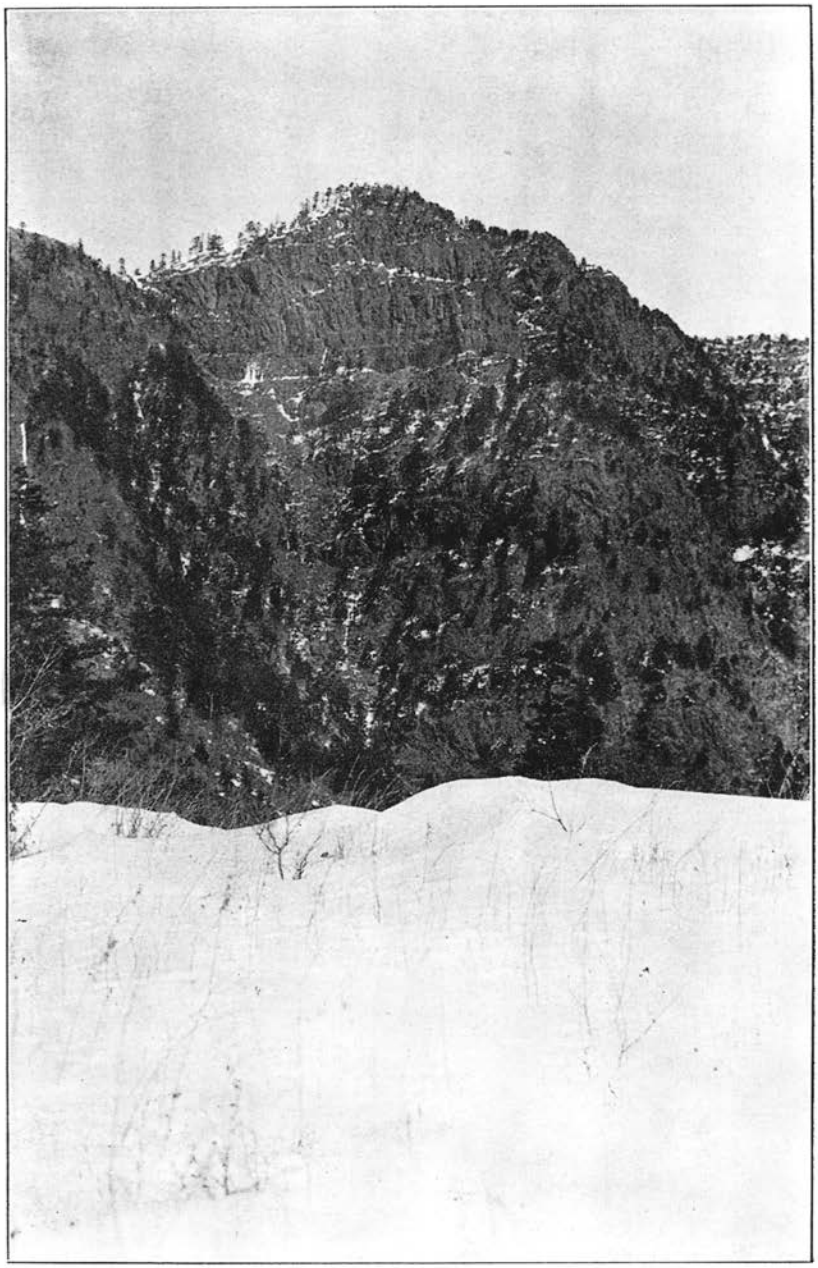
地の人達はこの山に立派な道を拓いて、大に登山家の便を計り度いといふ希望を持つてゐるやうだが、願はくは餘り立派過ぎる道を拓いて、山が俗化してしまふことのないやうにして戴き度いものである。頂上に茶店でも出來て、腐つたサイダーでも賣られるやうになつたらそれこそ自然の情趣に富むだ三峠山も臺無しになつてしまふ。

達磨石から二十分位も登ると百地藏尊がある。お互の似顔を見出したり、誰彼の顔を思出すのも愉快である。傍に開祖善應空胎上人唯阿大和尙の石碑がある。墓石であらうか。側面には相州大住郡一ノ澤無常山發願寺廿六世住　八月十八日示寂と刻してあつた。何年の八月十八日かは不明であるが、苔蒸す石の樣子から想像しても、相當に古いものであらう。この山には三世相嗣いで高僧が住むで居られたと村の人が言つて居た。百地藏尊から少し行つた處に庵の跡らしく、崩れはてて苔に閉された石垣や、物寂びた庭の名殘などを留めて、その精進の生活が忍ばれて奥床かしい。詳しく調らべて見度いと思ひながらも未だその機を得ない。この山に住むだ高僧の事跡物語などに就いて、御敎示を垂れて下さる方があつたら幸である。

百地藏尊から上には奇岩怪石が多い。岩の洞窟の中に石地藏の安置したのや、絶壁の中途を切り開いて石地藏が祭られてあるなど、往昔は信仰に憧がるゝ幾多の善男善女が絶えずこの山に參詣したに違ひない。私は岩窟の中に光苔でもありはしないだらうかと搜したが、見當らなかつた。植物學上こんな處にはないのかも知れない。先に述べた庵の跡の近くには水が滾々と流れ出づる場所がある。この道の登山者は水に不自由することはない。道は西に轉じて一六〇〇米位の山腹をからむで、一二の小溪を渡つて見晴のよい峯の一角に出ると、そこには熊野權現の小祠がある。三峯權現とも稱せられてゐる。この祠の後の小徑を攀ると甲斐國志に所謂『舟に似たる岩』がある。私は不幸にして見落してしまつたが、武田博士等はこの岩舟に乘つて「覆へらんとするが如き」經驗をせられたそうである。

巖の最も壯大なのは最高峯の南の絶壁であつて、實に筆に盡し難いやうな壯觀である。小逕はその巖壁の下を通ずるのであるが、黑鐵色の巨岩は蔽ひ被さるやうに聳立して、仰ぐ者の心膽を寒からしめる。一條の瀧が岩を傳つて凉しい水を降り注いでゐる。水は何處に湧き出るのかを怪しまれる。私達は間もなく茅戸の鞍部に達することが出來る。甲斐國志に三峠山の記事が次の如く載せられてある。

一、三峠山　川口村分八丁山ヨリ峰續キ東南壹里餘此山ニ至ル。峯ハ奇巖峨々トシテ三峰ニ秀、故ニ三峠山ト云。巖上ニ小祠アリ、三峯權現ト云、又舟ニ似タル巖アリ、大サ三丈許、船前峻巖ノ上ニ出デ、後ハ巖上ニアリ。此ニ乘バ覆ヘラントスルガ如シ、其餘斷巖奇石、勝景盡クガ如シ、躑躅ニ似タル小木石間ニ生、花甚小ニシテ白シ、米躑躅ト云、五月ノ比花サク。○中略。下暮地村ヨリ上ルヲ本路トス、此ヨリ頂ニ至ル迄二里餘。麓ニ俵石ト云所アリ、米俵ヲ積シニ似タリ、俵ノ端繩ノ結目サナガラ俵ニ異ナラズ。又砂原ヨリ貝石・石牙・石弩等ヲ出ス。此間都テ小沼下組入會也。中腹ヨリ道彌急ナリ、峰ヨリ南ニ出ルコト壹里餘ニシテ、又東ニ囘ル峰アリ、末ハ鐘山ニ續、此昔陣鐘ヲ置シ山ナリ。頂平地アリ。又辰方ニ續キカツミ山ニ至ル。此間錦山・アケ木山ト云アリ。○中略。此ヨリ巳午ノ方ニ出ル峯ヲ尾垂山ト云、此間臺里餘、辰巳ノ方ハ下吉田村持林ナリ。嶺北ハ上暮地ニ屬ス。此ヨリ峯續キ壹里餘南ニ至テ嘯山ト云、此山東南ハ新倉村ニ屬シ、西南ハ船津村ニ屬シ、西北ハ淺川村ニ屬ス、東南新倉分內ニ手取石山アリ、尾垂山ヨリ續。其西ニ御前山アリ。夫ヨリ西北西澤・大牛窪ト云。此西北ハ川口分內ニ入テ不レ殘入會山也。又牛窪峰ヨリ大ソフリ迄並ニ淺川ト入會也。西澤ノ內ミコイノ瀧ト云アリ、高サ拾丈許、巖上ニカヽレリ、大小二流アリ、其旁出ノ巖ヲ獅子岩ト云、景地ナリ、旱魃ノ年ハ土人此瀧下ヲ浚ヘバ忽チ雨フルト云。又嘯山西南ノ峯ニ小御嶽權現ノ小祠アリ、舟津村ニ屬ス。里ヨリ登ルコト貳拾町餘。其東南ニ出ル小嶺ヲ鐘山ト稱ス、陣鐘ヲ置テ敵ノ急ヲ告シ所ナリト云古趾存セリ。西北ハ平松山・マヽコ原山ト云テ淺川・舟津ノ界也。中尾



三峠山の最高峰(西南より仰ぐ)　又木周夫氏撮影

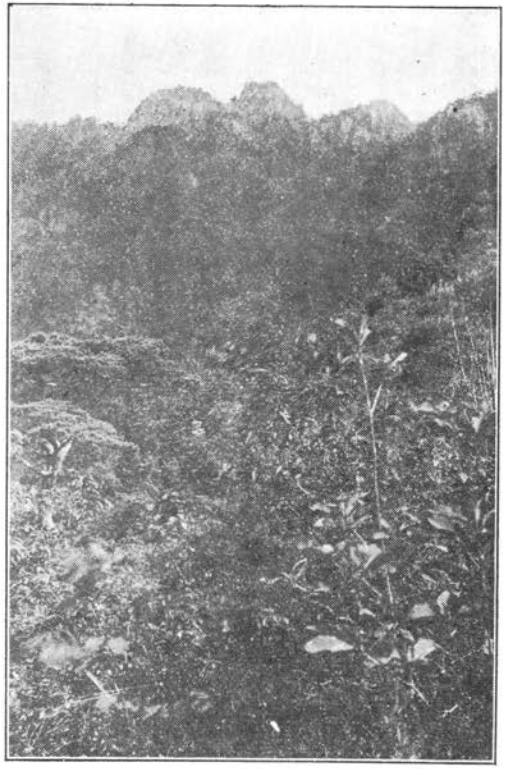
山ハ新倉ト界、マル尾・戸澤山ハ川口分ニ接ス。戸澤山ヨリ砥石出、上品ニハ非ズ。此ヨリ北麓ハ川口湖水ニ濱ス。三峠ヨリ東ニ出ル峰壹里餘ニシテ論所山ト云。大幡ヨリ下暮地ニ越ル坂路アリ、是古ヘ暮地・夏狩・大幡三村山界諍論アリシ地ナリト云。下暮地・小沼・夏狩ノ入會山ナリ。此ヨリ又辰巳ニ出ル峰アリ。嶺南ハ大窪山ト云、下暮地村ニ屬ス。嶺北ハ湯ノ澤ト云、夏狩村ニ屬ス。論所ヨリ東ニ下ル嶺アリ、壹里餘ニシテ天神峠ニ出、嶺南ハ夏狩分、嶺北ハ加畑村ニ屬シ、加畑・平栗・薄原三村ノ入會山也。天神坂ハ夏狩ヨリ加畑村ヘ越ル坂路ナリ、天神峠ヨリ東シテ峰續キ、嶺南ハ十日市場村ニ屬シ、西ノ窪・草畑・中屋敷、嶺北ハ加畑・平栗村ニ屬ス。ヲツカト・峰ケ澤・タカク山・アクビ澤・瀧澤・タネ山・大久保山ト云。又東八窪山ニ至ル。此山ノ東麓ハ川棚村ナリ。村南ノ一峰ヲ八幡山ト云、嶺上ニ八幡宮社アリ、本村ノ產神也。八幡山ノ西ヨリ北、城山ノ北ヨリ牛石山ニ至テ盡。此間川棚ヨリ薄原ヘ越ル山路アリ、天神坂ト云、嶺北ハカクホ山・三ッ頭・大久保山ト云、夏狩天神峠ヨリ此ニ至テ壹里餘。

可成詳細な記事である。石間に生ずるといふ可憐な米躑躅は、私の登つた頃には見ることが出來なかつた。或はもう記憶から去つてゐるのかも知れない。甲斐國志の記事に就いては研究すべき點も少くないやうであるが、ぼんやり歩いて來た私には、一々それを穿鑿する丈の知識もなければ準備もない。再遊の折には注意深くこの記事を引照して見度いと思つてゐる。

最高峰の南肩にある茅戸—下暮地からの道はこゝに辿りつくのである—は、冬の日には積雪の色美しく輝き、東京市中からも望み得るのである。その邊は美しい芝生で、東に向つては急な傾斜をなしてゐるのに反して、西は緩やかな廣々したスロープを擴げ、平和に滿ちた樂園の姿をして、息せき切つて登つて來た旅人に、柔い茵を供してくれる。眼を西に注ぐと、それが春でゞもあれば、眞白な神々しい輝きを青空に劃して、白峰・赤石の連嶺が、宛然中古の騎士の頭を飾つた白金の兜を立て連ね

たやうに、牆壁を築いてゐる。南には銀扇を擴げた富士の高峰が、氣高く仰がれる。芝生には針葉の老樹が所々に懷しい木蔭を作つて、安息の場所を與へてゐる。西に少し下つた邊には、雜木がまばらに立つてゐる。

此處から右折して東に峰を攀ると、最高峰（一七八五米）の三角點の基石のある、平坦な頂上に達することが出來る。こゝの眺望は更に廣いが、前述したから略する。東に走る尾根は、甲斐國志に所謂、論所山、大窪山、天神峠などを經て八窪山に至る一脈であつて、桂川の本支流に抱かれてゐる。北稍西によつて、形のよい圓錐形の一峰が聳えてゐる。私は第二回の登山の折には、この峰を越へて、北西に連る屋根を雜木の藪を押し分け、老ひ朽ちた巨樹の倒木を踏み越え踏み越えして、大幡から八丁峠に通ずる山道に辿り着いた。測量部の地圖には、五萬分ノ一のにも、二十萬分ノ一のにも、立派な道路として載せられてゐるが、もう幾年も人が通はぬらしく、半ば草に埋もれて、或場所には道の眞中に、檜の若木が一丈も延びてゐるやうな、寂れた道を大幡に下つて、谷



大曲り附近より仰げる三峠山の三峰
（武田久吉氏撮影）

村に出た。その道は鶴ケ鳥屋一連の山と、三峠山から東走する尾根に挾まれた谷間を通つてゐる幽邃な峠路であつた。丁度德本峠の道や、白骨道が忍ばれて、私はロマンチックな一條の物語を、この閑寂な美しい谷間の道にも結び付けて興がつた。

最高峯から南に引く尾根の縱走も樂しいものである。道は尾根の上を稍〻西寄りに通じてゐる。見晴もよいし、登り降りも少ないので、談笑を擅にしながら歩くことが出來る。私は三月の始め未だ殘雪が膝を沒する程積つてゐた頃に、吉田から新倉を經てこの尾根を辿つた。新倉から河口湖畔の淺川に越える峠まで登り着いて、碧鏡を沈めたやうな湖の彼方に、純白の雪に輝く聖、赤石、惡澤が紺青の空に浮び出てゐるのを見出した時は、思はずも聲を揚げて欣喜せざるを得なかつた。山は登るのも愉快であるが、遠く眺めるのも興深いものである。若しそれが曾遊の山であるとか、日頃から私達の憧れてゐる山であれば、その興味は湧然として血脈を漲らせるであらう。

## 四

最早拙い記述を續けることは、寧ろ三峠山を瀆すことになるから、唯だ登山路に就いて少し述べ、この稿を終ることにする。

東京からこの山を訪はんとするには、飯田町驛を午後十一時の夜行で立つのがよい。翌朝二時半に大月で下車して、それに連絡する吉田行の鐵道馬車の便を借りて、小沼で下るのである。若し未だ夜が明けぬなら此處で待てばよい。下暮地を經て登る所謂本路を選べば、約四時間位で頂上に達する。歸路は南に引く尾根を縱走して吉田に出るのもよいし、又は西に下つて河口村に出で、船津を經て吉田に至ることも出來る。或は南に尾根を傳ふこと約一里にして、五萬分ノ一圖幅に上暮地の西方高距一〇〇〇米位に寺院の記號のある處に下ると、美しい瀧があつて一遊の價値があると武田博士から敎

へられた。

最高峯から北西に、八町峠の方面に行くのは、藪が深い爲めに方向を誤る虞があるし、決して樂な行程ではないから餘りお勸め出來ない。只木間隱れに眺められる河口湖の美しさは忘れられない印象である。私達が傳つた尾根と、八町峠から御坂峠に連る尾根に挾まれた谿は、大菩薩峠に源を發する日川の谿に似て軟い感を與へた。

前述の道を逆に行つてもよい。何れの行程を取つても、その日の中には樂に歸京することが出來る。其他にも東西に通ずる道は二三ある。（大正九年九月廿一日）

# 雜錄

## ○丹澤山塊に關する資料

近來『山岳』殆んど毎號の誌上に丹澤山塊に關する記事が掲載されることは、同山塊と昔から緣の淺くない私にとつては、殊更喜ばしいことである。そこで私も仲間外れにならない樣に、禿筆を呵して何がな同山塊に關する事を記して見たいと思ふのである。

先づ第一に、丹澤山塊に關して今迄發表された種々の記文を集め、夫等に現はれた記事と現在の狀況とを對照して見たならば、今後同山塊に足を入れられる方に取つて多少の參考となりはしまいかと思ふのである。

私の手元に只今見當るものは左の數種に過ぎないが、尙此外に二三種はあることだらうと思ふ。兎に角それ等を年代の順に擧げると、

松平定能編輯——『甲斐國志』、文化十一年（一八一四）

德川幕府編輯——『新編相摸國風土記稿』、天保十二年脫稿（一八四一）

Satow and Hawes ——『Handbook for Central and Northern Japan』, ed. 1, 1881, ed. 2, 1884.

Chamberlain and Mason——『Handbook for Japan』, ed. 3, 1891, ed. 8, 1907.

高頭式編纂——『日本山嶽志』明治三十九年（一九〇六）

高野鷹藏——「塔ヶ岳」、『山岳』第一年第一號所載　明治三十九年（一九〇六）

「相摸津久井郡の噴煙山岳」、『山岳』第三年第一號所載　明治四十一年（一九〇八）

「津久井圓山木の所謂噴煙山岳」、『山岳』第三年第二號所載　明治四十一年（一九〇八）

「噴火口と思ひしは風穴」、同右

武田久吉——「丹澤山の登路に就いて」、『山岳』第五年第二號所載　明治四十三年（一九一〇）

武田久吉——「丹澤山」、『山岳』第八年第三號所

載　大正二年(一九一三)
石田光治郎――『靈岳大山』大正六年(一九一七)
梅澤親光――「相州蛭ヶ岳」、『山岳』第十一年第三號所載　大正六年(一九一七)
武田久吉――「丹澤山と塔ヶ岳」、『ツーリスト』第六年第三號所載　大正七年(一九一八)
北澤基幸――「丹澤山塊」、『山岳』第十三年第二號所載　大正八年(一九一九)
雲閑居N――「丹澤山の思ひ出」、『ツーリスト』第七年第五號所載　大正八年(一九一九)
戸澤、藤島――「丹澤山塊」、『山岳』第十三年第三號所載　大正八年(一九一九)
久野政雄――「丹澤の山々」、『霧の旅』第三號所載　大正八年(一九一九)
松本善二――「丹澤山塊縱走」、『霧の旅』第五號所載　大正九年(一九二〇)
同右――「燒山より丹澤山塊縱走」、『山岳』第十四年第三號所載　大正九年(一九二〇)

以上二十種の丹澤山塊に關する文献を見ると、同山塊に關する吾人の知識は甚しく貧弱なることを嘆ぜざるを得ないが、一方登山家の間にも餘りポプュラーでないこの山塊について、これ丈の記事があるかと思ふと、稍心强いやうな氣もする。

甲斐國志に掲げられた丹澤山塊の記事は、勿論同山塊中甲州に屬する部分即ち主として大群山以西の山川に關するもので、該書は同山塊の研究には甚だ貴重なるものである。しかし丹澤山塊の大部分が相摸に在る以上新編相摸國風土記稿は必ず參照す可き書たると論を俟たないが、同書に載する所は甲斐國志に比すると遙に少いのは遺憾である、

然し以上の二書は、丹澤山塊を主眼として著したものではないし、又坊間に普遍的のものでもなく、且他日稿を更めて同山塊の記事を記す時に引用することにして、今は姑く除外することにする。

次に來るハンドブック、フォア、ジャパン第一版も前二書同樣得難い書物であるが、之に載つて居る記事は横濱及び東京から大山に達する道程と、大山の麓周りの記事にすぎない。大山の道程につい

ては此處に云々する價値がないかも知れないが、大山の絶頂から富士、丹澤山頂、日光山を望むと記してある。これは興味ある記事だが、現今は四周の樹木が繁茂して、殆んど眺望皆無となつたのは遺憾である。又東京から大山に登る案内として東麓日向村から、一の澤に沿うて上り、淨發願寺の前を經て、二重瀑の下を阿夫利神社の側に出る道路が記してある。そして其の途中から相摸野、關東平野、筑波山、日光山の一部が望まれると書いてある。此路は大山の登路としては、子易からあの不愉快な大山町を通過して上るよりも遙に勝つて居る。又同書にも記してある十六丁目から簑毛に下る道も亦一顧の値があることゝ思ふ。大山山麓一周の記文は此書が最初のものであろうか。これによると其の道程は次の如くである。

大山より簑毛（二里十八町）或は子易より簑毛（二里）

丹　澤（四里十八丁）

宮ケ瀨（八里二丁）

煤ケ谷（十里二十丁）

子易へ歸著（十二里十六丁）

此の周廻は今でも行へるが、同書にも記載してある通り、丹澤から宮ケ瀨へ出る間が最も難澁である。勿論現今の道は明治の初年のとは多少異るけれども、困難の程度は僅しか減じて居まいと思ふ。尤も宮ケ瀨へ出ないで、唐澤山をこえて直接煤ケ谷へ出る方は困難も少なく、又景色も恐らく勝つて居ると思ふ。但し一人では餘程よく路を聞いて行かないと迷ふ懼れがある。殊に二萬分一の地圖でも參考にしたら、いよ〳〵飛でもない所に迷込むでしまう。

同書第二版に掲げられた大山の記事は第一版のものと大差ないが、尙丹澤山塊の他の部として、山中から山伏峠をこえ、道志川に沿うて宮ケ瀨に出る十五里二十二丁の行程が記してある、そして久保から青根に至る間が最風景がよいと賞讃してある。實際道志川は上流は水量が少く、兩岸が聳えて居ないから、川其者の景は大したものではないが、左右に可なりな高峯を仰ぎ乍ら行く道は惡くない。中流殊に月夜野上野田あたりから下は兩

岸は恐ろしく峙ち、川幅も廣く、又夏は昔から名物の道志鮎を口にすることが出來る。そして特筆する値のあるのは、此沿岸の人情の質朴なる事で、到底東京附近に、いや今の世の中に、斯樣な土地があるのは不可思議な位である。

ハンドブックの第三版になると、著者が變つただけに內容も大に異つて來て、丹澤山塊に關する記事は只大山へ平塚から登る通常の道程を記すにすぎず、其他は全部削除されてしまつたので、吾々には何等の價値はなくなつて來る。第八版も第三版と大同少異であるが、只丹澤山塊全躰に關する數行が補はれて居る。それは *Tanzawa* is a small range situated close to Ôyama on the west. It includes Sobutsuyama, Tanzawa proper, and Bodaiyama, but offers little interest. といふ簡單な記事で、丹澤山塊が興味ないと正面からけなしてあるのは、ちと心得難い事である。又此處にいふ善提山といふのは、北秦野村で三ノ塔と呼ぶ、標高一二〇六米の峯であると考へられる。

高頭兄の『日本山嶽志』には、其七六頁以下と五一五頁以下とに此山塊に屬する山岳十數座を揭げてある。其內雛鶴峠と御正體山の二つは、差當り此記事から除外することにする。其理由は、私は道志川右岸の山峰だけを丹澤山塊と呼び、左岸にあるものは之を道志山塊として區別したいからである。勿論此兩者は、總括すれば丹澤山塊の廣意のものとなる可きもので、私が狹意に見て斯樣な區別を敢てするのは、只便宜上のことで、決して高頭兄の山岳系統分類に對して異存がある譯ではない。夫處か、信憑す可き地圖もなし、參考とす可き記文も不足なあの時代に、十數年後の而も日本中の大抵な山が多少なりとも記文を有する今日でさへ、極々僅少な變更しか必要としない程の立派な分類を試みられた同君の彗眼に對して、私は多大な尊敬を拂ふ者の一人である。今日同書に揭載してある山岳の記事に誤謬が發見されたり、追補す可き材料が穫られたりするのは、皆一に同書の功績ともいふ可きもので、事實の變遷、記事の遺漏などといふ事で、同書の價値を云々するのは、眼光を紙背に徹することの出來ない人々の囈語に外ならな

い。殊に山岳の分類は同書の最も價値ある部分で、標高とか登路の如きは末の末に屬す可き事である。

『山嶽志』五一五頁の大洞山、畑尾山、角取山と、七六頁の三國山とは、皆籠坂から東に連つて、甲駿の境から終に甲、駿、相三國の境に至る山峰である。三國山から東で相駿の境に在る山は、同書五一五頁にある山伏峠で、これは駿州柳島から相州世附の俚稱淺瀬といふ所に越える峠道だが、道の直東に七四六米の三角點があり、又最高點は九三〇米と測られた山伏岳で、其上に立てば丹澤山塊の大部分は一望の下に集まるといふ好觀望臺である。

三國山から甲相境を走る山脈中で、『山嶽志』に掲げられたものは、菰釣シ嶽(五一五頁)と、大群山(七六頁)とであるが、前者は平野から道志へ越える山伏峠以東城ケ尾峠迄の山脈中の最高峯で、其三角點は山頂を稍南に下つた一三四九米の地點にあるが、最高點は一三七〇米を算して峰頭二三に分れて居る。菰釣シの名は相州の名で、平野では大丸尾と呼ぶそうだが、道志では椈ノ丸の稱を以て呼ぶらしい。大群山は丹澤山塊中東京から見える山の一で、高距は一六〇〇米に出入し、丹澤山塊中第二又は第三の高峰ではあるが、樹木に妨げられて眺望の限られて居るのは遺憾である。登路は月夜野又は大渡から鐘撞丸(九〇一米)を經て國境の斜面を上るのと、大室指から前權現を經て上るものと大椿から椿澤(又東澤)の左岸ヤケハギ(燒禿?)尾根を上るのと、竹ノ本から細入りについて木地小屋といふヒラの東を上るのと(此二路共に竹ノ本の前權現で合する)、南面には中川の白石澤の上流のトリギ澤を上つて破風口に出て上る路もあるが、最樂て最興味のあるのは、竹ノ本から前權現を經て國境の尾根に登り、先づ加入道を訪ひ、それから峰傳に頂上に向ふ路であらうか。三角點は最高點にはない。大群山の別稱富士隱シは今でも七國峠の南の眞米附近では用ひる稱呼て、同地では大群山の名を知る者は殆んどない位てある。

更に東に寄つては、丹澤山塊の最高峯毘盧ケ岳

（五一六頁）、此山塊中で一等三角點のある丹澤山（五一五頁）、尊佛で有名な塔ノ岳（七六頁）、それから登山者の最多い大山（七七頁及五一六頁）であるが、其他では大山の西南肩の一峯春岳山（五一七頁）、寄村（ヤドリギ）の西北部にある一一六八米の檜ケ岳（五一六頁）、及び菩提（トリヲ）の西北に當る烏尾山（カラスヲ）（五一七頁。同書には鳥尾山とあるは、統計書の誤を傳へたものに外ならない）であるが、毘廬ケ岳は鳥屋村での稱呼で、その別名藥師ケ岳は、山頂に藥師佛を祀るが爲で、玄倉方面では寧ろ此名の方が通つて居る。丹澤山は三境（サンサカヒ）といふのが通名で、玄倉村では御本ノ平（オモトタヒラ）と呼んで居る。丹澤山といふのは、本來は丹澤の山一般を指したものであるが、三境が此邊で最も高い爲に此名を專有するに到つたものと思はれる。現に明治十二年一月に地理局地誌課で編纂した『相摸武藏二州圖』には宮ケ瀨の西南に當つて「總名丹澤山」と記してある。三境が丹澤山の名を專有したのは、恐らく其の直後に一等三角點が山頂に建設された頃と考へ得べき材料があるが、これに就いても他日を期して記す考故、今は夫に及ぼさないことにする。塔ノ岳なる名にも些か疑問があるので、その詳細は他日に讓ることにするが、只一つ記して置きたいのは文獻に現れた古い名は塔ノ岳で、塔ケ岳と書くことは測量部の輯製二十万や五万分一地形圖から始まつた樣に思はれる。

以上は何れも丹澤山塊の山峰を主として取扱つた記文ではなくて、謂はゞ序を以て錄した記事を掲げたものであるが、『山岳』第一年第一號に現はれた「塔ケ岳」なる記事は、該山塊の一峰を主眼として書いた最初の記文である、又現今では大に趣の變つた玄倉川上流に關する詳細な記錄として、尊重す可きものと思はれる。此の記事の初め（五九頁）にも、塔ノ岳か又は塔ケ岳かについて疑を挾み、玄倉村に特に照會したらば塔ノ岳と報じて來たと記してある。明治三十八年の秋といへば、未だ『日本山嶽志』も發兌されて居ない頃、未知の玄倉川を溯つて、塔ノ岳に登山を企て、而も中々の困難を嘗めた事は、今思へば無謀の樣ではあるが、其當時としては相當に準備もして行つた事で、

以て如何に山岳知識が低かつたかを知るに足りるであろう。一行に加はつた私にとつては、高野君の記文を讀む毎に感慨無量である。

次に『山岳』第三年第一號一六六頁以下に掲げられた「相摸津久井郡の噴煙山岳」なる記文は、事柄が奇怪なる丈に其當時の編輯主任の注意を牽いて、新聞記事を掲載して且夫に意見を附してある。該記事執筆者の言はれる通り「戸谷村」は鳥屋村なること論ずる迄もないが、噴煙したと謂はれる山名を、「或は丹山木といひ、或は圓木山といひ」とあるのは共に誤で、實際は圓山木に外ならない。此地は早戸川の上流にその右岸から殆んど瀑となつて注ぐ同名の澤附近の斜面で、その頭は、丹澤山から東北に派出した峯の中、丹澤の村で三ッ峰と呼ぶ三峰中の中の峰に當るものである。圓山木なる名は地圖にも書物にも掲載されたるを見たことがない。されば編輯者が其位置を物色するに苦んで、噴烟と結付けて燒山ではあるまいかと推測されたのは無理もないが、燒山とは全く別の山である。又燒山なる名稱から推して此山を火山ではあるまいかと疑はれて居るが、同山は昔は茅を繁生さする爲めや、時には隣村の植林の邪魔をする爲に人工的に火を入れたので、自然的の發火又は噴火などから起つた名では毛頭ない由である。

次に『山岳』第三年第二號一五一頁以下に轉載してある「津久井圓山木の所謂噴煙山岳」なる記事は、新聞紙などには稀に見る精確な書き振りで、仔細に其行程を地圖上に摸索すると、初は鳥屋から水澤に出で、馬ノ背を越え、早戸川の左岸を大平、マッコウヶ谷、傳道（該記事にゼンドウとあるは聞誤りであらう）を經て一旦谷に下り、右岸に移つて圓山木に上り、歸路は恐らく蛙澤を經て八丁瀑に出でた道程を、略想像するに困難でない。

右に續いて「噴火口と思ひしは風穴」なる記事については、私は何等の批評を加へる必要を見ない。

『山岳』第五年第二號一〇四頁以下に掲げた「丹澤山の登路に就いて」なる記事は、私が未だ同地方を殆んど知らない頃、登山計畫の參考として手に入れた材料を發表したもので、元より今となつて見ればあまり參考にもならないものであるが、

私が初めて丹澤山頂に達し得たことには與つて力がある。しかし此數行中に二三の誤のあることを公表して、次手を以て訂正して置きたい。第一に丹澤山は高頭兄の『山嶽志』にさへ記載がないと記したのは甚以て申譯のない誤謬で、同書に記載してあること前述の通りである。只私の不明からして「三境ノ峰(別稱御本ノ平)」を丹澤山と同一と氣がつかなかつた爲めに、斯樣な失言をなしたことは寔に汗顏の至りである。次に私が手に入れた記事中「森戸口」とあるは門戸口(モンドグチ)の誤、又三ッ境(サンサカヒ)は私が臆測して、札掛ケといふは陸測五万に新宅と記す所だらうと書いたことで、實際札掛は新宅から數丁下流に位し、該地圖に徑が二岐する所の稍下に當るのである。

右の材料を手引として丹澤山に登つた最初の紀行文は、「丹澤山」と題して『山岳』第八年第三號一〇二頁以下に載つて居る。遺憾ながら此記文中にも五六の誤謬があつて、而も夫が今迄に他の登山家を誤まつた樣に考へられるのは寔に申譯がない。以下夫等を訂正して私の疎漏を大方に謝したい。一〇四頁に、諸戸の切通しを北に下り、門戸口(モンドグチ)に達した記事に正誤的說明を附すると、門戸口といふのは陸測五万に東秦野村から切通しを經て丹澤に入る複點線の道と、北秦野村の菩提から二又峯(二万分一圖による)といふをこえて丹澤に達する單點線の路とが合する邊で、丁度春岳山の西麓に當ることになる。門の跡から五六分も進んで諸戸氏の事務所と數戸の茅屋のある所を、五万の圖の「俚稱新宅」と考へて記したのは甚しい誤で、そこは尙未だ門戸口の一部に外ならない。此の「新宅」といふ地は、明治の中年に此地を測量した當時には人家もあつたことと考へられ、又實際存在した由であるが、現在では一戸もなくて、大山の北裏から西流する地獄澤の右岸の山足に、鹿島明神(?)の社が寥氣に立つ外何等の建物はない。新宅から數町北で路が再度兩岐する所がある、其邊を札掛と呼ぶのであるが、詳しくいふと此處は藤窪といふので(二万の地圖には「藤瘤」と出て居るが、藤窪が正しいと其處で敎つた)、それから更に二三十

間も下つた所が本當の札掛で、そこには今御料林の事務所等がある。私達が先年休息した家は藤窪なのであるが、普通は此處をも札掛と呼んで居る。

札掛で第一回中食をして居た間に、其時の案内は行程を俚人に謀つて居たが、そこから更に北進してから、三峯を丹澤山頂に登りつめやうといふ計畫は、不幸否決された爲に實行しなかつたが、今では却てそれを遺憾に思ふ位である。扨其記事中に、三ッ峰の東端の峰には九三一米の測點があると記したのも誤謬の一つで、それは一三四六米の三角點でなければならない。此名は丹澤の部落での稱呼で、同じものをその北面の鳥屋村では澤の名によつて、三角點のあるものを本間の頭、中央のを圓山木の頭、西端のを大禮の頭と稱して居る。又丹澤山塊中三ッ峰と名のつく山は他にもあるので、帝國圖に記してある通り、大山の東北に續いた峰の中で九三五米の高距を有するものを、煤ケ谷村では三ッ峰と呼び、昔は八菅山の行者の行場の一であつたそうである。

藤窪を出發した一行は、二万分の地圖に水澤と記してある澤に沿うて行つたといふ記事も正確でない。實際は中郡と愛甲郡との境で、他方から見れば諸戸氏私有林と官林との境に當る、境川一名金林川について數町上つたのである。藤窪から金林川に出るには、一旦切通をこして以來その右岸に沿うて來た布川の上流の俗稱諸戸川を渡つて三之塔山(一二〇六米)から東北に曳く尾根の山足を一寸の間通ることになるが、現今ではそこに小學校が建てられて、山師等の子供が通學して居る。又其の近傍に山の神の小祠も出來て、その祭禮には大山の神官が出張して御札を販賣するのだといふ話も耳にした。

藤窪から金林に登りついて一息入れた記事中(一〇六頁)、「前回には深い谷を距てゝ云々」は勿論前面に谷を距てゝの誤植であるが、其深い谷といふのは布川上流の本谷と呼ぶ谷で、其左岸にある彼の九三一米の標高の記してある峰などは殆んど眼中に入らない程のもので、其後にシホミヅ川の左岸に峙つ本當の三ッ峰が甚だ顯著に見えるのである。

一〇七頁の最終の行に「寄生植物」なる語のあるのは甚不穩當で、これは著生植物であらねばならない。

一〇九頁に「龍の御場」とある名稱も不當のもの丶一つで、あれは馬場に改訂の必要がある。

一一〇頁の附記中に、曾屋の旅宿の名を「大岡」と記したのも甚だしい誤で、本當は大川樓といふのである。

一一一頁の終りの方に、菩提ノ山の標高を一二六米と記してあるのは慥に誤植と思はれる。實際は一二〇六米で、又山の正しい名は三之塔である。又同じ行に、「一二三七米突」とあるのも誤植で、これは一一三七米を正しとする。此峰は前に引用した『日本山嶽志』に掲げてある烏尾山ではあるまいかと考へられる。

『山岳』第十一年第三號に掲げられた、梅澤君の相州蛭ヶ岳なる一文は、大群山（オホムレサン）、毘盧ヶ（ヒル）岳及び犬越路に關する最初の記錄、――不幸にして簡略ではあるが――である。登山前記中にある第一回失敗記には、私も一寸引合に出て居る爲め、聊か訂正的蛇足を添へて見たい。私の手帖には、同志四人で青根へ向つたのは、「明治三十九年九月八日（天氣晴後曇）、午前九時四十分牛込停車場、十一時四十分八王子、午後十二時十分淺川、十二時三十五分與瀨、一時十五分勝瀨（カツセ）、二時二十五分新倉（アラクラ）（篠原迄半里）、三時篠原、三時五十五分同所發、四時二十五分川上、同三十五分同所發、五時十五分小船、菅井を經て六時二十五分長俣、六時三十分川を渡る、六時五十五分青根著」と記してある。その頃は地圖の讀方も粗漏であつたので、與瀨から青根の東野へ出る迄小い昇降が頻々としてあるのでひどく驚いた上、慣れない肩に荷をかついだので隨分弱つてしまつて、途中の景色などはあまり目に入らなかつたが、丹澤山塊中の一峰キビガラを醉拂ひに敎つたのは、何でも篠原から小い峠をこえて川上に近づいた頃と覺えて居る。其時は此峰を地圖上に摸索して見る餘裕などは毛頭なかつたので、どれに當るかは不明であつたが、近頃に至つてそれは燒山連山（毘盧ヶ嶽から燒山に連なる山脈の假稱）中一二七四米の標高を有する一峰なる

ことが突止められた。此の峯は日連(ヒヅレ)から金比羅山(三七五米)の東側を廻つて、新倉(フラクラ)に下りかける頃から正面に現れ、此連山中最顯著なものである。已にして篠原に近づくと、燒山連山は益益明瞭になつて來て、左端一〇六〇米の燒山から右端一四三二米の袖平迄(ソデヒラ)の部分が嚴然と峙つ、その中央に座する略金字塔形の一峰が即ちキビガラである。

梅澤君の記事中にある犬越路(イヌコエヂ)についても、私は少し追記して置きたいことがある。同君は此峠路を大犬越路と呼ばれ、且つ其他に小犬越路と云ふのがあるかも知れないが耳にしなかつたと言はれるが、此路は今は大抵單に犬越路と呼ばれて居る。尤も精しく聞質せば、其内の小字に大犬越路も小犬越路もある。月夜野なり東野なりから犬越路に向ひ、山の神で神(カン)ノ川の本流と離れて西に進むと、左から下駄ノ澤が注ぎ、直に右から日影澤が落合ふが、その更に上手で右から地圖にもひどいガレの記してある大屋ノ澤が合流する。此邊から路は益々急になつて、折折ガレに出會ふ事がある。地圖にも小なガレの下を過ぎる樣に記してある。其邊で復右から細い澤が注ぐのが大杉丸で、これを通て尙上ると再び右に小澤が見える、これが小犬越路の澤で、この附近を小犬越路と呼び、それよりも上部で峠の頂に近い所が即ち大犬越路である。しかし私の考としては、犬越路の一部に大小の字を附するのは比較的近世のことで、昔は大犬越路の名を用ひたのではあるまいかと思はれる。大犬とは山犬とか狼とかの概稱で、昔は此山彙に山犬などが棲むだといふから、それが出沒したとか、又はそれを討取つたなどゝいふことから、此越路に左樣な名がついたのかと思はれる。現に山北から神繩に越える竹山峠の北方に犬首といふ字があつて、これは昔「大力の男が山犬の首を取つた」ことに由來した名であると聞いた(『山岳』第一年第一號六四頁參照)。尙類似の例としては、精進から本栖湖の北へこえる笈ノ峠も大犬峠を訛つたものと解釋されてある。

大正三年の秋九月に梅澤君が初めて靑根から毘盧ヶ岳へ登られた時は、薄と笹と木立と、加之風雨の爲めにひどく苦しまれたそうである。同君は上

青根を經て上られたので、此路は山稜に取つく迄は中々急な傾斜であるから雨天では困難なことであつたらうと思はれる。登り切るとキビガラと其の次の一三四三米の峰との間の鞍部の少し西南へ出るが、そこから八丁坂といふ長大な坂を上つてヒメツギの頂の北裏へ達する迄は地圖にも點線で示してある路があるので路通り傳へば、暴風雨は別として、困難といふ程のことはないと思はれるが、多分其案内者が道を知らないで、只無暗と山稜通し薄の間を上らうと試みたのかも知れない。兎に角現今此路は如何なる狀態にあるかは、松本君の文に詳しいから、私は今蛇足を添へるのを止める。

梅澤君の記文中一四三二米の孤立した一峯について記された箇所(一五六頁)に關して、些か述べて置き度い點は、此峰は同君は誤つてキビガラと考へられたのだが、實は然らずて、本名は刈安(カリヤス)とか又は袖平(ソデビラ)とか、又は古い地圖に青根ケ岳(スゲダヒラ)とあるものに該當する。その北面のヒラを菅平と呼ぶらしいが、頂上も茅野である。ヒメツギから十五分許て達し得られるから、此山稜傳ひを試むる方は一寸立寄られるも宜しからう。路は細い乍らも明瞭について居る、只秋期には薄が可なり深いが、冬か春ならば極めて造作ない。

ヒメツギから毘廬ケ岳迄は地圖を頼りに歩くと却つて迷ふ虞がある。路は原小屋澤(ハラゴヤザハ)の右岸に沿うて初めは下り氣味に行き、やがて僅上つて右に下ると、地藏澤の源に出る。此處に一寸した小屋があつて宿泊出來ぬこともないし、水は地藏澤を五分間も下ると左方に湧出して居て、此連山縱走中野營地としては、水や焚木のある點で第一流の所と思はれる。地藏から一寸坂を上つてから山稜通し行かないで、その東側を搦み、二三右に上る岐路に入らないで進むと、少し下つて所謂ボッチに出る。梅澤君の記文にある(一五六頁)ボッチ小屋は全くないが、左下に炭竈がある。こゝから尾根通し上れば二十分餘りで毘廬ケ岳の三角標石の前に登りつく。これから南に數間木立の間を分けて進むと(細徑がある)藥師佛二體の安置された茅戸の一角に出て、眺望を擅にすることが出來る。ヒメ

ツギ以南の、地圖に明記してない路は、明治の晩年にかく明瞭についたものだといふが、甚だよく踏めて居ること驚く程である。

梅澤君の登山後記中に青根には宿屋はないと記されたが、字上野田には常盤屋及中島屋といふ旅舍があつて、食物も道志川沿岸としては惡い方ではない。近頃常盤屋の隣に牛肉を販ぐ家さへ出來た。月夜野には旅宿を本業とする家はないと聞いたから、梅澤君の泊られた家は只好意で行暮れた旅人を泊める家かも知れない。兎に角月夜野は登山の根據地としては餘りに不便な地である。

次には『雲岳大山』といふ書物を一寸紹介して置く。四六版本文一二四頁附錄に植物目錄二五頁、卷頭に口繪數葉と三六〇〇〇分一の大山附近地圖一葉が添へてある。內容は中々豐富で、地理、動植物、神社、佛閣、信仰と迷信、名木、順路、名產、文學から山麓の名勝古蹟に至るまで漏す處がない。甚だ着實な著書であるが、稍々隔靴搔痒の感あるのは遺憾である。殊に地理上の記事が今少し植物や文學などよりも詳密であつて欲しい。

『ツーリスト』なる刊行物に掲げられた拙文「丹澤山と塔ヶ岳」は、古い怪し氣な記臆を基として書綴つたもので、毛頭アップ、トゥーデイトなものでなく、且つ又自發的に筆を執つたものではないのだから、一讀の價値もない、寧ろ抹殺した方が至當かとも思はれる。

『山岳』第十三年第二號に掲載された北澤君の「丹澤山塊」なる記文は、塔ノ岳や玄倉川上流の近頃の模樣を傳へる主要なものであつて、少なからず參考となる。只一二是正を要するかと思ふ所は、九一頁に龍の御場とあるのは、私の記文に從はれたのだといふから馬場と改めて頂き度いこと。又同頁にある丹澤乘越云々の箇所は、五万だの二万だのゝ地形圖に早戸川の上流について上つて來る路を指すもので、實際は乘越路になつて居る。玄倉川上流の箒杉澤に沿うて上ると、此鞍部に出て、北に下れば、早戸川の上流大瀑ノ澤について雷(スベリタキ)といふ所(即ち大瀑(オホタキ)ノ澤と中(ナカ)ノ澤と滑瀧ノ澤との合流點附近)に通ずる細徑がある。北澤君の一行が水を得られたのは此澤の源だらうと考へるが、此

處に一つ注意す可きことは、地形圖に點線で示されてある徑は、少くとも現今は存在しないので、乘越路は低い竹の生へた小瘤起を西に越した鞍部に當るのである。同じ頁に「蛭ヶ岳は丹澤山に向つて急傾斜をなし云々」の箇所も些か事實相違の點がある、殊に丹澤山頂が草原の平かと見えるといふのは訂正の必要がある。藥師佛のある地點から東望すると、丹澤山頂は不動ノ峰に隱れて見えず、龍ヶ馬場も鬼ヶ岩の續きの一六〇四米の峰に遮れてしまひ、只塔ノ岳と其の北にひく山稜の一部が見えるのみである。又同頁に不動ノ峰を一、六〇四米と地圖に記入してあるものと同定されたのも、何かの誤らしく、實際は其の東に續く一六一〇米の峰で、不動の石像のある所は此峰の東面の茅戸の窪である。以上の訂正は北澤君からの依頼で私の此記文に包含させることにしたもので、私の怠慢から訂正の機の遲れたことを陳謝します。

戸澤、藤島兩君の「丹澤山塊」なる記文は、丹澤三山とでも假稱す可き藥師、三境、尊佛の三峰を尾根傳ひに跋涉するには最も參考となるものであるが、其內四四頁に「不動の峰が間近に大きく丹澤山の平たい頭が左に」とある箇條は前の北澤君の記事中で訂正したものと同一の訂正を要することゝ考へる、間近に見えるのが一六〇四米の峰で、左に平たく一寸丹澤山頂らしい形に現れるのが即ち不動ノ峰に外ならない。

戸澤、藤島兩君が玄倉川上流の模樣を詳細に談られたことが動機となつて、私は其の方面へ昨春兩三回も出かけて、大に得る所があつたのは、實に兩君の賜と言ふ可きである。私が五月の末に熊木へ泊つた時に、製板の小屋等は諸士平へ引移る準備中であつて、其後同地は宿泊地としては大に不便になつてしまつた。然し半里下手の諸士平へ泊るとしても跋涉には大した影響はないのだが、山林亂伐の報は覿面で、去る八月初め山津浪で流されて終つたといふから、同地も再び舊の寂漠に歸つたことであらう。

戸澤、藤島兩君の雇傭された山本甚藏なる獵師は、大群山續きの一峰を塔ノ岳と呼んだといふことだが、甚藏の說には首肯し難い。

『ツーリスト』第七年第五號に掲げられた「雲閑居N生」の筆になる「丹澤山の思ひ出」は、札掛から塔ノ岳を經て丹澤山頂に達し、同じ路を札掛に戻つた簡單な記錄で、それによると札掛の御料林の事務所に宿泊を乞ふには、「愛甲郡厚木町の郡役所におらるゝ視學の櫻井諗氏に宛てて紹介狀を依頼されゝば喜んで書いて呉れる事になつてゐます但し當人の姓名住居は勿論職業をも記せられたきものである。此の紹介狀があれば氣持好く優待して貰へる」そうである。又「此後十五年も經ると天然の古木老樹皆伐採される時期が來ると云ふ話である……夫故自然の山靈の氣に觸れることの出來るのは玆數年間であらうと思ひます。」といふ行を讀むと、丹澤世傳御料林の前途甚以て心細い次第である。あの美しい、そして樹種に富んだ闊葉樹林が蚰蜒に舐められた樣になつてしまひ、碌碌生長もしない檜の若木が山津浪で推流される悲慘な景を想像すると、錢神(マンモン)の前に額づく鼠輩を呪はずには居られない。

『霧の旅』第三號に掲げられた久野君の「丹澤の山々」は燒山からキビガラを經て北面から毘盧ヶ岳に登り、丹澤山、塔ノ岳と縱走して大倉に下つた簡潔な案内的記事で、燒山連山縱走の最初の記錄である。其内「順路と行程」なる一項中「丹澤部落(俚稱新宅)から西に塔ノ岳に登る」とある一行が、若しや私の記事から導かれた誤謬であるならば、私が人を誤つた罪を謹んで謝する外ない。

久野君は「此の山脈について缺點とする所は溪流に接せられぬ事と森林に遮ぎられて、眺望のきかぬ事である」と言はれるが、私も一面同感である。實際毘盧ヶ岳の頂上から北望が出來たら、丹澤山頂に岩石重疊した地點があつたら、塔ノ岳から丹澤や毘盧を指呼の間に望めたならばとは此三山をあるいて誰しも感ずることであらう。しかし私は溪流に接せられないといふ非難に對しては遺憾ながら直に首肯し難いのである。玄倉川の上流、早戸川の上流、神ノ川を溯つて此の連脈の何れかに登ることは可能でもあり、又愉快な行路であると思ふ。勿論斯の如き點は各人によつて異ることて、それについて意見を異にした處て少しも久野

君の記文の價値に影響するものでは毛頭ないことて、殊に同君の大膽な計畫とそれを實行された勇氣と、かくして得られた結果とは、やがては松本君の一行をして一日で丹澤三山を縱走し終らしむるに與つて力がある。

松本君が霧の旅會の有志と靑野原村から燒山を經て丹澤三山を一氣に縱走し去り曾屋に下つて即日東京に歸られた記事は、『霧の旅』第五號に掲げられたものと、『山岳』第十四年第三號に載つて居るものとは大同少異である。昨秋跋涉された折の紀行であるから、最近の記錄として、大に參考に資するに足りるのである。

長々と書連ねた此の記事もこれで筆を擱くことゝするが、尙結末に方つて一言して置きたいのは、丹澤三山を縱走するには燒山を經て上り、塔ヶ岳からの下りには三ノ塔山を經て菩提に下るのが、山稜縱走としては最も壯快で、且つ多數の峯に上り、又廣大な眺望を擅にすることが出來る。就中燒山の頂上は其尤なるもので、近く此山脈の盟主を仰ぎ、遠くは西に方つて蝙蝠岳から、荒川、白峰三山、鳳凰山塊、朝與岳、仙丈の一部、甲斐駒ヶ岳等を手に取るが如く望むことが出來る。從つてそれよりも近い富士、丹澤山塊の他の峰々、道志山塊、御坂山塊の一部、北に廻つて大菩薩連嶺、秩父の山々の如き、東北には關東平野の彼方に聳つ筑波や日光の山々まで展望出來る點は、一〇〇〇米を僅に超へる山としては比類稀である。

燒山から毘廬ヶ岳迄の路は明瞭で、容易で、且つ愉快な點は、冬などこの間だけ散步旁々步いても中々興味がある。殊にヒメツギ附近、袖平、原小屋、地藏などは最も愉快な地點であると思ふ。毘廬ヶ岳から丹澤山頂へは極ゆつくり寫眞でも撮しながら行つても二時間あれば十分、通常に步けば一時間でもよからう。丹澤から塔迄も道草を喰つても一時間半、尊佛へ寄つて遊んでも二時間迄は要さないと思ふ。

しかし丹澤山塊は前に『山岳志』に關する卑說の中に述べた如く、單に丹澤三山に止まらないもので、西は籠坂峠から、甲、駿、相界の三國山に連り、東端は志田山（シダヤマ）、八管山（ハスガサン）あたりに及ぶもので、

狹意に見てさへ道志川の右岸と酒匂川本流の左岸に挾まれた山岳丘陵を含むのであるから、跋渉す可き地域は甚だ廣いのである。又啻に山峰のみならず、溪流を探り瀑布を訪ねれば、此山塊全部を跋渉するに兩三年を費すも十分とは言ひ難いであらう。更にそれに連る道志山塊、御坂山塊などは、秩父山塊の西南部と共に、東京からの跋渉地としては容易でもあり、且つ興味も甚だ深いもので、これ程變化に富んだ遊山地を手近に扣へて居る東京市民はまた多幸と言ふ可きである。（武田久吉）

## ○釜澤行

都門の春はもう餘程深くなつた。滿目の新綠も濁つたやうに色が濃くなつて、暗いまでに繁り合ひながら、折からの雨に重く垂れてゐる。其中に獨り石榴の花が炎をあげて燃えてゐる火のやうに赤い。それが動もすれば幽婉の天地と同化して情熱の高潮に達し易い此頃の人の心を表はしてゐるやうだ。此際頰杖でも突きながら昔の大宮人のやうに官能の甘い悲哀に耽るのも、人間に對する自然の同情を無にしたものではなからうが、自分は一度試みてそれが忘られぬ思ひ出となつてゐる五月の山の旅、あの盛んな青葉の中を縱横にもぐり歩きたい。渦まく若葉の青い炎に煽られて、抑え難きまでに逸る心は、一方では又深い淵のやうに無限の力をうちに湛えた綠の大波に揉まれ〳〵て疲れ果てた體を波の弄ぶに任せながら、身邊に溢るゝ生命の囁きを感じつゝも、力なくさりながら些の不平もなく、不思議に慰安と滿足とを得るのである。自分は石榴の花をぼんやり見詰めながらそんなことを考へてゐた。そこへ折よくも訪れて來たのは田部君である。同君も矢張五月の秩父の旅で受けた深い印象を忘れ兼ねたのであらう、頻りに秩父行を慫めて。相談は立どころに一決した、中村君も强制的に同行させる筈であつたが急に南洋へ行くことになつてしまつた。秩父の青葉よりも南洋の青葉の方が一層盛であるに相違なからう、どうせ行くなら南洋の方がいゝなと思つたが仕方がない、秩父で我慢することにして、差し迫つた用事を撤夜して片付け、五月三十一日に翌日の晴

れを見越して、雨の中を午後十一時飯田町發の汽車に乘る。

笛吹川の上流西澤を遡ることが此旅行の主眼であつた。このことは今迄不可能であると言はれてゐたが、可なりの困難を豫期したならば、石塔尾根を登つてから澤へ下り込むやうなことをせずとも、或は通れぬといふこともあるまいと想像して次のやうな計畫を立てた。西澤を遡つて國師奥千丈二山の間の鞍部三繋平に登り、荒川に沿ふて御嶽方面へ下らうといふのが第一案で、三繋平へ登つたならば、國師岳を踰えて金山澤を下り、更に釜澤に入り、甲武信岳から林道を栃本に出やうといふのが第二案であつた。然しどれも皆知らぬ澤である上に、どうも樂に通れさうにも思へぬ。是に於てか流石豪放な田部君も、後者は四日の旅には餘り大袈裟であるといふので否決し、先づ荒川を下ることに極めて置いて、若し西澤の遡行がむづかしい場合には、釜澤入りを決行しやうといふことになつた。

鹽山驛で下車すると案の如く空は雲切れがして程なく晴れさうな氣配だ。いつも五月の秩父の旅では出懸に降られても、山に這入つてからは天氣の好くなることを信じてゐる田部君は、てんで雨の用意などはしてゐない。自分は大きな油紙に重い雨合羽まで支度して、役にも立たぬ苦勞をした。

此處から廣瀨に至るまでの道は、正面に奇怪なる乾德山の姿を眺め、次で途中一ノ釜の壯觀も見られるし、滑澤の瀑も立派であれば、更に上流の岩崖には、藤や躑躅の花が時を得顏に咲き匂つて笛吹川の碧潭に影を蘸してゐるなど、捨て難い風情はありながら、何度となく通り慣れては飽きる程長い。廣瀨に着いたのは六月一日の午前十時十五分。この寒村に宿屋のなかつた頃は、各自に家からわざ〳〵米を持つて行つたものであるが、今度は其勞を省いて、此處で米二升四合を買ひ入れた。六食二日分の量にしては少し多いのであるけれども、前回の苦い經驗に鑑みて、餘分の糧食を携へたのである。空は晴れたが雲は頻りに飛んで間近く見える筈の破風も木賊も姿を露さない。

バラ平を過ぎて子酉川が左に折れるあたりから、道は河に沿ふて木立の中に這入つて行く。頰を撫でる若葉の風に迎へられて、青笹川を渡るともう陰森の氣が迫つて來る。下蔭に笹が多い爲であらう。森林の笹の中を辿るのは妙に淋しいもので、どうかすると薄氣味わるくさへ感ずるものである。十一時四十五分ナレイ澤の右岸を降りて、子酉川の河原に出で、岩魚釣りの小屋に休んで晝食にする。小屋といふても木の枝を編んで造つたものであるから、露天よりはましといふ位の程度のものに過ぎない。小屋の上には大きな木が差し懸つて、葉裏を洩れた日光が、黃金の雨のやうに落ちて來る、無數の羽蟲がぶん〳〵呻りながら、この大木を取り卷いて枝端から枝端へと飛來飛去してゐる。能く見ると小さな白い花が咲いてゐるのだ。水を汲みに飯盒を下げて汀へ下り立つと、向ふ岸は崖をなして、其下は深くはないが淵になつてゐる。崖には日蔭躑躅が咲いて、薄黃色の上品な花の影がくつきりと水に映つてゐる。それが波のゆらめくに連れて、絨氈の模樣のやうに擴がつたりする。とろりとして油のやうな水の面には、ほぐれ落ちた苞や鱗片の類が、時には何かの花瓣や青い葉なども交つて、みを筋を後からも〳〵と列をなして浮いて流れて來る。自分はやをら水を汲み上げながら、如何に生命の盛なる活躍が今行はれつゝあるかを想ふて眸を上流の山々に向けずにはゐられなかつた。

これから子酉川の河原を遡らなければならぬ。白い御影石の河原は、初夏の日光に照りはえて、ぎら〳〵と陽炎が燃えてゐる。青葉に慣れた眼が眩しさに思ひ切つて瞳孔括約筋を引き緊める。河上から折々雲が颪して來て、谷の空氣が潮の退くやうに仄に薄曇ると、濃藍色をした深い上流の山の端から翠の影がさつと谷間を流れて、體がひやりと冷たくなる。雞冠山の眞黑な岩壁には、いつもながら綠の大波が渦を卷いてぶつかつてゐる。そして何てもこの時知らぬ顏の岩が根を埋沒しないでは止まないといつたやうに、幾重にも重り合つて犇々と押し寄せてゐるさまだ。古城の塔の如くに聳えた岩壁の尖頂は胸から上を拔き出したま

丶屹として動かない。

暫くして左から大きな澤が落ち合つてゐる、水量も伯仲の間にある、これが西澤に相違あるまいと斷定して、不安と期待とに騷ぐ胸を押し鎭めながら、落ち口の大きな岩を蹈み越えて、其方へと足を向けた。此處は黑部川の東澤と似かよつてゐる、唯規模が彼に比して小さい。

河原は思つたよりも開けてゐて、可なりの廣さがある。これなら何の心配もあるまい、噂とは大分相違して案外樂に行けるぞと早合點して、何か落し物でもした時のやうに、輕い失望の氣が起らぬでもない。二三町にして左から可なりの澤が六七丈の瀧をなして注ぎ入るのを見た。大窪谷といふのだと後に聞いた。オヤと思ひながら夫を通り過ぎて、不圖前面を見渡すと、一町許り先の所で急に兩岸が峭壁をなして狹まり合ひ、行手に見透せてゐた空も木立に遮ぎられて、河の流は何處へ向つてゐるのか、まるで袋の底に行き詰つたやうで、更に見當が付かなくなつた。さては愈始まつたなと急に氣が引き緊つて來る。行ける所まで行つて見やう、これが當り前なので、今迄が呑氣過ぎてゐたのだと話し合ひながら、側まで行くと驚いたことには河が急に右に折れて、廣さ八九尺高さ五六丈の峽谷を形造り、四五間にして再び俄然右に曲ると共に、吹き上げるしぶきの中から耳を聾する轟轟の響が聞える。殆ど河床を塞ぐばかりに大きく蟠つて、左右に小瀑布をかけ連ねた巨岩を辛くもにじり上り、正面に廻つて見ると狹い上流の峽谷から逃れ出た水が、二三丈の瀑布（魚留瀑）をなして一躍碧潭に奔下してゐる。全く狹い、一間位しかあるまいと思つた。鳥でも鷲のやうな大きな翼を持つたものでは、あの狹い谷の中を飛び行くことは不可能らしい。其上兩岸は叢のやうに繁つた木立である。危險を冒して瀑と向ひ合つてゐるザラ〳〵の急斜面を攀ぢ登れば、旨く瀑の上へ出られるにしても、横を搦んで遡行することは容易な仕事ではない、二升四合の米ではとても遣り切れないと腹の中ではそろ〳〵逃げ支度にかゝりながら、顏だけは平氣を裝つて、オイ如何すると聞いて見る。如何するつたつてこれぢや仕樣

がないよと返辭が此方の思ふ壺だ。そこで、これから上が全部この通りと假定すると、京ノ澤の小屋まで行くに二日は懸ると見なければなるまいから、西澤は斷念して釜澤へ入ることにしやう、そして甲武信岳へ登つて栃本へ下らうではないかと正直な所を白狀する。午後十二時三十分に出發して一時四十分頃また西澤の落口に戻つて來た。往復一時間許りを費した譯である。この翌年の五月天科村の廣瀨庄太郎を案内者として、同じく釜澤を登つた冠君の書面に據ると、西澤も遡れぬことはないさうである。他にも參考になる事が少なくないから玆に其文を引用することにする。

御庇を以て東澤の新綠美を味ひ候段深く御禮申上候。然る處釜澤の上流にて、不覺にも澤一つ右へ入り、木賊山の頂に登り申候。人夫は釜澤の途中迄しか入りしことなく、小生の地圖の見方の惡かりしと、霧深く候ひし爲とにて、この間違ひを生じたる事と存じ候。釜澤は立派な澤だと思ひ候。夏天幕を張り、西澤と東澤の上流に魚釣りがてら遊び度相成候。西澤はたしかに登れるとのことにて其途中には東澤のものより遙に大なる池の如き釜がある由に候。貴兄御一行の泊られし東澤の釜は、土人はホラノ貝と申候。釜がホラ貝に似てゐる爲だとかいふことに候。釜澤の上流は所々雪に埋められ、木賊山の頸あたりは大石楠の密叢の中を雪をふみ込んで登るのが困難に有之候。然し木賊山へ登る尾根は比較的なだらかにて、案外樂を致し候。甲武信の信州側は小舍まで全く雪に封じられ、戰場ヶ原の一時間行程の處まで所々に殘雪有之候。東澤は釜澤の途中まで新綠滴るが如く、石楠、つゝじ、日蔭つゝじなど美しく、釜澤では櫻花が滿開に有之候ひし。

行程は廿三日(五月)飯田町夜行。廿四日午前四時半鹽山出發、午前八時天科着(廣瀨庄太郎を雇ひ)東澤の小舍泊り。廿五日釜澤を上り、木賊甲武信を經て梓山泊。廿六日午前五時三十分梓山發、日野春に至り、午後三時五十四分の上り汽車に乘りて、午後十時少し過飯田町着。歸宅。

又河原を辿り始めた。東澤を遡るのはこれで三度目である、初ての時は何處迄も河原を辿らうとして大困難をした、そして偶然ホラノ貝へ下り込んで泊つたのである。二度目には鷄冠谷の入口から左岸に路のあるとを知つて、廣河原まで二時間許りで行くとを得た。然し此路も去年よりは一層分り惡くなつたやうである。岩の上に積つた落葉などは其儘濡れ腐つてはや半は土に化してゐる、本年はまだ誰も通つた人は無いらしい。其處を登つてからも右に行く路と離れて河に沿ふやうになつてからは、笹が掩ひ被さつて來たし、崖に寄せ掛けた丸太なども朽ちて危ないのがある。もう年々壞れる一方であらう。廣河原には冠君の話に據ると河原から少し離れて鷄冠山の側に、二三人は泊れる岩窟があるとのことである。廣河原からまた河原を傳つて二十分足らずで小屋に着いた、いつもは三十分程かゝつたのであるが、滿一年間寢足にして置いた割合には存外早かつた。四時十五分である。

小屋は昨年よりも奇麗になつてゐた。入口に林區署員の外猥りに入る可らずといふ意味のことが立てかけた板に書いてある、去年は見なかつたものだ。已むを得ないから片隅を借用することにした。田部君は夕食の支度にかゝる、私は燃料を集めた。鉈も鋸も邪魔だから持つて來なかつた。その爲手近に枯木はあつても、遠くまで流木を拾ひに出懸けなければならない。日は蒼茫と暮れて、烟の靡く南の方の少し開けた木の間から、夕榮えした樺色の雲が高く望まれた。明日は上天氣だ。用もないから早く寢ることにする。

六月二日。午前四時から起きて支度し、去年に懲りて晝食の分も炊いて、六時三十分に小屋を出た。暖いやうに思つても日の指さぬ朝の谷間は河風が寒い。空は瑠璃色に冴えて、仰ぐ梢からは露が零ちて來る。崖からのり出した日蔭つゝじの黄花が、薄暗い木蔭にほんのりと暖い色を浮べる、深山酸漿草の美しく咲きこぼれた草原を通り拔けてまた河原を辿つて行く。

飛烏川ならぬ東澤は一年の間にさして變つた樣子も見えなかつた。この狹い一枚岩の河床から成

る峽谷では變りたくも容易に變れるものではない、唯だ削り出された石の屑が所定めず漂積するに過ぎない。行く〳〵豪壯の景を賞しながら、七時半釜澤の出合に達した、一時間半は懸ると思つたのが三十分早く着いた。此處は大井川の支流信濃俣のガッチ河内と中俣との合流點から、中俣を見た景色に似てゐる。岩壁が高く、谷が狹く急に折れて、奥はどれほど深いか、どんな恐ろしい所が藏されてゐるか、入口を覗いただけでは分らないが、それてゐて物凄い何物かを暗示してゐる所までそつくりだ。唯水量は中俣の方が餘程多い。

釜澤の釜は入口から四五十間を遡つた所にある第一瀑の瀑壺から始まるのであるが、此澤は釜よりも寧ろ瀧の方が多いから、たる澤とか瀧の澤とか名付ける方が至當であるらしい。然し最初の瀑壺は大さといひ深さといひ又周圍の工合といひ、四五丈の瀑には勿體ない程の素派らしい釜である。この釜あるが爲に釜澤と呼ばれてゐるのかも知れぬ。釜の周りを取り卷いてゐる峭壁は、鉋をかけたやうに滑かで、襞もなければ皺もない、全く一續きの岩である、北から落ち込んだ水は、上流から運び來つた無數の巨岩塊を釜の南側に山と堆積して、一曲して西側を押し破つて流れ出てゐる。其處を徒渉して黑木の繁つた急傾斜を攀ぢ登り、瀑の西側を乘り越えて上流に下り込むより外に手段はないと思つた、後に冠君の話を聞くと、普通獵師などの入り込む路は、反て東側に在つて割合に樂だとの事であつた。自分等は木こそ生えてゐるがあの岩壁はとても通れぬと思つてゐた。所が冠君は自分等の通つた方をとても通れぬと思はれたさうである。結局兩方とも通れることになつたのである。尙ほ瀑壺の南側の木立の中には七八人も泊れる大岩窟があつて、如何なる天候にも安全なる避難所であるといふ、唯周圍が周圍だけに陰氣であるのを免れないさうである。

成るべく瀑壺の緣に近い所を登つて突端に出ると、向ふ側は俄に扶れて急斜面の中央に細い段のやうな所がある。其處に旨く路が通じてゐた。慥に人の通つた路である。この澤へも入り込む人があるのかと不思議でならなかつた。下りた河床は花

崗岩らしいが、しかも著しく青味を帶びた一枚の大磐石である。左右が少しく開けて、木は繁つてゐるが明るい感じのする所だ。暗綠に沈んだ水は音も立てずする〳〵と辷つて行く。岩の肌には水苔が滑に生へて、其上を歩くと人までがよく辷る。

平な河床は然し長く續かなかつた。また瀧がある、夫を踰える、また瀧があるといつた調子に、何でも四つ許り瀧を越した。孰れも小さいのでさしたる困難はない。それでも水際ばかりは通れないので　或時は右側の藪を潛つて倒木に困しめられ、或時は左側の草の生へた崖を登つて上を廻つたりなどする。

「誰が通つた跡だね、こんなに枝が折つてある」

「慥に人だよ、釜澤へも這入る者があるのかな」

今まで人跡未蹈と獨り極めて信じてゐた自分等はあれ程立派な道形があつたにも拘らず、人が通つたことのない澤として置きたいので、仰山らしくこんな言葉をいひ交はした。

森林は愈深くなつて、空から反射する弱い光線は、青木黑木の蔭に吸ひ込まれて、吐き出された木の下闇のみが宙をさ迷ふてゐるに過ぎない。高く昇つた筈の太陽も、更に高い鷄冠山の峯頭に遮られて、自分等は今朝から未だ一度も其光に浴することが出來ないのだ。不安らしい顏を見合して二人とも押し默つて行く。河が左に折れて右岸に小高い砂地が現れる、洪水の際に水が置き殘したものであらう。中央の稍や平な所に黑い塊があるのに氣が付く、よく視ると焚火の跡である、誰か野營したものに相違ない。今迄まさかと思つて半信半疑であつた二人の心は、この確な證據を目の前に突き付けられても、敢て反感を抱かなかつた程淋しい賴りないやうな感じに支配されてゐたのであつた。

河はすぐ又右に折れて北を指すやうになるが、氣の所爲か險惡の度を減じて來た樣に思はれる。兩岸も少し開けて、水邊には滴る樣な青葉を枝一ぱいに翳した闊葉樹が鬱蒼と生へ續いてゐる。岩も小さくなつた。水は淺い瀨を成して淙々と流れて行く、あの力任せに岩をこづきながら奔下する勢はまるでなくなつてゐる。苔の匂ひと若葉の吐

く息の香とが、其處ら一面に漂ふてゐる森林の一端に足を蹈み入れた時は、うつとりと氣も遠くなる程であつた。こんな安逸が何時までも許されやうとは元より期してゐなかつたが、八時五分、前面に展開した不思議な光景に對して、釜澤の深い秘密に今更のやうに驚嘆してしまつた。

行手は高い絶壁に限られて、其下には萬斛の藍を湛えた大きな釜がぐら〳〵と冷く煮えくり返つてゐる。其處へ左から河が落ち合つてゐるのだ。左は五丈乃至六丈もあらうと思はれる瀑の太い水柱が、奇妙に抉れた岩の樋からぐいと押し出されるはづみに、二度三度虚空に捩れて、螺旋狀に擴りながら霧の如き飛沫を潰いて、大釜に跳り込んでゐる。仰ぎ見ると上流は、樺や栂の類が崖の端から幹と幹、枝と枝とをすり合せて奥へすく〳〵と立ち並んでゐるのが眼に入る許りで、水は何處をどう流れて來るのか皆目分らない。それで初は岩の裂罅から地下水が迸り出てゐるのではないかと想つた。然しよく視ると此谷らしくはない森林の山ひらに似た所に、極めて狹いそして折れ曲つた銚子の口のやうな一道の隘溝が通じてゐることに氣が付いた。

右の瀑は高さは三四丈に過ぎないであらうが、幅は一丈近くもある。滑かな岩肌をする〳〵と辷り落ちる水は途中幾つかの岩の襞に遮られて、玉を轉すやうに彈ね返つてまたする〳〵と大釜にのめり込んでゐるから、練絹を垂れたやうだとも云ひ兼ねるが、孰れかといへばこの大釜の一半を領する主人公としては優しいものである。水量は左瀑よりも多いかと思はれた。これが若し大雨の後であつたならば、奔放の勢は反て左瀑に勝るものがあらう。リヤウモンノ瀑といふ名のあることは、後に冠君から聞いた。

大釜の向ふ側こそ絶壁であるが、其他に人を威嚇する何等の道具建てがないのは實に幸である。若し兩岸に一丈近くの絶壁が四五十間も續いてゐたならば、單に夫だけで私達は此奇景を飽まで嘆賞した後、悄然として歸途に就くより外に方法はなかつたであらう。勿論左の谷を登ることは容易に行はれさうもないが、本流と思はれる右の澤は

大釜の手前の淺い所を徒渉して左岸に移ると、其處に大石を積み重ねて足場のやうなものが造つてあり、人の蹈んだらしい跡がある。何處か登り口はないかと夫となくあたりを見廻してゐた二人の眼は、期せずして其處に止つた。あれを登れば大丈夫行けると目當が付いたので、安心して荷を卸した儘十五分許り休憩した。

八時二十分出發して右の瀑の上を右岸に移る。足跡は何時か消え失せて、これから甲武信岳の頂上に達するまで遂にそれらしいものに出遇はなかつた。其時は別に注意して確めもしなかつたが、察する所これは水止(ミシシ)から南方に派出してゐる尾根を上下する爲のものであるらしい。去年誤つて水止から此尾根に迷ひ込んだ時、可なりの路が通じてゐるのを見た、そして餘程下つた所に焚火の跡さへあつたことから推すとこの推測は當つてゐるやうに思はれる。

瀑から少し行つて河が左に折れると又五丈許りの瀑がある、それを踰えるとすぐ又四丈許りの瀑があつた。其瀑は一丈も落ちると突出せる岩に撞き當つて、あたりに白沫を散しながら飛舞するさまが壯快であつた。此瀑は二つとも左岸が急ではあるが岩壁ではないので、難なく越えられた。其上は河原が稍や開けて、行手に初めて甲武信岳の頂上が仰がれた。三四町も行くと落葉松の多い平坦地に出る。自分等が東澤へ入り込むやうになつたのは、この落葉松林に惹き寄せられた爲であるといふてよい。曾て國師甲武信二山の間の山稜を縱走した際、東俣ノ頭(東梓山)の東北に在る岩峰の上に休んで、ふと脚下を見ると黑木の欝蒼と茂つた東澤の深い谷間に、淺綠の色鮮かな落葉松の木立が、並木狀をなして稍開けたらしい河原のほとりに立ち並んでゐるのを見た。あすこへ行つて見たいといふ願が誰の胸にも萠えた。信州澤にもこれに似た所がある。其時見たのは孰れであつたか未だに判然しないが、それ以來東澤の奥で落葉松を見ると何となく懷かしい。八時四十五分で晝には餘程早いのであるが、三十分餘り林憩して食事をした。天氣はよく晴れて殊に南方の空は碧の色が一しほ鮮である。それを蒼黑い石塔尾根が眞

一文字に横切つて視界を遮斷してゐる。

此處から一時間足らずの間は、河を右に左に渡りながら斜面に沿ふて進んだ。木につかまらなければ水に落ち込みさうな場所などもあつた。兩岸が急に迫つて不安を感ぜしむることも一再ではなかつた。しかし水量は少なく、其上高い岩壁は最早現れることはあるまいと思はれたので、前途に對する危惧の念は薄らいだもの丶、相當に骨の折れたことは言ふ迄もない。途中いつ河を離れたとも知らぬ間に藪になつた廣場へ出て、不圖氣が付くと河が見えないので驚いたことがある。此處で河をなくなしては困るから二人で探しにかゝる。刺の生へた木苺が邪魔で仕方がない、地面も凹凸があつて歩き惡い、水の流れた跡は幾筋もあるがどれも新らしいものではなかつた。耳を澄しても水の音などは更に聞えぬ。右にも左にも大きな澤らしい窪はある。木の間を仰ぐと甲武信岳の頂上が見えたので、構はず左の方を辿つて行くとまた流に出た。つまり此所で河は地下水となつてゐることが分つた。翌年冠君が霧の爲に澤を右に取つて木賊山に出られたのは、この右の澤を上られたのではあるまいか。鷄冠山の側に可なり大きな雪溪の喰ひ込んでゐるのを見たのも亦この途中であつた。

闊葉樹は次第に少なくなつて、針葉樹の間に濃木狀をなして散在するに過ぎない。それも春まだ淺く芽がほぐれ切らずにゐる。草などは今漸く冬の眠から醒めてほの紅い角芽立ちを見せたまゝ、澍々とふる春雨を待つてゐるさまだ。しかし針葉樹林も眞ノ澤の上流のやうに頭上が暗い程には茂つてはゐない、餘程明るい感じがする。十時十分又一の瀑に出遇つた、幅も高さも相應にあるが水は少ない。右側の枯草がしな垂れてゐる崖を登ると思つたより樂に通過された。上は一枚の大磐石であつて直ぐ左から一つの澤が合してゐる。此は水止の東南にあるガレの下から發するものであるらしい。これから上は河床を辿つて五六町は歩いたらう、すると澤が二分して、水量も大さも殆ど同じ位である。そして其間の尾根は非常に幅が狹く、而も一町位の先で終つてゐさうに思へた。それ

てこれは一つの澤に抱かれた島のやうなもので、どちらを取つても間もなく一緒になるものと想像して、左に入つて暫らく行つて見たが、一つになる樣子はない。それ所か澤は俄然狹く急になつて、兩岸に岩壁が現れ、終に全部雪溪となつてしまつた。其雪が上るに從つて氷のやうに堅く凝結して、其上を水が流れてゐる。それも暫しの程で、間もなく淺碧に冴えた氷の瀧が行手を塞いでゐる。水は依然として其上を流れてゐるが、滑つて危險で到底之を登る譯に行かぬ。初めは面白い景色になつたと喜んでゐた二人も、是に至つて止むなく少し引返して、崖をしやにむに攀ぢ上り、先の痩尾根の上に立つて一休みした。

尾根は石楠其他の灌木に栂や唐檜の若木が交つて邪魔をする。時々振り返つて後を見ると、南アルプスの雪が木の間に白くきらりと光る。左下の谷にいつか東澤のホラノ貝で見た熊の穴に似たやうなものがあつたので、双眼鏡で覗くと果してそれらしい足跡までが柔い地面に印せられてゐた。五百米突足らずの登りも、相應にくたびれるのでよく休む。其間に中食も濟した。尾根の形が失せて山のひらに移つた頃から、針葉樹の密林の下には諸所に殘雪が現れ、而も六月の秩父には珍らしい程の量がある。もう餘程來た筈であるが、何の邊であるか更に見當がつかない。何でも高い方へ登りさへすれば甲武信岳へ出られるといふので、成る可く雪を避けるやうにして左へ卷きながら登つた。藪が一きは烈しくなつて、石楠の密叢へ行き當る、夫を突き拔けて左の方へ五六歩行くと、ひょっくり甲武信岳の頂上へ出た。午後十二時二十分である。

想へば釜澤を遡つて見たいといふ希望は久しいものであつた。甲武信岳の頂上へ來る度に、いつも果されざる憾を以て、すぐ脚の下に瞰下ろしたまゝ空しく過ぎ去るに止まつてゐた其澤を、斯うして無事に遡ることが出來たと思ふと、見慣れた此山の頂上も自分等には新らしい意味を以て迎へられた。殊に今日は上天氣である。白馬岳の附近と奥上州方面とを除けば、此處から見られる筈の山は皆一望の下に集つた。小川山の上からは木曾の御岳が覗いてゐた。八ヶ嶽と蓼科山との間に奥穗

高、常念、大天井から鹿島槍、五龍に至る北アルプスの大立物が、銀光燦として遙かの空際を天馬の如く躍つてゐる。籠ノ塔の後には岩菅山らしいものさへも望まれた。

頂上に駐ると約一時間にして、午後一時十五分林道を栃本に向つて下り始める。十間も行くと雪が二三尺も積つてゐるのに驚いたが、更に進むともう何處も眞白に雪に埋れて、地面の露れてゐる所などは少しもない、路筋さへも一向に判然せぬ、油斷して林道を踏み外すと全身雪の中に埋沒してしまふ。二時十五分漸く三寶山の下まで辿り着いたが右に下る道筋が容易に見付からないので、雪を掻いて地面を改めたりなどした。膝から下は既に感覺を失つて、埋れ木に向脛や蹠などを拂はれたり打ち付けたりしても少しも痛さを感じない。甲武信岳の頂上に着いた時、誰が捨てたものか蓑が一つ置いてあるのに氣が付いた、勿論多少の雪は覺悟してゐたのであるから、あれで支度をして來ればよかつたと後悔しても、今更どうすることも出來ない。一層のこと復去年のやうに眞ノ澤を下らうかとも思つた。けれども水のある所へ達する迄は四五尺から六七尺の積雪を踏み分けて行くのが困難である、寧ろ不可能と稱してよい。二三十分も迂路付いた果てに林道が通じてゐるらしい木立の間を少し辿つて見ると、慥にそれであることが分つたので安心はしたものゝ、雪の盡きる所まで二十町許の間を非常に困難して、三時半辛くも雪から脱れ出た時は、久振りで土を踏んだやうな氣がして嬉しかつた。

早速火を焚いて凍えた體を暖め、濡れたヅボンや脚絆を乾した。見ると向脛には幾所か紫色の斑點があり、蹠にはとげが二つ許り刺さつてゐた。田部君は脚絆と足袋の間が隙いてゐたので、其部分は凍傷に罹つてゐた。時間が遲いから餘りゆつくりしてゐられない。三十分許休んで出發する。暫くして道は二つに岐れ、一は右の方へ澤に下つて行く、尤もこれは後にまた尾根の道と合するらしく、可なり下つた所に右から一徑の來るのを見た。自分等は始めから左の道を取つて、五時二十分頃木賊澤の合流點に在る小屋に着いた。

小屋の修繕や掛樋の手入れをして、晩飯を濟すと横になつたが、寒いのと體が痛いのとで旨く寢付かれない。近くの木で何鳥か頻りにゼニドリゼニトリと鳴くのが聞える。この鳴聲は曾て中村君が黒部の谷で初めて聞いたと言つて話したが、自分等は今夜秩父で初めて耳にした。其後南アルプスの方でも聞いたことを覺えてゐる、廣く山地に棲息してゐるものらしい。小さい鳥で本名は知らないが、ゼニトリといへばあゝあれかと合點のゆく人が多いであらう。

六月三日。今日は栃本泊りであるから、ゆる〳〵支度して午前八時に出發した。途中例の通り木賊瀑の見物や石楠の花に見入つたりして、いつも朽ちてゐやせぬかと心配の種である松葉澤の橋も無難に通り越し、赤澤の合流點に着いたのは丁度十二時であつた。途中の闊葉樹林は主として椈であるが、直徑二三尺以上にも及ぶものが少なくない。黒平方面から金峰山に登る間や、雁坂舊道の椈の林と共に奥秩父の最も美しい闊葉樹林と稱して差支ないであらう。此邊で落ち付いて休み度いといふ平素の願の通り、今日は此處で晝飯を炊いて氣持の好い河原の石の上に横たはりながら、飯の熟するのを待つてゐた。日蔭は少し寒いし日向は少し熱い。晴れた青空に擴がる丈枝を伸した楢などの大木の若葉が、日光に透き徹つて、豐麗な生々した黄金色に冴えてゐる。飛び交ふ羽虫の翼が其間からひら〳〵と閃めく。實に長閑な晩春の行樂であつた。自分等はすつかり滿足した。

かくて栃本に着いたのは午後五時を過ぐること十五分であつた。（大正六年六月　木暮）

## ○河岸の左右と河堤の内外及雲の表裏

河の右岸左岸に就ては本誌第十五年第一號に木暮氏の述べられた通り、上流を背にして下流に向いた時の左が左岸右は右岸で、これには何等理窟はない。唯どつちにも言へるので、いろ〳〵間違が起る。殊に軍事等に於て地形を指示又は報告する時とか、地文地理上の記載に當り、河川と他の物體との關係を言ひ現はす時に於て、之を一定し

置くの必要あるから、假りに定義を下したまでの事で別に理窟はない、唯約束である。上流を背にして下流に面して立つた時と云ふ定めであるが、下流を背にして上流に面して立つた時と云ふ樣に反對の思ひ違ひを起すことがある。之れに就て私は次の樣に考へて其の間違を防いでゐる。

「人が河水と同一の行動を取る場合に右手の方が右岸左手の方が左岸とす」。上流を背にするとか下流を背にするとかいふと一寸間違ひ易い。河水は上流から下流に流れるものであれば、河水と同一の行動を取る樣に歩む時は必ず背は上流に向つてゐる、これは私の方便で何も大した理窟もないが、一つ一般人の常識の解釋と官廳の解釋と全然反對なるがために、河川行政上種々な感違ひがあつて時々問題になる事がある。それは河川堤防の「堤內地」「堤外地」である。兩岸に堤防のある河川の横斷面を假りに凹字形として、其內部に河水あり、兩側の凸出部を堤防とすると、何人にも堤內地と云へば水に面した方で、堤外地と云ふへば其外側を意味する樣に思はれる。即ち河の水を本位にして言へば、水に向いた方が堤內と謂ひたいし、之に反する方を堤外と稱したいのは人情の樣にも思はれる。然るに河川法や其附屬法令にある堤內地とは河水から言ふと外側で一般の耕地平地に接續する。堤外地と言へば河水に面した方の事を指すので、地方廳などで河川の取締をなす場合も矢張此解釋でやるから、開墾とか工作物の設置を許可する場合に願人の方で思ふてる內外と、監督官廳の意味する堤防の內外と全然反對の側になることがある。一般人の解釋は堤防は河川の爲に設けられたものなれば河水を本位として其內外を定めんとする。即ち河水に面した方が內で之れに反する方が外である。然るに人間の住居の多くある所から言へば人間が自己本位に自分の居住地に面した方を堤內、之に反する方即ち河水に向いた方が堤外と云ひ得ない事もない。唯本位の見方の相違である。堤防は河水の汎濫を防止するために造られたるものと解すれば河水本位に其內外を定めたくなる。又堤防は人間の安全幸福を計る爲に造られたるものなりと云ふ風に解釋すれば、一般の

人間の居住地を根元として其內外を定めたくなり、人間居住地に面する方を內とすれば河水に向いた方が外になる。之れをば人間本位と言ひたい。河川堤防の內法外法（うちつりそとつり）堤內地堤外地を定むるに當り、人間本位と河水本位とに依りて其內外の關係が全く反對になる。貨幣制度の金貨本位や銀貨本位の相違處の騷でない。凡て此等の事柄は約束によりてどちらにもなる事であるが、川の右岸左岸などは全くどちらにも解釋が出來るから、一定の定義をなすの必要がある。河堤の內外もまぎれのない樣に定義する必要あるが、之れは一般に解釋され易い意味の定義が必要と思ふが、此堤防の內外の解釋は私のみならず一般人が皆行政上の解釋と反對に解して居るものが多い樣である。地形を取扱ふ事の多い日本山岳會の諸兄は果して何うであるか。

以上は兩岸に堤防を有する河川の場合であるが、海岸堤防の如く堤防が一つしかない場合は堤外と云ふたら海に面した方、堤內と云ふたら陸に面した方と解されるのは普通である。此の場合は河川に於ける河水本位の如く海水本位に解釋すれば堤防の外と言へば陸に向いた方を言はなければならぬ樣であるが、河川の如く兩岸に堤防あるものと違ひ、一つの場合は人間本位に人間の住居を多く有する陸に面した方を內と云ふ方が穩當であらう、海上にのみに生活する人から見れば海面本位に海に面した方が內陸に向いた方を外と言ひたいかも知れないが、一般がそうでないから、仕樣があるまい。河川堤防の內外は河水本位、海岸堤防は人間本位に定め易いが、現今の官廳の解釋は河川の堤防も海岸堤防と同樣に人間本位で、海水又は河水に面した方が外、人間の多く住む方に面した方が內と言ふ。二つを有する河川堤防も一つを有する海岸堤防も同律に內外を決めらるるのも可笑しいが、現在の公的解釋は凡て人間本位である。

それから雲の表裏である。人間本位から言へば、人間は自己の面して居る方を表と言ひ、之れに反する方を裏と言ひたいものであれば、雲の下面即人間界に向いてる方が表、上空に向いてる方が裏

と言ひたいかも知れぬが、一方明るい方を表、暗い方を裏、陽を表、陰を裏と言ひたい氣もするものであれば、雲で云ふと太陽に面せる明るい方面、即ち上空に面する方を表、我が人間界即ち下界に面する方が裏と言はねばならぬ。人間本位から言ふのと反對である。高山を形容して「高く雲表に聳ゆ」と云ふのを讀んで、其雲表なる語を人間本位に解すれば雲の下底即下界に面せる底面に山頂が着いて居れば「雲表に聳ゆ」と言ひ得る。若し雲表なる語を太陽に面せる明い方面と解釋すると、雲層を突破して雲の上層まで聳えて居らぬと雲表に聳ゆと言へなくなる。然し雲より低い下界に居つて雲に着いてる高山を見ると頂上が雲に隱れても果して其頂巔が雲の上表まで突破して居るか否か疑問であるから、下界に於て「高く雲表に聳ゆ」なる形容詞を使ふ人があるならば、其人は雲表なる語を、人間本位に雲の下面と解する人と言はねばならぬ。極く高い山に登つて自分の登つてる山より低い山を見ると雲層に隱れて居るものもあれば雲層を突破して雲の上に頭を出して居るものもある。雲表なる語を太陽に面する明るい方面と解釋すれば、高山から其れよりも低い山を見た場合に其頂が雲の上層に頭を出して居る時でないと雲表に聳ゆと言へなくなる。然し實際高い山から低い山の雲との間係を見た場合でなくとも下界に於て山の高さを想像して雲の上層までも屆いてるものと思ふた場合には雲表に聳ゆと言ふてもよいかも知れぬ。雲と云ふても積雲などになると其下底と頂部とは餘程の高低差のあるものもあるから、そういふ積雲の上部に頭を出して居る事になると餘程高い山でなければならぬ。私は此雲表なる語を如何に解釋してよいか判然せぬ。何處の國の山岳會にもこんな定義がない樣である、小島烏水著に「雲表」なるものがある、著者は果して雲の表裏に就て如何なる解釋を採つて居られるだらうか、人間本位で雲の下面と解するよりも、太陽に面せる明るい方面を表と解する方が宏壯雄大の感あるが、著者は果して如何樣に解して居るかしら。私は常に山岳の紀行文などに「雲表に聳ゆ」なる句を見たり、烏水の「雲表」なる表題を見る毎に、雲

の表裏に對する疑問が起つて未だに解決して居ない。如何に解するのが正當であるか、會員先輩の意見を聞きたい。木暮氏の言はれる山の表裏に就ても容易に決定し難い問題で、山の形態の上から一般の人が認容する表裏ならよいが、都市村落の多い方を表と言ひ人口稀薄なる方面を裏と言ふたり、山の反對側の住民が互に表裏の言ひ合ひをしたりすることもあらう、矢張木暮氏の言はるる通り、方位を以て示す方が間違がないであらう。

裏日本表日本などは日本本土の地文地形から云ふても、天候の狀態、陽光の關係から云ふても、一般に表裏が認められる。地殼の構造よりするも內帶外帶に區分すると、外帶が表で內帶を裏と解釋するのは裏日本の人でも異議はあるまい。（山本德三郎）

## ○黑部峽谷の步道

黑部川の流域は其地勢の關係上、古來スバリ越即ち今の針ノ木峠より佐良峠に至る橫斷路の外は、特に路と稱する程のものなく、普通の人にして此峽谷に入り込む者は絕無と言ひて可なりしが如し。唯獵師及山林の盜伐又は鑛山の發掘を目的とする者は、獸を逐ひ良材を覓め鑛脈を探りて、險難を意とせず時に山中深く入り込みたる者無きに非ず。殊に盜伐は其害漸く甚しく、遂に加州藩をして、之を取締らんが爲に山奉行に命じ、隔年若しくは數年每に八月を期して、黑部山林を巡檢せしむるに至りしものと想はる。予は慶應義塾山岳會委員の好意に依り、其珍藏に係る新川郡（見取）鄕庄組分繪圖及山奉行の藏したる秘密圖と稱するものを見たるに、兩圖共に思の外正確なるものにして、陸地測量部發行の二十萬分一輯製圖の如きは、遠くこの二圖に及ばず、就中黑部川の水路は最も眞に近きを覺ゆ。憾むらくは比較研究す可き資料に乏しくして、其製作の年代を斷定する能はざれども、安政以前なるは疑なく、恐らく天保頃にあらずやと想像せらる。他日更に考證する所あらんとす。

今是に據りて山奉行の取りたる道筋の大略を記せば、黑部川に沿ふて鐘釣溫泉に至り、祖母谷を

遡り、中ノ谷の合流點附近より尾根傳ひに清水岳を經て白馬岳に至るあり。小川を遡りて越道峠より北俣に入り、杉谷横山峠を過ぎて黑薙川に下り、カシナギ深層谷を猫又山に登り、尾根傳ひに白馬岳に至るあり。小川の支流相又谷より吹澤に下り、黑岩谷より黑岩山を攀ぢ、山稜を南進して白馬岳に至るあり。又上流の地域にては、有峰より藥師野(太郎兵衛平)を踰え、藥師澤を下り、夫より黑部源流を遡りて鷲羽岳に出で、山稜を北進して南澤岳に達し、南澤を下りて針ノ木峠の道に出づるあり。尚ほ白馬岳より唐松・五龍二山の附近及び針ノ木峠より鹿島槍ヶ岳附近に至る山稜並に平小屋より御前澤に至る黑部川の沿岸は、之を通過したることあるが如く、又南越より餓鬼谷東谷を經て、牛首山の尾根を鹿島槍ヶ岳に至りたる形跡無きにあらず。されどこは暫く疑問とするも可ならん。

前記の行程は假に予が勝手に區分せるものなれば、實際は如何樣に行はれしか、記錄の大部分は既に散佚したりと思はるゝ今日に在りては、詳細を知るに由なし。然れども後立山山脈の大部分が、殆ど九十年前に於て既に蹈破されたることは疑を容れず。最近十數年に亘りて獨り飛驒山脈のみならず、所謂日本アルプスの地域が新に跋渉され、吾人が竊に或は前人未蹈と信じたりし地方も、唯古人の先蹤を趁ふに過ぎざりしもの多きを見ては、驚嘆せざらんと欲するも能はざる也。況や昨今此等の地方に初めて足を蹈み入れたるものが、自ら揣らずして未曾有の壯擧又は空前の記錄など稱するが如きは、登山流行熱に浮かされたる一場の囈語に過ぎずといふは酷なりとすれば、寧ろ稚氣愛す可しといはまくのみ。想ふに黑部川沿岸に湧出する溫泉は、是等目的を異にして此峽谷を横行縱歩したる人々の發見したるものならんか。

山奉行の山林巡視は上記の如く大規模に行はれしも、道路を開鑿するは或は反て盜伐に便ならしむる虞あれば、粗末なる切明けに相當する程度のものにて足れりとせしか、然らざれば一部分の外は單に通行したるに止りしものならん。鐘釣溫泉に浴舍の設けられしは、其年次明かならざるも、明治以後にはあらざるか。從つて其道筋も不完全

極まるものなりしに相違なく、片貝谷より三名引山を踰えて溫泉に通ずる路の開かれしは、其困難を緩和する爲のものにして、浴客は專ら此路に依りしものなるやも知る可からず。明治二十二年九月公用を帶びて後立山山脈を探險せし理學博士大塚專一氏は、音澤より黑部川を遡りて鐘釣に至り、三名引山を越えて島尻村に出づるに一週日を費したりといへば、今日よりも二倍以上の日數を要したるものにして、當時黑部川に沿ふて鐘釣溫泉に至る道程の困難なりし證とす可し。

明治三十五年大阪大林區署は黑部林道の開鑿に着手し、三十七年に至つて工を竣へたり。當時內山村より桃原の釣橋(黑部橋)に至る一里餘の間は、幅九尺にして車を通じ、桃原より鐘釣迄四里の間は幅六尺、鐘釣より祖母谷林道の終點まで約半里の間は幅三尺なりしといふ。尙ほ黑部川上流平ノ小屋附近に至る林道を開鑿する筈なりしも、收支償はざるを以て其議は中止せられ、爾後既成の林道も費用に堪えずして修繕を加ふることなかりしかば、今は大に荒廢したる所あるも、主として段丘上に作られし道なるを以て、山道としては上等の部に屬するものと稱するを得可し。大黑鑛山・小黑部鑛山の開坑は、黑部峽谷の通路に一段の便宜を加へたりしも、今や其廢坑と共にそが道路の壞滅も亦遠きにあらざらんとす。

然れども險怪と豪宕とを以て世に聞えたる黑部川は、其景觀の雄大と之が探求に伴ふ適度の必然的冒險性とを以て、此の如きを要求する何人の嗜好にも投合し、興味を唆ること大なるものあるが故に、道路の有無又は困難と危險とに拘らず、早晩登山者の注目する所となるに至る可きは疑ふの餘地なかりし也。果せる哉二三年このかた、峽谷に入り込むもの俄に續出したるはまた怪しむに足らず。而も其道程に至りては困難と危險とを伴ふこと多きを言はざる者なし。

然るに登山熱よりも更に激しき水力電氣熱は、この天惠に富める黑部川を捨置く可くもあらず、古河合名會社の測量は、一時の商略に過ぎざりしか否かは問ふ所にあらざるも、昨年造りたる南越より棒小屋澤の落口附近に至る切明けは、峽谷の

探勝に些の貢献なしとせず。三共株式會社も亦一二年前より下流及猫又谷等の支流に就て測量する所ありしが、愈〻資金を米國より仰ぎて東洋アルミニューム會社を創設し、大規模の發電所を黑部川に建置するに決し、且つ本年は櫸平より奥仙人澤に至る歩道を開き、更に上流に及ぼさん計畫なりといふ(會員通信吉澤君の項參照)。この歩道は昨夏予等の通過したる道筋と略一致せるものならんと想はる。此の如くにして下廊下の過半は通行頗る容易となり、探勝の人に便する大なるものあり。元より歩道のことなれば、絶えず修繕を加へざる限り、暴風雨の後或は春季に於ては崩壞を來し、其程度時に或は道路を作りしが爲に反て激甚を加ふる場合なしとせず、斯る障碍の起る可きは其地勢より見て必定ならんも、豫め其用意を怠ることなくば、大なる困難に遭遇することなかる可し。下廊下の惡絶を極めたる個所は、劔澤より上流内藏助澤附近に至る間に在り、これが對岸の險も亦仙人澤以下に劣るものに非ず。奥仙人澤より上流の歩道は、孰れの岸に造らるゝとするも、下流よりは更に困難の事なるは疑を容れず。

今夏冠君は平ノ小屋より左岸を下りて、本流には五萬分一の地圖に記入されたる如き瀑布なきことを確め、黑ビンカ(大タテガビン)を踰えて後對岸に徒渉し、惡絶なる下廊下の大半を探られたり(會員通信參照)。若し天候にして良好なりしならんには、以後二日にして奥仙人澤の歩道に連絡するは敢て難事にあらざりしならん。

若し夫れ奥、中の廊下に至りては、其規模もとより下廊下に及ばず、水量亦少なきを以て、九月下旬に於ては河床を遡るも水深股を浸す所多からず、平ノ小屋を早發すれば强行一日にして立石(奥ノタル澤合流點)に達することを得可し、七月水量の大なる時に在りては、數次の迂廻を餘儀なくせらる可きも、猶ほ二日にして足る可く、本年七月大町の人夫を伴ひて、平より遡行したる某氏の如きも略三日を要したるのみなりしとか聞けり。さしも險惡なる黑部峽谷の探究も、是にて最早一段落を告げたるものといふ可し。(木暮)

## ○コロラド州内の高峰

コロラド州内の高峰と言へば落機山脈に屬するものであること申すまでもなく、又落機山中の高峰の表は、『山岳』第一年第一號及び第二號に掲載されてあるから重複の嫌はある樣だが、最近コロラド山岳會から出版された表は、十數年前に公表された前記の目錄に見るものよりは、正確の度に於て勝る點があろうと考へられるので、以下之を轉載することゝする。但し此表に掲げられたものは一四〇〇〇呎以上のもので、それ以下のものは全部省略されてある。

元來コロラドといふ州は、北米合衆國内での山岳國である。アラスカを除いては、合衆國内で一四〇〇〇呎以上の山岳で名稱を有するものは五十五座あるが、その中コロラド州にあるものは實に四十二座の多數に上り、之をキャリフォーニア州の十二座、ウォシントン州の一座に比すると、其差たるや驚く可きものである。其外同高度の山峰で名稱未定のものは州内で少くとも五座を算するのである。此州の面積の七分の一は一〇〇〇〇呎以上の高さに居り、而も一一〇〇〇呎以上のもの二百二十座、一二〇〇〇呎以上のもの一百五十座、一四〇〇〇呎以上のもの四十七座を算する點は、一五〇〇〇呎以上の高峰を有するといふ强味を除いては、數に於て歐洲アルプスなど全く顏色はない。

合衆國の最高峰はキャリフォーニヤ州にあるMt. Whitney で標高一四五〇一呎と註さるゝ。United States Coast and Geodetic Survey によると、コロラド州の Mt. Elbert（一四四一九・六呎）が第二位に來り、ウォシントン州の Mt. Rainier（一四四〇八呎）が第三位で、第四位はコロラド州の Mt. Massive（一四四〇四呎）となる。然しながら United States Geological Survey に從ふとレイニアが第二位で、エルバートとマッシヴは共に一四四〇二呎で第三位に置かれてある。合衆國内で第五位に算せらるゝ山は Blanca Peak で一四三九〇呎の標高を有し、矢張りコロラド州にある。

さて次表には山名の定まつたもの四十二座を掲

げ、其標高の下に據處とするものを附記することにする。其内 U.S.C. & G.S. とあるのは United States Coast and Geodetic Survey で U.S.G.S. は United States Geological Survey の略號である。又 Colo. G.S. とはコロラド州地質調査の測定によつたもので、Hayden とあるのは Hayden Survey of Colorado によることを示し、C.A.C. はコロラド農科大學の L,G. Carpenter 教授が學生と共に實測した結果である。バイクスビークとロングスビークとは checked spirit leveliug によつたもので、誤差は大抵一呎以内のものであらうし、U.S.G.S. のは vertical angulation に由つたもので、一〇呎以内の誤差に過ぎないが、Hayden と Wheler が數年前に測定したのは水銀氣壓計によつたものであるから、一〇〇呎迄の誤差がないとは言へないものである。

最近の測量によると Mount of the Holy Cross と Buckskin Mt. は共に一四〇〇〇呎以下と確定されたので、最早此表に入れることは出來なくなつた。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1. | Mount Elbert | 14,419<br>14,402 | U. S. C. &G. S.<br>U. S. G. S. |
| 2. | Mount Massive | 14,404<br>14,402 | U. S. C. &G. S.<br>U. S. G. S. |
| 3. | Blanca Peak | 14,390 | U. S. G. S. |
| 4. | Mount Harvard | 14.375 | Hayden |
| 5. | Grays Peak | 14,341 | Hayden |
| 6. | Torreys Peak | 14,336 | Hayden |
| 7. | La Plata Mtn | 14,332 | U. S. G. S. |
| 8. | Uncompahgre. Pk | 14,306 | U. S. G. S. |
| 9. | Mont Lincoln | 14,276 | Colo. G. S. |
| 10. | Mount Evans | 14,260 | U. S. G. S. |
| 11. | Castle Peak | 14,259 | U. S. G. S. |
| 12. | Quandary Peak | 14,256 | U. S. G. S. |
| 13. | Longs Peak | 14,255 | C. A. C. |
| 14. | Mount Wilson | 14,250 | U. S. G. S. |
| 15. | Mount Antero | 14,245 | Hayden |
| 16. | Mount Shavano | 14,239 | Hayden |
| 17. | Crestone Peak | 14,233 | Hayden |
| 18. | Mount Cameron | 14,233 | Colo. G. S. |
| 19. | Mt. Princeton | 14,196 | Hayden |
| 20. | Mount Yale | 14,187 | Hayden |
| 21. | Old Baldy Peak | 14,176 | Hayden |
| 22. | Mount Bross | 14,163 | Colo. G. S. |
| 23. | San Luis Peak | 14,149 | U. S. G. S. |

24. Mount Sneffles .....14,143 U. S. G. S.
25. Maroon Peak .....14,126 U. S. G. S.
26. Pikes Peak.....14,110 U. S. G. S.
27. Kit Carson Peak .....14,100 Hayden
28. Mount Windom .....14,084 U. S. G. S.
29. Mount Eolus.....14,079 U. S. G. S.
30. Culebra Peak.....14,069 Hayden
31. Sunlight Mtn .....14,053 U. S. G. S.
32. Red Cloud.....14,050 U. S. G. S.
33. Mount Bierstadt .....14,046 U. S. G. S.
34. Mount Sherman .....14,038 U. S. G. S.
35. Stewart Peak .....14,032 Hayden
36. Wilson Peak.....14,026 U. S. G. S.
37. Wetterhorn Peak.....14,020 U. S. G. S.
38. Grizzly Mtn .....14,020 U. S. G. S.
39. Sunshine Peak .....14,018 U. S. G. S.
40. Handies Peak .....14,008 U. S. G. S.
41. Mount Democrat .....14,000 Colo. G. S.
42. Pyramid Peak .....14,000 U. S. G. S.

## 登山案內者

### ◆平穩村登山者案內人組合規約

（拔抄）

第一條　本組合ハ平穩村登山者案內人組合ト稱ス

第二條　本組合ハ平穩村居住ノ有志者ヲ以テ組織ス

第三條　本組合ハ平穩村及隣接地一帶ノ山岳登山者ノ需メニ應ジ案內又ハ携帶品ノ運搬又ハ强力ヲナスヲ以テ目的トス

第五條　組合長ハ組合ニ關スル一切ノ取締ヲナシ登山者ノ便宜ヲ圖リ幹事ハ組合長ノ指揮ニ從ヒ庶務會計ヲ司ル

第七條　本組合事務所當分ノ間組合長宅ニ置ク

第九條　本組合ニ對シ登山客ヨリ案內人又ハ强力ノ需メアル時ハ組合長臨機案內人又ハ强力ヲ撰擇指名スルモノトス

第十一條　本組合員ハ組合員互助ノ精神ニ基キ不慮ノ災難ニ遭遇セル者アル時ハ組合員協議ノ上相當ト認ムル額ヲ讓與シ又善行アリ他ノ模範トナスニ足ルモノアル時ハ相當ノ賞與金ヲ與ヘ其善行ヲ表彰スルモノトス

第十二條　案內人又ハ强力ノ荷物負擔量ハ八貫匁以內トス、但時宜ニ依リ此限ニ非ズ

第十三條　本組合賃金ハ毎年春季總會ニ於テ決定ス

第十四條　本組合員ハ協定賃金以外登山客ヨリ如何ナル理由アルモ請求又ハ貰受ケザルモノトス但入山中生活ニ必要ナル資料ハ雇庸セルモノヽ負擔トス

第十六條　本組合加入者ニシテ本規約ニ違背シ又ハ組合員ノ體面ヲ汚スガ如キ行爲アル者ハ組合員協議ノ上相當ノ制裁ヲ加ヘ尚改悛セザル時ハ除名スルモノトス

第十七條　本組合ハ平穩村山岳會ノ保護監督ヲ受ケ尚關係官署ノ指揮命令ニ從フモノトス

第二十條　本組合規約ハ大正九年七月ヨリ之ヲ實施ス

平穩村及隣接地登山計畫照會所

平穩村山岳會事務所

平穩村登山者案内人組合事務所

案内人强力賃金表

平穩溫泉發——志賀高原滅滿瀧日戻

同　——大沼池日戻

同　——志賀山日戻

同　——笠ケ嶽日戻

同　——坊平山日戻

同　——三澤山日戻

同　——西館日戻

以上案内又ハ强力日戻リ日當貳圓(食費自辨)

平穩溫泉發——岩菅山日戻

同　——横手山日戻

以上案内又ハ强力日戻リ日當貳圓五拾錢乃至參圓但シ食費自辨

一、平穩溫泉發——岩菅(一泊)——烏帽子笠帽子——(切明泊)——苗場連絡

二、平穩溫泉發——岩菅(一泊)——西館——赤石——鉢山熊ノ湯(一泊)——白根、萬座、草津連絡

三、平穩溫泉發——岩菅(一泊)——魚野川溪谷——野反池——花敷泊——草津連絡

四、平穩溫泉發——笠ケ岳——三澤山——山田(一泊)——萬座溫泉(一泊)——白根——元白根——草津連絡

五、其他一般

以上案内又ハ强力日當貳圓乃至貳圓五拾錢食費其他生活ニ必要ナル諸費登山客支辨

登山計畫地物價表

一、宿料　並等　壹圓貳拾錢位　二等　壹圓七拾錢位　一等　貳圓五拾錢位

一、中飯　並等　參拾錢　二等　六拾錢　一等　九拾錢
一、持辨當　一人前　參拾錢
一、握辨當　一人前　貳拾錢
一、酒　一升　壹圓五拾錢
一、米　一升　五拾五錢
一、草鞋　一足　七錢
一、玉子　一ケ　九錢
一、鮭、牛鑵　一ケ　六拾錢
一、菓子　一斤　四拾五錢
一、キヤラメル　一ケ　拾錢

但時宜ニ依リ多少ノ相違アルベシ

平穩村登山者案內人組合

組合長　關宇太郎
幹事　關春一　湯本巳之作
關金治郎　竹節陸治
高相善太郎　高相清藏
關市治　竹節繁治
關彌作

# 雜報

## ○朝香宮殿下御登山

朝香宮鳩彦王殿下には、八月十三日四ツ屋御出發、白馬岳に御登攀あり。同夜は山上の小屋に宿らせ給ひ、十四日杓子岳鑓ヶ岳を窮めて、四ツ屋に御歸着、其夜は木崎湖畔の滄溟閣に御止宿。十五日中房溫泉に向はせられ、十六日は同所御滯在。十七日溫泉御出發、燕岳、蛙岩、大天井岳を經て二ノ俣の小屋に御休憩。夕刻常念小屋に御着。十八日常念岳に御登攀の後、再び小屋まで御戻りの上、梓川方面に御下山あり、槍澤の小屋に御泊り、十九日槍ヶ岳の頂上に登らせられ、上高地溫泉に御下山、廿日御歸京あらせられたり。

## ○上高地の大荒れ

日本アルプス山中の上高地は、去る廿七八、兩日の豪雨で大變に荒れた。信濃山岳會幹事穗苅三壽雄氏は其の雨の降り出した二十七日に槍ヶ嶽の絕頂に登りて上高地に下り、二十九日に松本へ歸着した。其の談話と上高地五千尺旅舍主任丸山尙氏からの特信とを綜合してみると、二十七日の午前から雨が降り出して夜に入りて頗る激しく、二十八日朝からは強い風が吹き加はり、山拔の音や、雪崩の音が物凄く梓川は河童橋の上へ一尺餘も溢れた、之れに依つて見ると四五十年來の洪水で、壯觀と言はんか、凄壯と言はんか、豪雨は縞を爲して横降りに來る、樹木はメリ〳〵と氣味の悪い音を立てゝ折れるもあれば、根こぎに成つて流失するのもある、清水屋の方では溫泉室が湖の如くに成つて、水が鴨居まで着きさうになつた、本館も床上まで水が乘る虞があるので、お客さんたる穗苅氏までが手傳つて疊を上げた、玄文澤が暴れ出して田代の池へ行く途は埋まつた、霞澤嶽への登山路も破損した、二十八日の午後雨が小降りになると間もなく減水したが、一時の光景は天地壞滅の兆かとも想はるゝ程であつたと云ふ。德本峠の道も傷み、小林區署の材木運搬用軌道は大破損し、登山家も當分の內は步行の困難を覺悟しなければならぬ、上高地では島々からの物資供給に一支障を來した譯であるから、物價も自然高くなるかも知れない。（九年七月一日信濃每日新聞）

## ○霧島山上に大競艇所

南九州の自然美を誇る靈峰霧島を世界的一大公園たらしむる大規模の計畫は着々進捗し、近く工事着手の筈なるが、之と同時に鬱倉たる森林內に太古以來の碧水を湛へる大波池を利用し、一般遊客の爲に一大端艇練習所を設くべく計畫中なり。大波池は海拔五千尺の霧島山上にありて其周圍三里面積五十丁步、水深くして附近には天孫降臨の靈域を控へ、眞に千古不滅の淨境にて、神祕的傳說に富めり。愈凌成の曉には山上六千町步を開ける大公園と共に隨一の端艇練習所たるべし。（福岡特電—九年九月東京朝日新聞）

## ○小倉村登山口

信濃山岳會員たる南安臺郡小倉村の塚田源吾、大倉宗吾の兩氏は同村役場員中田新一氏の助力を得て、今回小倉村登山口を開拓し、去る十九日之れが實地踏査をしたり。此の登山路に依れば、蝶ケ岳への登山には最も近距離たるべく、且つ一方は上高地へ、一方は常念小屋へも比較的容易に達するを得べし。今同氏等が登山したる記錄を摘記すれば、去る十九日午前五時小倉村出發七時ナメシ山の頂きに達す、二十分間休憩して八時冷澤に到着、二十分休息し、夫より鍋冠山の森林に入る。九時二十五分鍋冠の頂上に達し、二十分休憩し、十一時十分に大瀧山に到着せり、三十分間休息、午後一時三十分蝶ケ岳の頂きに達せり。近くは常念岳、赤澤岳、槍ケ岳、穂高岳、燒岳、乘鞍岳、御嶽等を望み、遠くは富士より關東方面を眺望し得たり。植物には車百合、黄花石楠花、ツガザクラ、山梅等あり。午後二時下山の途に着き、三時鍋冠まで戻り、午後五時三十分歸宅したりと。松本地方より行く者は信濃鐵道の一日市場停車場に下車するを便とし、此の登山路より上高地に行く者は大瀧山より岐れて德澤を下るべく、常念岳に行く者は蝶ケ岳より尾根傳ひを爲すべしとなり。右に付き同村の青年會員、在郷軍人分會員は、來年に於て該登山路の修理を行ひ、蝶ケ岳研究を爲すべしと云ふ。（九年八月三日信濃毎日新聞）

## ○山小屋閉鎖期

日本アルプス槍ケ岳の麓なる槍澤の小屋は本月三十一日限り閉鎖す。常念岳の常念小屋は九月五日頃閉鎖する筈なれば、今後の登山家は注意すべし。尤も小屋には若干の食料と防寒具は備へある筈なれば、登山者は山岳道德を重んじて之れを使用すべきなり。上高地の秋色は之れからが觀光に絶好の時季なれば、特種の登山家は尙九月末日頃まではあるべく、同地の旅舍は十一月に入りて引上ぐる豫定なり。（九年八月三十日信濃毎日新聞）

## ○各高山の登山客

山岳熱盛になつて來た結果として近年著しく登山者激增し、本年の如きは六月一日より八月十五日迄の登山者總數は、實に七萬五千人の多きに達し、其の中最も登山者の多かりしは、淺間山の四萬八千六百六十二人、次は御嶽の一萬三千四百人。日本アルプス七千百十一人、中でも白馬登山者尤も多く、二千九百五十四人にして、駒ケ嶽八ケ嶽の二千三百人と云ふ順序を示し、戸隱の如きは千八十人の登山者を見たり。事故としては行政事故の總件數一千四百二十三ありしも、多くは法意事故にして、危險事故とては負傷二名ありしのみなり。（九年八月二十六日信濃毎日新聞）

## ○北海道の初雪

例年より早し

北海道昨今の氣溫は六十五六度の冷氣なるが、十四日午後四時當地一の高山ヌタクカムウシベ山に初雪降れるを發見せり。北海道の初雪は明治三十九年九月二十日の早きに見たるをレコードとし、平年は十月二十日前後にて、昨年は十月六日なりし（旭川）

（九年九月十六日報知新聞）

## ○富士の初雪

富士山麓地方は十一日午前二時頃より降雨あり、同日午後七時氣溫六十三度を示し富士山頂には初雪を見たり。富士山の初雪は例年九月下旬或は十月上旬なるを以て、本年の初雪は非常に早し。

（九月十三日東京朝日新聞）

（靜岡電話）

## ○大阪高商山岳會

本會は大正八年九月の創立で、其の目的とする所は山岳及び山岳に關する一切の研究並に神身の鍛錬に在ります。その中特に、吾等青年の智情意の健全なる發達を圖るを以て、其の主たる目的としてをります。本會の設立以前に於ても、同趣旨のもとに、本校校友會陸上部の主催で可なり多く諸方面の登山を行つたことがないでもありませんが、しかし、元來が陸上部の附屬的な性質のものでありましたから、餘り其の效果の見るべきものがありませんでした。それで昨秋、斷然獨立して、本會を起すに至つた次第であります。

今、本會の設立以前に於て、登山したる行程と、其の以後に於ける、本會の經過とを左に順序もなく記して見ます。

### ○本會の生まれたる以前に於ける登山及び其の行程

一、富士山登山

回數は、確たる記錄の無き爲め不明でありますが、殆んど毎夏陸上部の主催で、行つて居りました。（行程は省略す）

二、金剛葛城及六甲の登山

此の方面の登山は、本校學生中の希望者が、時々集つて、行つたものです。回數は私の記憶に依りますと、約二十五、六回位でした。（省略）

三、四國の劍山登山

此は、私が未だ日本山岳會々員でない時、當時の大阪高商學生TS生と二人で、登山したものです。（省略）

四、日本アルプス烏帽子槍の縱走

昨年の夏、學校の後援を得て、日本北アルプスに、九日の旅を續けました。參加人員は、九名。御參考にまで、行程を記してをきます。

第一日　大町——葛ノ湯——濁澤。第二日　ブナ立尾根——烏帽子岳。第三日　三ツ岳——野口五郎岳——鳳砂岳——黑岳——赤岳。第四日　鷲羽岳——蓮華岳——双六岳——硫黃澤乘越。第五日　鎌尾根——槍ケ岳——赤澤ノ小屋。第六日　上高地溫泉休養。第七日　上高地——松本。

天候は、鎌尾根槍の附近にて、雨に會つた切り他は、概して良好でした。

### ○本會設立後の登山

一、大阪近郊の登山

本會の設立されると間もなく、第一回は生駒連山の縱走を、第

二回第三回は六甲の縱走を、行ひました。其後の登山回數と方面とを擧げて見ますと。

六甲方面　九回　生駒縱走　一回　金剛葛城の縱走　一回

尙本年一月には、越後川口に於て、スキーの練習を行ひ、會員數名の參加を見ました。此の成績は、過去六ヶ月間に得たもので其の中八月一ヶ月は、烏帽子槍の縱走を除いて、全然旅行せなかつた關係上、實は、五ヶ月間に此結果を得たことになります。殆んど毎日曜の登山と云ふ譯です。之を他の學校の夫と比較しますと、實に誇るに足ることゝ思ひます。殊に、我會に、無上の權威を與ふるものは、日本山岳會々員影山、渡邊、長野、三氏の直接間接の御指導あることです。影山氏は、大阪に於ける登山家中、其の豪放なる登山振に於て、異彩を放ち、渡邊、長野兩氏の六甲に於ける造詣は、實に深いものです。特に長野氏の裏六甲に於ける、十ヶ年の長きに亘つて研究された結果、六甲に於ては、恐らく同氏の右に出づる者はない位です。本會會員は此の三氏の指導を得て、益々其の發展に努力しつゝあります。

二、第一回山岳講演會

阪神在住の日本山岳會々員諸氏の後援に依り、昨秋山岳會を創立しますと、同時に、記念講演會を、開催する運びになつて居たのですが、折惡しく、本校昇格運動の爲め、其の延期を餘儀なくされ、遂に、本年六月廿七日午後正六時より、本校研究科教室に於て開催しました。日本山岳會々員並に、各學校に招待狀を發して、愈々、開催となつた當日は、是れ又折惡しく雨天でありました、がしかし、百三十名餘の來會者を得たのは、私等幹事にとりて、實に喜びに堪へませんでした。閉會は、十時半頃、非常な盛會でありました。

演題

一、後立山山脈及び劔岳登山談　朝輝記太留氏

一、山岳と女性　橋詰セミ郎氏

一、アルプス及び日本アルプス　榎谷徹藏氏

幹事の開會の辭が、濟むと、朝輝氏は、右演題のもとに、一時間餘に渡り、詳細なる旅行談を話されました。一般來會者を始め私等幹事にとりて、得る所少なくなかつたと、私は確信します。次に山岳と女性の演題のもとに、橋詰氏の御講演ある筈でしたが、不幸にして同氏は數日前より、岡山縣下へ、出張せられた爲め、御講演を拜聽することが出來なかつたのは遺憾でした。暫時休憩の後、榎谷氏は、演壇に立たれて、アルプス及び、日本アルプスに關し、同氏多年の研究の結果を、一時間半餘に亘りて話されました。殊に、日本アルプスの說明に至りては、實に詳細を極めたものでした。私は同氏の講演に依りて、一夜にして、歐洲アルプス及び、日本アルプスに關する一切の智識を得ることが出來たのを非常に喜んで居ります。講演は、榎谷、朝輝兩氏とも幻燈を使用致しました。

講演會當日は雨天にも關らず、態々御來會御講演下さいました日本山岳會々員榎谷徹藏氏、同會員朝輝記太留氏の御厚意に對し不肖本會幹事を代表しまして、本誌をかり謹んで感謝の意を表します。尙又講演會開催に就き種々御盡力下さいました日本山岳會幹事高野鷹藏氏、同武田久吉氏に厚く御禮申上ます。

三、本年度夏期登山計畫

第一隊　烏帽子——槍、上高地（昨年の行程と同じ）

第二隊　常念山脈縱走（行程左の通り）

第一日　中房溫泉——燕岳——蛙岩——大天井岳——二ノ俣小屋。第二日　二ノ俣小屋——二ノ俣谷——馬場平。

第三日　槍ケ岳——上高地溫泉解散。

第三隊　白馬岳——大黑岳間縱走。

第四隊　針ノ木越劔白馬

第一日　大町——大澤小屋。第二日　針ノ木峠——平ノ小屋

第三日　五色ケ原。第四日　鬼岳——龍王——淨土——雄山——別山。第五日　別山乘越——別山尾根——劔——長次郎谷——劔澤。第六日　小黑部鑛山——小黑部谷——祖母谷溫泉。第七日　祖母谷——猫踊場——雪溪下野營。第八日　清水平——清水岳——白馬。第九日　白馬岳——四ッ谷——大町。

第五隊　針ノ木、藥師

第三日　迄第四隊と同じ。第四日　越中澤岳——數河乘越。

第五日　藥師岳——太郎兵衛平。第六日　上ノ岳——黑部五郎。第七日　蓮華——双六。第八日　西鎌尾根——槍ケ岳。

第九日　槍ケ岳——穗高岳——上高地解散。

大體以上の計畫でしたが、參加者の決定せる者の中、都合にて中止された方が、多かつた爲め、計畫を全然變更せねばならぬ事となり結局、白馬岳より大黑岳間の縱走と、白馬岳より大黑岳、鹿島槍ケ岳、八峯を經て、冷澤に下り、大町に出た一隊と、朝鮮の長白山脈白頭山に向かつた一隊との、都合三隊であります。

以上は、夏期に於ける登山ですが、尙來る十月の下旬頃、吉野群峯に、愉快な縱走を試みる積りです。

尙、本年夏期休暇終了後は直ちに能ふ限り大阪附近に於ける山岳の登攀に勉め、以て、本會の意義ある所を發揮し、同時に、健實なる發展を期する覺悟です。願はくは日本山岳會々員諸氏の御援助あらむことを。切に希望します。

（九—八—十　大阪高商生　森田謙一）

## ○會員通信

△今朝長崎を發し、諫早より島原鐵道に乘り更へ、愛野村にて下車。それより自動車を小濱迄走らせ申候。此附近千々岩灘に沿ひて風光絕佳、溫泉嶽の麓野に候。小濱は瀕海の小都會にして溫泉の登りに、海水浴場として頗る繁盛に候。同地より溫泉迄約二里半、近年縣廳の手行屆き、道路改修せられたる爲め頗るよろしく自動車馬車も自由に上下し、老幼また容易に徒步し得られ候。四方山に圍れたる平地にホテル、客舍、浴場等林間に立ち並び、地高く氣清くして涼しき爲め、外客の來遊するもの多く、本年も夥しく來宿致居候。小生午後二時半着後直に最高峯普賢に登攀を試み、往復三時半を要し申候。火口原より漸次妙見岳の右肩を廻りて登り候。中腹以上樹木密生致し居候爲暑からず、可なりの急傾斜も容易く登れ申候。植物には高山的のもの多く、中には四國にて見受けざる「ホッツジ」を見申候。大體は四國と共通に御座候。

（八月十日長崎縣溫泉公園にて吉永虎馬）

△大正九年一月元旦都人は芽出度い屠蘇に醉ふの時、自分はふと雪の日本北アルプスの大觀を一望せばやと思ひ、會員伊藤、高田の兩君を誘ふて、千曲山脈の一角武石峠横斷の旅に上り申候、元旦の夜九時頃信越線大屋驛に下車、大屋館に一泊致候處、昨年末二回の大雪にて街頭積雪相當に冴え殘居候樣子より見るも、又た車中にて上田の一青年より聞きたる吹雪の話などより考ふるも、到底武石峠越えは不可能なるべく被存候。然し折角東都より罷越したる次第にも有之、如何に積雪深きかを見る丈けにても痛快ならずやとの說有力なりし爲め、二日早朝宿を立ちて、丸子迄輕鐵のあることは承知なれど、快晴の冬の朝は殊の外寒氣强く歩むに若くはなしとて大屋橋にて千曲川を渡り、長瀨あたりにて里童のスケーチングするも面白く、十時丸子に着、之れより上武石迄二里が間を馬車に乘り、更に權現を經て築地原迄二里、次第に雪の增す泥路を午後三時と云ふに境屋の座敷に横はり申候。折柄中食の用意も無ければとて雜煮餅にて腹を拵らへ、幸ひ來合はせたる郵便脚夫に武石峠越の樣を語り其能否を糾せば、言下に其無謀を詰り、斷じて前進すべからずと言ひ、往年松本聯隊の慘事を引用して中止諫告切なるもの有之候爲め、殘念ながら武石越は中止と決定致候得共、今更其儘歸京もなり難ければ、更に會談時を移せば、上田縣道保福寺峠ならば成効疑なからんと謂はるゝまゝに歩を轉じて熊澤峠を越え申候處、短き冬の日は既に暮れ、月さへ東天に上りて積雪三尺にも達居候峠路を足指に凍傷を起すばかりにて辛くも靈泉寺溫泉松屋と云かに宿り申候。宿の正前に共同浴場有之六間に四間位の石盤の間より熱き湯モク〳〵と涌出致居、清麗無比に御座候。夏は養蠶にて宿舍營業中止のもの多しとのことに候。

翌日も快晴、靈泉寺峠を越え西内村に出て、西上して鹿敎湯（カケユ）に至り長井某を東道として雪路五里保福寺峠を越え、保福寺町かしは屋に泊申候。長井とは峠の頂上にて別れ申候。保福寺峠は篠ノ井線開通前は、上田より松本迄の唯一の通路に有之、交通中々頻繁なりし由なるも、今は附近住人の利用する外此山路を訪づるゝ者少なしとは、長井の話に御座候。此日は峠の少し東上田道と合するあたりより吹雪に遭ひ、辛もて足をしたたかに包み候にも不拘、ビリ〳〵感申候程寒氣凜烈に有之候ひき。

抑も佐久方面より千曲山脈横斷路は、北より數へて保福寺峠（約四、五〇〇尺）三才山峠（約五、二〇〇尺）及武石峠（約六、〇〇〇尺）の三路有之候。峠路の距離は上田より保福寺迄四里、鹿敎湯より稻倉迄五里、築地原より淺間溫泉まで六里と稱せられ、積雪の量は高さに正比例致居候。前年十二月中降雪少なき年を除き、一月（乃至三月迄）の武石越は絕對に不可能なるが如く、三才山越もスキーに依る外困難らしく、只だ保福寺峠のみ降雪少き時は通過し得らるゝものゝ存候。小生通過の際峠附近積雪最も深き所にて二尺五寸乃至三尺に達し、其寒冷と困苦とは論外に夥しきもの有之候ひき。

四日は幸ひ雪止み蟲晴と相成申候に付、稻倉峠を越え、正午少し過ぐる頃淺間溫泉目の湯に入申候。稻倉峠（約三、三〇〇尺）の頂上もアルプス展望臺として有名に御座候處、生憎蟲勝にて僅かに常念山脈の一部を正視し得るに過ぎず、肝心の目的は達することを得ず、憾をのんで五日歸京致申候。（鈴木益三）

△武田氏の「北相の一角」を讀み、是非石老山に遊ばんものと思ひ四月十七日(日曜日)午前六時新宿發の汽車に投じ、同志四名と淺川驛に下車、高尾方面の花見連中と何々謌と染めぬきたる旗印の團體とに揉まれながら、咲きも殘らず散も始めぬ、爛漫たる櫻花のトンネルを潜り、先年の蛇龍道を避け、近頃開きたるものと覺ゆる見晴臺近道を辿り、老幼貴賤の善男善女の先導をなして見晴臺最高點に着致候は、十時に有之候。見晴臺の草原も今日の快晴と花とに誘はれて、集ひ來りし人々にて埋められ居候に付、小佛峠に至る鞍部迄下り、石老、大群、丹澤山塊より笹子、權現陣場、景信、延いては秩父方面の山々を前後に見渡しながら辨當を開申候。小佛の舊道を窺き、一度引返して道なき尾根を大ダルミの新道に下り、大ダルミ溫泉旅館の前を過ぎ、赤馬より寺尾の渡しを經て相模川を橫切申候。此あたり杣人の筏を流し行くあり幽邃の境正に一日の來遊に價するもの有之と存候。若柳、阿津の村落を經て、石老山顯鏡寺に小憩、寺にて茶と梅干、澤庵の饗應を受け、再度の中食を認め申候。此山石老山と稱する丈けありて巨巖怪石に富み、特長あるものは一々名と大さと故事來歷とを建札に認めて、旅人の一杖を留めさせ居候。岩の名其他前記武田氏「北相の一角」文中に詳記有之候に付、茲には敢て贅言を須ひず候寺より一時間餘りにて頂上に達し得べく、三時頃頂上に胡座をかき申候。天氣晴朗の御蔭にて附近相模川、道志川流域を遺憾なく鳥瞰致申候。歸路は寺の上五六丁が程にて北行し、鼠坂の村落を目蒐けてひた下りに降り、途中早蕨の土より出てたるばかりなるを二三百も手折りつ、津久井橋にて再び相模川を越え、與瀧驛に着したるは四時二十分位に有之候。(鈴木益三)

△拜啓。四月小集會に於ける松本君の興味ある登山談に動かされ六月十二日より十三日の日曜日にかけ、會員高田達也、伊藤新三兩君と共に丹澤山塊縱走の途に上り申候。十二日午後二時四分飯田町發同四時四十分與瀧着、鼠坂あたりにて驟雨に出遭申候。石老山の東南麓を巡り青野原村の原にて居住屋と云ふ旅籠に一夜の夢を結申候。九時頃より雨降り出し終夜止まず大に懸念致居候處翌朝五時頃漸く止み、天日の昇るに從ひ空模樣有望と相成候に付勇を鼓して出發と決定午前五時半居住屋を出立致候。燒山のあたり雲霧晦冥呎尺を辨ぜず。富士、白峯等の秀嶺展望思もよらず八町坂を過ぎヒメツギ原邊より雲切れて一時晴天となり、蛭ケ岳を望見致候。途中山櫻の滿開いとゞ優雅なる風致を賞翫しつゝ、蛭ケ岳頂上にて辨當を開き候は丁度正午に有之候き。蛭迄は此處彼處の谷々に丁々たる伐木の音を聞き、杣人の怪偉なる容貌を目擊致候得共、これより不動峯、丹澤山、塔ケ岳に至る迄何者にも遊逅せず、蛭、不動間の岩尾根の面白さ、篠竹の雜路等に驚きつゝ、行程殊の外進みて、塔ケ岳孫佛樣の御意を得たるは午後三時少し前に有之候。塔ケ岳頂上にて天候一變し、驟雨切りに到り候に付、驅るが如く大倉道を降り、雨に濡れたる小徑を屢々ツル〳〵と滑りながら危ふくも大倉の村家に着きたるは四時半と覺え候。眺望としては中腹にて箱根、雨降の山々、相模灘、三浦、伊豆兩半島の一部を僅かに一瞥し得たるのみに不過候、秦野の最終發輕便鐵道列車(六時三十分)に投じ歸宅致候。(鈴木益三)

△拜啓。小生事去る三十日から三泊四日間で本縣內務部長森本氏

と共に黒部に參りました、幾度見ても見飽かぬは黒部の絶景です而かも近年著るしく發展して來た水電事業の大袈裟なのには實際驚きました、殆んど全溪の水を囚へて暗い隧道の内へ監禁して、一二里の下方で漸く解放せられたかと思ふと直ぐ又同樣の運命に陷いるのです、かくて幾度となく繰返へされ、愛本で漸く本當の解放を見ると云ふのは設計の實際です、此プリミチツクな偉大なる自然もやがては山々に響き渡る爆藥の音に悠久の眠から醒されて其處女の如き原始林も人の子の寬の手によりて、さいなまれるかと想ふ時哀愁の感なきを得ません、……東洋アルミナム會社の如き、日米合資だけに、せめては株の大部分は日本で持て、彼に旨々としてやられぬやうにしたいと思つてゐます、…私共は猿飛から十五六丁上流木流左岸の東洋アルミナムの天幕中で泊つて更に一里餘り辿つて見ました、昨年古河の一行の引返へした岩壁（奥鐘の對岸）には一縷の歩道が開鑿されました、此歩道は今は仙人谷の落合（此處にも天幕小屋あり）まで立派に出來て、更に上流棒小屋澤の手前十五丁の地まで行けるやうになりました。此處で右岸に越えて棒小屋澤に行けるのです、それですから昨年木暮氏一行の鐘釣から三日の行程であつた仙人谷の落合までは一日で樂に行けます、明年になれば棒小屋澤から平の小屋、もつと上流まで歩道を造くると云つて居ます、そうなると此谷の縱走も容易くなるでせう。匆々。（九、八、九吉澤庄作）

△拜啓。去る七月三十一日夜行東京發。二日立山溫泉泊。三日平小舍泊。四日大雨。五日午後晴。黒部川を下る。御山澤落口に夜營六日御前澤落口を經て内藏の介澤落口に泊。入口にて三ケ所ロープを用ふ。内藏介澤手前に（地圖に示す如き）黒部本流に瀑なし。溪流漸く狹く數千尺の絶崖廊下を形成す。七日下廊下を下る。黒部別山より薙出されたる大タテガビンの下をへづり二度程ロープを用ふ。少距無名の澤の瀧及び又少距新越澤の飛瀑を對岸に見る。岩壁狹高流水益々狀美なり。尙下つて二ケ所架橋。奔波の上を横ぎり舊の岩壁をへづり殘雪のある稍なだらかなる地點にて中食。それより下流にて十數回ロープを用ひ岩壁の大へつりをやる。やがて黒部別山中央部の大屏風を爲せる絶壁にて先進不可能となり別山河原（新稱）に下る。一行悉く赤裸になり對岸信州側に徒渉し白砂の上に泊。地點は黒部別山の中程にある澤の約一丁程手前にて恐らく下廊下唯一の徒渉點ならん。この下は兩岸共全く絶壁深淵を爲し下降困難の爲一先夜營地背後の絶壁を攀ぢ岩小屋澤岳より派出せる屋根の中腹迄上る。九日十日大雨。殘念ながら割愛して國境に上り、扇澤を大町に出て十一日歸京致候。（冠松次郎）

△大正九年七月十六日午前八時木曾上松出發駒ケ岳に登る。十五日開山なれど登山者なし。九合目の小屋なれど番人なし。四時頃頂上につく、それより下山にかゝり、夜九時上松に歸へる、途中森林中にて夕立に再三會ふ。

大正九年七月二十一日四屋白馬館出發白馬登山。人氣な山で登山者頗る盛んなり、縣設の小屋に三泊す、大池、鑓に遊ぶ。

大正九年七月二十七日午前八時大町對山館出發、會員井染氏と共に籠川入り、扇澤にて野營、翌二十八日早朝雨なれど登る、棒小屋乘越に出、爺ケ岳に登る。冷池野營、夕燒なり、黒部峽谷を越へて立山劔岳明かなり。山上の月寂寥たり。翌二十九日鹿島槍

ケ岳頂上に登る。布引と鹿島槍の中間の鞍部を降る。險惡驚ろくのほかなし。雪渓に出る、冷澤に出、鹿島の村に着き、午後八時無事大町對山館着。それより青木湖畔簗場にて數日製作に耽ける。（茨木猪之吉）

△今年も同行者無く、高瀬入水俣より槍、笠をかけるつもりで大町へ參り候處、豫定を變更して烏帽子槍を縱走致し候。案内者宮坂義衛外に人夫二名、七月二十六日大町發、濁の釣橋完成せざるため、高瀬川左岸をへつり源五郎オトシ手前にて河原に露營、翌二十七日は同じく左岸をへつりて濁澤へ出で、途中少々雨に逢ひ烏帽子野陣場露營、二十八日は午前一時頃より正午ころまで雨に降られて滯在し、午後烏帽子に遊び、赤牛の裾を廻る黑部奥廊下の片影を望み候。二十九日快晴三ツ岳の肩より五色ケ原に張られたる二張のテントを望見し、午後野口五郎岳より眞砂岳にかゝる處にて雹を交へたる猛烈なる夕立に遭ひ、黑岳では霧のため樂しみにしたる薬師も見えず、赤岳野陣場に露營。卅日前夜夕立ありたれど快晴。鷲羽蓮華より双六の頂上を經て双六平に下り、縱澤岳の途中にてまた夕立に遭ひ、硫黄澤乘越に露營。槍ケ岳の上にかゝりたる滿月を賞し候　卅一日出發後三十分ばかりして雨に降られ、簑屋根を濡れ鼠になりて強行し、槍澤の雪谿下にて火を焚き衣服を干し、急に豫定を變更して最後のテントを張り、山併を作りて山神を祭り候。八月一日早朝槍へ登り、絶好の眺望を恣にして下山、五時過ぎ上高地温泉着。二日德本峠を越し三日朝歸京致候。（八月八日別宮貞俊）

△拜啓。小生去る七月二十四日友人貳名と共に常念山脈の縱走並に槍ケ岳登攀の目的にて、上野發午後十時二十分翌二十五日午後十二時四十四分有明驛着、同所にて出迎の人夫壹名を連れ、午後六時半中房温泉に到り宿泊。翌朝七時雨を冒して燕岳、大天井、二ノ俣を經て午後六時十分常念坊に入る。此間約十一時間經始雨と寒さに惱まされ、遂に何の眺望も得られず、只僅かに駒草、白山一華、石楠花、ツガザクラ等の雨に惱める可憐な姿に慰められたるのみに候。殊に大天井の登りと二ノ俣より横尾通通過の際の如き、横なぐりの吹降りにさしものレーンコートも遂に浸潤して、寒氣身に泌み申候。斯くして漸く偃松燃る常念坊へ辿りつき、熱いココアに喉を潤しホット一息致候。小舍には成蹊中學山岳部の一行十七八人爐火を盛んにして濡衣を乾しつゝ賑々しく談笑致し居候ひき。翌朝學生連は奥常念に登り中房へ向つて出發致し候、當日は雨霽れて小舍の窓より始めて殘雪美しき槍穗高の山稜を仰ぎ、心氣頓に爽快を覺え候、斯くして前日雨の苦しみも玆に遺憾なく相殺せられたる感有之候。奥常念よりの展望は實に雄大を極め、暫く山頂を去り難く覺え申候。小舍にて晝食後槍澤小屋迄降り、前日中房より二ノ俣小舍に泊り吾等より約三十分程前に到着せりと云ふ大阪朝日新聞記者團の一行（内妙齡の婦人記者參名を含む）と會し、翌朝同一行に卅分程遲れ、又候雨を冒して雪渓を辷り〳〵坊主小屋に辿りつき、雨の霽間より瞬間槍の穗先を望み見たるのみにて登攀を斷念し、再び槍澤小屋に引返し、晝食の後梓川を一氣に上高地に降り、五千尺に投じ、中房以來の汗を流し、疊の上に久〳〵で疲たる如き心地して、實に何とも言はれず候。翌二十九日一日休養と定めたるに、當日は意地惡くも晴天前日と反對に

なればよかつたになどと愚痴も出で申候。河童橋より仰ぐ穂高の山稜及燒ケ岳の噴煙實に豪壯の氣分漂ひ申候。如何に山岳趣味に乏しき人間にても此處の氣分に接しめては必ず多少の共鳴を與え得る事確實と信じ申候。此日大正池、宮川池に遊び、翌日德本峠を超えて島々に出で、松本に歸着、淺間溫泉に浴し、久々にて豐富なる御馳走に舌を鳴らし、今夜篠井經由にて歸京仕り候。（大正九年九月二日神谷恭）

△天候不良のため六ケ敷登山は中止して第二回の名山巡禮を企て去る八月十七日會員小林修明及び外一名の二氏と共に東京出發。西那須野より鹽原に至り新湯大黑屋に一泊。此處は爆裂火口地とかの由にて一寸上州萬座溫泉を思ひ出させ候。旅店は居心地よく湯も快適に候。十八日折からの快晴に乘じ午前四時半頃新湯を出で高原峠の道を進み緩斜の原野と屢小流を横りつゝ七時路傍に鶏頂山の鳥居ある處（五萬分一圖一二三二米の處にて記號あり）に到着。それより本道に分れ落葉松の植林中なる徑と雜草に埋れたる細徑を露にぬれつゝ徐々に登れば一時間弱にて開豁なる高原に出づゝ會津方面の群山及び雲表に突出せる日光火山彙を一眸に收め殊に女峰の頂は牛角の如く尖立し最も雄偉を極め候。八時二十五分藤原よりの登路に合し九時辨天池着。休息後先づ鶏頂山に登る。本山にかゝりてより針葉樹林となり深山の趣あり。九時五十五分絶頂に達し候。此處に間口三間、奥行二間程の立派なる神祠乘籠堂あり。されど眺望は樹林に妨げられて宜しからず。西方のみ稍遠望あるもその他は不充分に候。鶏鳥山と書きたる額など多數あり。勿論鶏頂山とせるものも又有之候。十時三十分發。戻りて火口壁を傳ひ十時五十五分御岳山著。小祠あり。それより少し下りて大に登り十一時三十五分釋迦ケ岳（西岳山とも稱す）三角點に到着。南方に小祠三あり。此山は高原火山の最高點にて頂には丈低き徑あるのみなれば四方の眺望頗る開豁雄大に御座候。御岳山まで前路を戻りそれより直接辨天池に下り（午後一時十五分）藤原への分岐點より其路を取り二時二十分高原峠の本道に合し五時五分川治溫泉近江屋に着し候。高原山はその名の示す如く開豁なる高原狀の景色大に壯快を覺え申候。川治は河畔の岩壁下に浴槽二あり　青天白日下の開放場所にて多數の男女混浴する光景は奇觀に御座候。十九日鬼怒川に沿ひ藤原に至り同地より下野軌道の便にて今市經由、日光に入り候。此日より天候惡くなり遂に豫定の女峯登山を放棄し二十二日漸く中禪寺より湯元に至り其日金田峠に登山。二十三日小林氏等は白根に向はれ小生は金精峠より溫泉ケ岳に登り候。白根は昨夏行きし故今回は略し候。溫泉の登路は微なれど國界の切開けあれば、さしたる困難もなく湯元より三時間餘にて頂上着。途中は樹木のため眺望良からざるも絶頂は開豁に候野州方面は雲に蔽はれしも上州方面は良く晴れ居り燧岳より左方利根水源地の山岳を遠望し山久山の奥深く其地域の廣大幽絶なるに驚き申候。雪の殘れる山も見え候。又燕巢山及び四郎岳は中々見事なる山に御座候。溫泉の南方の頂下に密林の平坦地あり。霧かゝり不注意なれば此處にて方向に迷ふ虞有之候。午後二時頃湯元に歸り候。翌二十四日歸京仕候。（辻本滿丸）

# 會報

## ○本會規則の變更

大正九年九月十三日の評議員會に於て、本會規則の一部を次の如く改廢し、發表と同時に之を實施することゝせり。

第九條　本會ハ一地方ニ關スル特別ノ事務ヲ處理セシムル爲メ幹事會ノ決議ニヨリ必要ナル時期ヲ限リテ地方委員ヲ置クコトアルベシ

第十條　本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルルモノトス

第十四條　正會員ハ會費年金參圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付ス可キモノトス、三月一日以後ノ納付者ハ特別取扱手數料トシテ金五拾錢ヲ附加シテ拂込マル可ク、尙ホ三月末日迄ニ納付セザル者ハ之ヲ除名ス可シ

第十五條　正會員ニシテ一時ニ金百圓以上ヲ納付シタル者ハ爾後會員籍ヲ有スル間、會費納付ノ義務ナキモノトス

是に依つて舊第十五條乃至第十八條を順次新に第十六條乃至第十九條に改む。

舊第十九條は全部之を削除す。

## ○本會規則の變更に就て

第九條及び第十條に於ける變更は、單に字句の訂正に過ぎず。第十五條乃至第十八條を第十六條乃至第十九條に改めたるも亦當然の結果にして、共に格別の意味なし。新に設けたる第十五條は、一二會員より問合せありたる爲、必要を感じて制定したるものにして、決して終身會員と云ふ意味に非ず。普通の正會員なるを以て舊第十八條即新第十九條の規定によりて處分を受けたる場合には、會員籍を失ふ事となる也。第十四條に於ける變更は、從來會費は前納即前年度中に完納すべき規定なりしも容易に行はれざりしを以て新年度の

初めに納付すべき規定に改め、爾後嚴に之を遵守せられんことを希望せるもの也。これ本會の諸經費は主として會費を以て之に充つるものなるが故に、會費納付の遲延は會務の處理に澁滯を來し、必要なる計畫を充分に遂行する見込立たず、爲に本會の不利益を招く事も必無を期し難き狀況に立ち至る虞あるを以て、二月末日迄に納入を乞ひ、安んじて前途に充分なる方針を樹立せんとするにあり、而して三月に於ては集金郵便によりて會費の納入を求むる事となるべく、此際集金を拒絕して別方法によりて支拂はるゝとも本會に於ては、集金郵便の費用以外にも煩はしき手數をなさゞるべからざるを以て、右納入遲延の手數料として會費の外に金五十錢を添ふ可き事に規定したる也、尙三月末日に至るも依然として會費を納付せず更に多くの手數を要求せんとするが如き者は、當然本會會員たる資格なきものと認め、會員籍より削除する方針を執る事としたり、會員各位は充分に此點を了解せられん事を切望す、此規定により舊第十九條は無用となりたるを以て之を削除したり。

## ○警　告

本會規則の改正と共に、會費納付期日、及び遲延手數料等規定されたるを以て、會員各自充分に警戒して、本會に無益の手數をなさしめざる樣注意ありたし、尙右規則は發表の日より實施せらる可きものなるも、海外の遠地に在留する會員に限り、郵便物往復の日數を考慮して、多少の手心を加ふる必要あり、此點に就て誤解なからん事を希望す。

明治四十三年一月以後に入會したる會員にして、會員章の引換を了せられざる向あり、會務の整理上不便甚しきを以て、至急其手續（山岳第十四年第一號一三一頁參照）を完了せられたし。

本會會員は、會則第十六條（舊第十五條）に規定せる如く、必ず會員章の貸與を受け居る可きものなるを以て、會員章紛失等の場合其手續を怠るなからん事を希望す、尙會員章貸與の手續は、本會より會員章を送付するに當り、同時に會員章借用證（會員章と同一の番號を記入せるもの）を送付

す可きに付、規定通り署名捺印の上、之を本會事務所に送付せらるべく、右借用證の本會へ到着すると共に手續は完了し、本會々員の資格は茲に始めて具備せらるべきもの也。從て右手續を完了されざる向は本會會員たる資格に於て缺くる所ある事となる可きを以て、會則第十九條（舊第十八條）の規定を參照せられ、遺漏なく右手續を完了せらるべし。

會務其他に關し本會に照會せらるゝ際は、幹事に宛てずして必ず本會事務所に宛て、書面を以て通信せらるべく、尙返信を要する場合には必ず返信料を添へらるべき旨、先にも折々注意したる事あるも、尙實施せられざる向あり、今後此の如き照會に對しては充分なる取扱をなさざるべきを以て、豫め注意あらん事を乞ふ。

## ○第十回小集會記事

大正九年九月十二日午後一時三十分麴町區紀尾井町清水谷皆香園に於て木暮幹事司會者として開會、左記の講演ありたり。

一、黑部川下廊下の話　冠松次郎氏

黑部川の最も險惡なる下廊下の上半部を通過されたる旅行談にして、平ノ小屋より黑部川の左岸に沿ふて下り、御山澤、御前澤、內藏助澤を橫斷し、黑部本流には五萬分の一圖に記入されたる如き瀑布なきことを確め、黑部別山の大タテガビン（音澤村人夫の稱呼）と稱する大岩壁をへづり、本流を徒涉して棒小屋澤左岸の尾根を攀ぢ、信越國境の山脈に登りて扇澤より大町方面に下られたる行程の大要を語り更に注意す可き種々の點に就て述られたり。他日乞ふて本誌上に揭載すべし。

二、利根川水源地旅行談　木暮理太郎氏

氏が今夏會員藤島敏男氏と同行して利根川水源地を一週したる折の談話にして、此地方に於ける山岳は、標高低き割合に殘雪に富み、且つ其雪溪の急峻なること、尾根は藪の深きこと、植物分布の面白きこと等に就て述られ、數十葉の興味ある寫眞を示されたり。尙ほ第十一回小集會は梅澤幹事司會者として十一月十四日同じく皆香園にて開會す可きことを豫告し、六時閉會す。

當日出席會員辻本滿丸、古川雉郎、松本信廣、高田達也、松本善二、黒田孝雄、伊藤新三、吉岡喜久雄、別所梅之助、横山光太郎、沼井鐵太郎、惠澤福三、久野政雄、飯塚篤之助、佐藤文二、青木軍二郎、神谷恭、村越匡次、金子廣、立田鐵二、藤島敏男、鈴木益三、岡野德之助、郷郁三郎、冠松次郎、酒井忠一、井染道夫、田部重治、高頭仁兵衛、梅澤親光、木暮理太郎の三十一氏及會員外十四名なりき。

## ○會務報告

大正九年八月二十日午後一時半より麹町區紀尾井町、皆香園に於て幹事會開催、次の件に付協議す。

一、萬國山岳會報告中の誤謬に關する件
一、會費未納者に關する件
一、會務取扱方に關する件
《出席幹事—木暮、高野、高頭、武田、田部、梅澤》

大正九年九月十二日午前九時より、皆香園に於て評議員會を開き、次の件につき協議す。

一、本會規則の變更に關する件（別項參照）
《出席評議員—木暮、近藤、高頭、田部、辻本、梅澤、中村（委任）、三枝（委任）、高野（委任）、武田（委任）、山川（委任）》

右終りて後幹事會を同所に開催、次の項に就き協議す。

一、新會則の實施手續に關する件
一、幹事分擔任務割變更の件
一、會員章引換未了者に關する件
一、入會申込者詮衡に關する件

右詮衡の結果、左記の十一氏入會を許可せられたり。

菱田喜一、小柳半二、佐藤隆太郎、前川滿壽雄、牧野順孝、西川巖、村上茂雄、石垣茂平、安井喜之助、伊達田太郎、關口源三
《出席幹事—木暮、高頭、田部、梅澤、中村（委任）、高野（委任）、武田（委任）》

### 幹事任務割變更

編輯　木暮理太郎　　記錄　中村清太郎
庶務　高頭仁兵衛　　圖書　高野鷹藏
編輯　武田久吉　　編輯　田部重治
會計　梅澤親光

## ○新入會員

去る九月十二日の幹事會に於て入會を許可せら

れ、規定の手續を完了して會員名簿に登載せられたる氏名次の如し。（十月四日迄の分）。

## ○交換及寄贈圖書

地學雜誌　第三百八十、三百八十一號
歷史地理　第三十六卷第二、三號
地質學雜誌　第三百二十三號
旅程と費用概算
大橋圖書館第拾八年報
（歐文圖書は英文附錄に掲載せり）

## ○本會規則（大正九年九月改正）

第一條　本會ヲ日本山岳會（Japanese Alpine Club）ト名ク

第二條　本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス

第三條　本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ

第四條　本會ハ毎年大會及ビ小集會ヲ開ク

第五條　本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キ一切ノ會務ヲ處理セシム

第六條　本會ハ別ニ評議員ヲ置キ重要ナル會務ニ參與セシム

第七條　幹事ハ會員ノ選擧ニヨリ評議員之ヲ決定シ其ノ任期ハ三箇年トス、但シ再選ヲ妨ゲズ

第八條　評議員ハ本會發起人、幹事及ビ元幹事ニシテ現ニ會員タル者ヲ以テ之ニ充ツ

第九條　本會ハ一地方ニ關スル特別ノ事務ヲ處理セシムル爲メ幹事會ノ決議ニヨリ必要ナル時期ヲ限リテ地方委員ヲ置クコトアルベシ

第十條　本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルルモノトス

第十一條　正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所姓名、年齡及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス（入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ）

第十二條　入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條　入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルベシ

第十四條　正會員ハ會費年金參圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付ス可キモノトス、三月一日以後ノ納付者ハ特別取扱手數料トシテ金五拾

錢ヲ附加シテ拂込マル可ク、尙ホ三月末日迄ニ納付セザル者ハ之ヲ除名ス可シ

第十五條　正會員ニシテ一時ニ金百圓以上ヲ納付シタル者ハ爾後會員籍ヲ有スル間、會費納付ノ義務ナキモノトス

第十六條　本會ハ會員ニ別ニ定ムル處ノ會員章ヲ貸與ス

第十七條　本會々員ニハ「山岳」每號一部ヲ頒布ス

第十八條　本會々員ハ幹事ノ承認ヲ經テ本會所藏ノ圖書ヲ閲覽スルコトヲ得

第十九條　本會ハ會員ノ資格ナシト認メタル者ニハ退會ヲ命ズベシ

第二十條　會員ニシテ退會ヲ欲スル時ハ其旨事務所ニ書面ヲ以テ申出ヅベシ

第二十一條　會員退會ノ際ニハ本會ニ會員章ヲ返納スベシ

第二十二條　本會々員ニシテ住所、姓名、職業ヲ變更シタル時ハ其都度必ズ之ヲ事務所ニ通知スベシ

第二十三條　本會ハ既納ノ金品ヲ一切返付セズ

第二十四條　本會規則ノ變更ハ評議員會ノ決議ニヨルモノトス

現任幹事　（七名）

木暮理太郎　中村清太郎　高野鷹藏　高頭仁兵衛　武田久吉　田部重治　梅澤親光

評議員　（十四名）

城數馬（在朝鮮）　小島久太（在桑港）　近藤茂吉　三枝守博　辻本滿丸　辻村伊助　山川默及ビ現任幹事七名

## ○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと

一、用紙は大體半紙大又は半紙半枚大、天地左右をあけ、每紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし　每紙同一行數のこと

一、、。「」（）等は各一字劃宛とし行を更むる時は一字下げのこと

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして宛字をなす時は其旨を括弧内に明記す可きこと

一、原稿は必ず左記宛て送附のこと

東京市本郷區駒込蓬萊町三十一木暮方「山岳」編輯所

尙編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと、殊に挿圖寫眞等のある原稿は其の調製方印刷方につき一應御相談あらば幸なり、又原稿は一切返却せず。

大正九年十一月十二日印刷
大正九年十一月十五日發行

〔定價金壹圓貳拾錢〕

著作權所有

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　東京市麴町區富士見町四丁目六番地　日本山岳會
振替口座東京四八二九番

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

admitting certain new applicants, the following subjects were discussed :—

I. About the enforcement of the Club Rule.
II. About the alteration of the divisions of the Club Business allotted to the Officers.
III. About the disposal of members not finishing the exchange of the old Club Badge for the new one.

---

## THE PLATES IN THE JAPANESE PART

Facing Page

(135) The upper stream of the Dakusuikei.
Photo. by Mr. T. Hamatani.

(143) (Upper) Nōkōzan as seen from the Onoe Police Station.
Photo. by Mr. T. Hamatani.

(143) (Lower) The Mokkokei, a branch stream of the Kwarenkei.
Photo. by Mr. T. Hamatani.

(159) The highest peak of Mitsutōgeyama as seen from west.
Photo. by Mr. C. Mataki.

(167) The highest peak of Mitsutōgeyama (as seen from south-west). Photo. by Mr. C. Mataki.

ill with influenza, he went up Kamiyama in record time, with a belief that out-door exercise is the best remedy for any kind of evil. Unluckily the panacea did not work this time, and it was poor Schellenberg's last trip. He broke down soon afterwards, and it was very pathetic to watch desperate struggle of this splendid specimen of physical and mental manhood against the relentless microbic invasion. He died like a hero, thinking very little of himself, but giving all his thoughts, which remained clear to the last, to his family and friends. To have a fine yacht built, bigger and better than those he had built and owned before, was one of his fervent hopes during the last years, and it was a great pity that he was unable to see the end of the work, to which he devoted so many hours of enthusiastic study. Many instances of his kind-heartedness, friendliness, care, and forethoughts were splendidly shown on long yacht cruises where companions depend quite as much on each other as in mountain trips. There has never been a better man as friend than Martin Schellenberg, and all those who knew him will miss him immensely for ever.

(F. Paravicini.)

## THE JAPANESE PART OF THE JOURNAL.

The principal articles in the Japanese Part of the current number of this Journal are :—

| | |
|---|---|
| Nishizawa, Kokushidake and Higashizawa, | by Mr. M. Kamuri. |
| The Traversing of the Central Range in Formosa, | by Mr. Y. Hamatani. |
| A Trip to Chichibu, | by Mr. J. Tanabe. |
| Mitsutogeyama, | by Mr. C. Mataki. |

## PROCEEDINGS OF THE CLUB.

A meeting of the Officers was held at the Kaikôen, Shimidzu-dani, on August 20th. The subjects discussed were as following :—

I. About the Report of the International Congress of the Alpininists.

II. What to do with members in arrears.

III. How to best amend the Club business.

A meeting of the Council was held at the Kaikôen, Shimidzu-dani, on September 12th. The revision of certain Articles of the Club Rule was made. After it, a meeting of the Officers was held at the same place, where besides considering the advisability of

The Late Mr. M. Schellenberg

himself, like the good soldier he had been in his native land.

At the biginning of this year his health began to fail, still, when paying a visit to a friend at Miyanoshita, who was fatally

it and set hand and seal on the bond of loan (containing the same number as the Badge) and then to send the bond back to the Club. The procedure is completed with its reception by the Club and thus full capacity of the member becomes established. So the members who have not yet taken the procedure must refer to Article XIX and take steps without delay.

Members who wish to apply to the Club for Club business, shall address the letter to the Club and not to the Officers personally. Whenever the latter requires a reply, postage stamp for return shall be enclosed, of which members have often been reminded, but which has not always been practised.

Hereafter the Club will not accept such letters as are not in conformity with this regulation.

---

## THE TENTH ORDINARY MEETING.

The tenth ordinary meeting was held at the Kaikôen, Shimidzudani, on September 12th, presided by Mr. R. Kogure. The following lectures were given :—

A trip along the Kurobe. Mr. M. Kamuri.

Mountains from which the Tone takes its rise. Mr. R. Kogure.

Thirty-one members and fourteen guests were present.

---

## MARTIN SCHELLENBERG—OBITUARY.

M. Schellenberg, one of the oldest and best known residents of Yokohama, where he passed more than half of his life, occupied in silk trade, died at the age of forty-seven, after many weeks of suffering from septic endocardites following an influenza complicated by pneumonia. For a long time many friends of his hoped that his unusually strong constitution might get the better of the insidious infection. He was one of the keenest and best allround athletes the foreign community ever numbered amongst its members; an oarsman who had even gained the international reputation by winning the Emperors cup at Frankfurt, an excellent runner and walker, a first class marksman like many of his fellow-countrymen, well known at the rifle ranges of Yokohama and Omori. He left Switzerland too young to do much mountaineering in his country, and later on his business and the obligations to the community did not allow him to take long holidays and make extensive trips. Once ascending Fuji he insisted on carrying his very heavy kit

The original Articles XV–XVIII were each shifted down, being respectively numbered as Articles XVI–XIX, and the original 19th Article was struck out.

## ABOUT THE REVISION OF THE RULE.

The revision of Articles IX–X consists simply in amending some words. The shifting down of Articles XV–XVIII is quite natural. The new 15th Article has been suggested by certain members. But as those to whom this Article is to be applied, are Ordinary Members, they are still subject to the application of the original 18th or the new 19th Article. The revision of the 14th Article consists in changing the time of paying the annual dues from the previous year to the beginning of the current year. But as the expenditure needed for the Club must be paid by the annual dues of the members, and the delay of the payment often prevents the realization of projects of the Club, the members are requested to pay their annual dues by the end of February strictly. With those who do not pay by that time, recourse will be had to collection-post. Even if any of them refuses it and pays in any other way, the club is to receive 50 sen as special charge besides 3 yen, since it entails trouble and expense when once the matter has been taken by collection-post. Those who do not pay even in this way by the end of March, as a matter of course lose their membership. It is hoped that each member will understand well the intention of this Article. By the revision of this Article the original 19th Article became superfluous and was struck out.

---

## CAUTION.

With the revision of the Club Rule, the details about the time of paying the annual dues and the delay charge are settled. Each member is requested to observe them strictly and not give the Club any unnecessary trouble. Though they are to be in force on announcement, they do not apply to the members abroad for the time being, considering the time needed for mail delivery. Certain of the members, admitted in and after January in the 43rd year of Meiji, have not yet exchanged the old Club Badge for the new one. The yare requested to take steps without delay, as the Club experiences much trouble in managing business (refer to page 131 of the Sangaku, No. 3, Vol. 14, 1920). All members, as the Article XVI shows, having nesessarily to receive the Club Badge on loan, any one who happens to have lost it is requested to take the due procedure. The procedure of having loan of it is first to receive

Mount Rainier National Park.
Rocky Mountain National Park.
Sequoia National Park.
Yellowstone National Park; Authorized Rates for Public Utilities thereof.
Yosemite National Park, and
Wind Cave National Park.

| | |
|---|---|
| Field and Forest Club, July—August, 1920. | Boston, 1920. |
| Mid-Pacific Magazine, Vol. XX, Nos. 2, 3. | Honolulu, 1920. |
| Mountaineer Bulletin, Vol. X, Nos. 9, 10. | Seattle, 1920. |
| Bird-Lore, Vol. XXII, No. 4. | New York, 1920. |
| Geographical Journal Vol. LVI, No. 1. | London, 1920. |
| Annual Report of the Tourist and Health Resorts Department, New Zealand. | Wellington, 1920. |
| Alpina, 28. Jahrg. Nr. 8. and Nr. 7. | Zürich, 1920. |
| La Montagne, 16e Année, No. 141. | Paris, 1920. |
| Ditto, Supplément de Juillet 1920. | Ditto. |
| Bulleti del Centre Excursionista de Catalunya, Any XXX, Num. 300–302. | Barcelona, 1920. |
| Bollettino della Sezione Fiorentina del C.A.I., Anno, XI, N. 4–5. | Firenze, 1920. |
| Revue Alpine, Vol. XXI, No. 2. | Lyon, 1920. |
| L'Echo des Alpes, 56me Année, Nos. 7–8. | Genève, 1920. |

---

## REVISION OF THE CLUB RULE.

At a meeting of the Council, held on September, 13th, 1920, certain Articles of the Rule were revised. The revised Articles (in force on announcement) are as following:—

Article IX. The club may appoint, through the resolution of the Officers, some local committees during a certain space of time, for the management of special local affairs.

Article X. The members are divided into Ordinary and Honorary Members, the latter of whom have to be recommended by the Officers.

Article XIV. Each Ordinary Member ought to pay 3 yen a year by the end of February. Members who fail to do so must pay an additional sum of 50 sen as special charge. Any member who does not pay his dues even in this way by the end of March is to be expelled.

The following Article was newly laid down:—

Article XV. Any Ordinary Member on payment of the amount not less than 100 yen at a time shall be exempted thereafter from the annual dues, so long as he remains enrolled as a member.

to the top without it. In tight corners of this sort it is "Pike's Peak or bust" with the Bell Goat and or the Blue Dragon-fly. My arms felt as if they had been pulled out of the sockets oy my shoulders, and another time before going to tackle a strenuous climb of this sort I intend to go in for a little Sandow's exercises with a view of developing my biceps and triceps as well as the latissimus dorsi. The length of this chimney which we have taken the liberty of christening "The Goats Crack" is quite 80 ft. in length and practically perpendicular from the base where it starts from the pedestal on which the two columns of rock rest upon. The smaller of the two pillars was measured with the salmon line, and the height from the top edge to the base where there is a small shrine is 75 ft. The rock itself is very sharp, and although I got considerably scratched about the knees and my left foot was cut, my hands escaped damage, owing to my taking the precaution to wear chamois leather gloves. Any climbers wishing to make the ascent should wrap one or two Japanese towels round their knees as by so doing they would prevent themselves and their clothes being cut. Now the poet who warbled in "musical English" those soothing lines about Fuji :—

"The clouds of heaven in reverent wonder pause,
"Nor may the birds those giddy heights assay,"
"etc., etc.

Should go to the base of the peak of Ho-o-zan, as he will find there a "foeman worthy of his steel."

---

## CLUB LIBRARY.

The following publications have been received since August, 1920 :—

| | |
|---|---|
| Bulletin of the American Game Protective Association, Vol. IX, No. 3. | New York, 1920. |
| Bulletin of the Associated Clubs of North America, 1920. | New York, 1920. |
| Trail and Timberline, Nos. 22, 23. | Denver, 1920. |
| Report of the Director of the National Park Service to the Secretary of the Interior for the Fiscal Year ended June 30, 1918. | Washington, 1918. |

National Parks Portfolio Season 1920, Containing :—

Crater Lake National Park,
Glacier National Park,
Mesa Verde National Park,

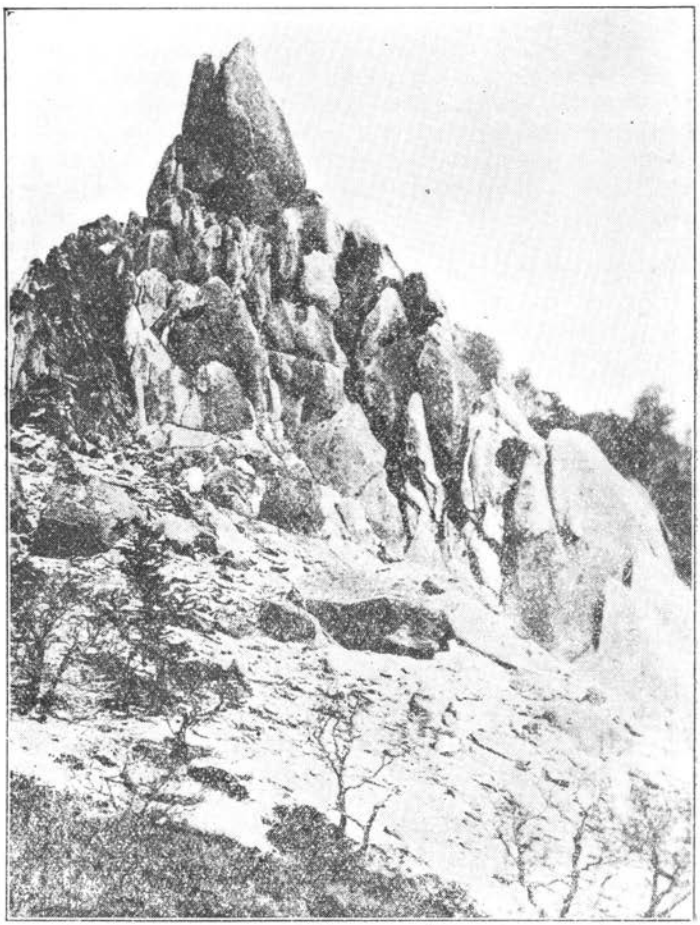
Three other members of our party helped with ropes below, but did not climb; and the other two were left behind to look after the camp."

Being the second foreigner to reach the top of the Phœnix Peak, I would like to add my quota to the foregoing, but before doing so I must doff my chapeau to the Rev. Walter Weston for his successful and unaided effort in reaching the summit of this remarkable peak in 1904, thirteen years before our own ascent. If you will look carefully at the photograph of B. Nagano—the Sumiyoshi Goat—on the rope coming down the south-western face with the ledge just below him, you will see the shelf on which the Rev. Walter Weston stood when he threw his rope with a stone attached into the niche on the top of the crack above him. The photograph gives a very good picture of a part of the summit, but fails to produce in front, where the rope falls over the face, the bulge or rib of the rock itself, as anyone standing on this ledge cannot possibly see the top of the crack where the stone lodged and was held fast in the niche—this on account of the overhanging rock above him. However this photograph gives a very clear illustration of what I referred to above as "The Western Lodge," as also "The Weston Crack" itself on the righthand edge of which he made his famous climb. And I repeat I will take off my hat to the Rev. Walter Weston every time I see him for his climbing of Ho-o-zan. Personally the only difficulty I experienced with respect to my own climb was due to my weight—200 lbs.—which, on a steep ascent of this sort is far more than can be carried with comfort. Half way up the crack my left foot got wedged in between the two pillars of rock, and I had to pull my foot out of the shoe and leave it behind. Ten feet from the top the crack was so narrow I had to come out and throw my left leg over the rib, and gripping the knife-like edge with both knees whilst holding the rope with my right hand had to proceed by a series of frog-like jumps, which, with the aforesaid avoirdupois, made the climbing very difficult. Now I have been through a riding school in Karachi with a battery of artillery, but I can assure you that I never gripped a horse with my knees harder than I gripped that narrow rib of rock on Ho-o-zan. When I looked over the left hand edge I could see nothing between me and the Matsumoto plain. Then when I reached the top the two Shimizu brothers caught hold of me by the scruff of the neck as if I had been a bag of money, and with this assistance I was hauled on to the summit, where I felt just as if I had been through a terrific fight or a first class Rugger match. Whilst feeling more than grateful for this assistance I wish to state that I think I could have got

To get back to our own climb one goriki climbed to what I call the Western Ledge and threw a stone attached to the long salmon line clean over the apex of the peak but unfortunately the line caught fast in the crack the other side or on the top itself. The goriki seeing that there was not much chance of ascending by the Weston Crack now turned their attention to the other side of the aiguille, in other words the long crack running up the north-eastern face. If anyone was to state that Fukasawa brothers and the Shimidzu brothers had got up a sweepstake among themselves for the first man on the top to take the pool I would not contradict him, as directly our party reached the foot of the spear itself they all showed signs of great excitement. The jabbering was something terrific, and the fact that three of them tackling the crack on the north-eastern face and getting to the top in a remarkably short space of time goes to prove they have no superstitious ideas with regard to dying if they were scratched in the ascent. However referring to ths climb—the Sumiyoshi Goat now takes up the running:—

> "As I stood there and gazed with my jaw-bone set at a sharp angle I at first could not see how a human being or even a goat, unless a monkey, could scramble up the narrow opening between the two perpendicular granite columns of 80 ft., with practically no hand or foot-hold to cling to. However, three daring coolies volunteered to scale the chimney. The first man utilised the second man's shoulders, and the second the third man's, and in this way assisting each other they got half way up when the F.G.'s ice-axe was requisitioned, and as they wriggled along heavenwards up to within a couple of feet from the topmost crevice it was found that the foremost man could not proceed any further without a a long push from beneath. My alpenstock 5′8″ long and made like an ice-axe at the top was asked for, and was instrumental in negotiating the last bit of the Phœnix Peak. With the exception of the Rev. Weston, who is credited with monopolizing the honour hitherto of having first scaled this peak, there are only seven of us in Japan, as far as my knowledge goes, who did the apex, and they are as follows in the order named: –
>
> 1st Shimizu Kinjiro.
> 2nd Fukazawa Yoshinaga.
> 3rd Shimidzu Tomoichi.
> 4th The B. G.
> 5th The F. G.
> 6th The S. G.
> 7th Shimizu Kaichi.

somewhat remote, success at length seemed almost within my grasp. Another desperate kick or two found me at last lying on top of the block, panting and perspiring, but exceedingly pleased. A short scramble upwards then landed me on the top of the lower pillar, and the last fifteen feet, quite vertical, but with excellent holds, afforded an agreeable climax to the severity of the struggle. As I scrambled upon the tiny rugged platform, no more than four or five square feet, I had the satisfaction of, at last, standing, for the first time in my life, where, as yet, no human foot had ever been planted."



Jizobutsu, on the top of Hō-ō-zan (Photo. by the Auther)

climber got scratched in the ascent or descent they would surely die within a year. We now got out the Annamite stone-throwing bow which had been brought from Saigon by the B.G. very many years before, the idea being to throw a stone attached to a long salmon line clean over the top of the aiguille itself, and from the other side to draw over the climbing ropes tied end to end we had brought with us. These three all made of the finest Manila hemp measured 58 ft., 61 ft., and 62 ft. respectively. We strung the bow and made a practical test with great success, but unfortunately the string made of a kind of creeper could not stand the strain, and at the third drawing it broke, and altho' we tried hard to mend it with a piece of line we could not get it into proper working order again. The real climb now began in earnest, and there was more or less a race over the rocks forming the base of the peak till we stood below the ledge on the southern face from which the Rev. Walter Weston made his famous climb. He said at a lecture given before the Yokohama Literary and Musical Society in October 1912 referring to his climb from the aforesaid ledge :—

> "Balancing myself on my tiny shelf, I fastened a stone securely to the end of a long Alpine rope. This I tried to lodge in a notch some forty feet above me at the point of contact of the two pillars; each time I threw it up it returned, and as the little ledge afforded no space for playing about on, my back and shoulders suffered accordingly. At last I induced my hunter to scramble up far enough to be able to support my feet on the ledge with the head of my iceaxe. After half an hour's bombardment a lucky shot went home; the stone jammed hard and fast in the notch and then, testing the rope carefully, to my great delight found it firmly fixed. But as it hung vertically for some fifty feet, I declined to trust it with my whole weight, so grasping it tightly in my left hand, I applied myself to the rib on the right, and began to progress upwards at the pace of a snail. Every few feet I had to hang on to my rope and rest for breath, for the exertion was far too severe to be continuously sustained. Finally, I found myself just under the block, but this pushed me out in such a position that the rope was of no further use. Screwing up my courage, I cast it loose, fortunately finding one or two fair finger holes on the bulging obstacle above my head. Here I hung for a few minutes to gain fresh breath, and more strength for one last desperate effort. This just enabled me to get my hands with a good grip well on the upper ledge of the block. For a moment it seemed 'touch and go,' but though my hand-holds were

huts mentioned in "Murray's," but there was plenty of dry fire wood and we had two small tents. The following morning, the 14th, the day broke fine and clear, and after our bad luck with the weather on Akaishisan and Kaigane we really felt in luck's own way. For a "goat" the track up to the peak of Sunaharai is an easy scramble. This landmark we passed at 8.30 a.m. height per barometer 9150 ft. This mountain is the second of a series of peaks from the Tsuetate-toge which jut from the Ho-o-zan ridge, and the crest itself consists of masses of huge black rocks piled together in indescribable but picturesque confusion. The Flying Goat thus describes the view we took from this point:—

> The prospect was magnificent and on all sides we were surrounded by giant mountain peaks, the triple summits of the massive Shiranesan to the S.W., with Senjotake a little to the North predominating. To the East an impressive view was obtained of the Koshu plain with the spires of Yatsugatake rising in serene grandeur from the lesser luminaries. Pressing on we successively climbed the remaining peaks of the ridge, viz. Kwannondake, 9200 ft., Yakushidake 9500 ft. and Jizodake 9250 ft., and from the last-named we enjoyed a fine view of the impressive rock summit of Ho-o-zan, shooting up sharply from the ridge like some brobdingnagian finger. (The F.G. had evidently recently been reading "Gulliver's Travels.") Beyond rose the frowning bastion of the Koshu Komagatake, separated from Ho-o-zan by a tremendous precipice. Indeed the Komagatake of Koshu is a singularly imposing mountain, being practically perpendicular for many thousands of feet on its south western face. On both the east and the west the ridge we traversed fell away in tremendous slopes, and far below on our left, we could just discern the Norokawa, appearing but as a silver thread nestling at the foot of mighty Shiranesan.

Descending the eastern face of Jizodake through wooded country we came out on to a large open sandy patch on the ridge at the very foot of our goal—a veritable mecca for a mountaineer. This redoubtable peak to quote the Flying Goat again "shot up from a pedestal of rare beauty composed of huge blocks of grey granite beautifully massed in the form of a lotus." The Phœnix Peak is well named as it is remarkably similar to an enormous tongue of flame shooting out of a large fire. It consists of two gigantic pillars of black and white granite measuring 75 feet in height practically smooth to look at but decidedly rough and sharp if one comes in contact with any of its knife-like edges. In fact the unsophisticated natives of the mountain village of Ashiyasu until quite recently held the view that if any

# SCRAMBLES IN THE SOUTHERN JAPANESE ALPS.

*Part IV :—Ho-o-zan—The Phœnix Peak.*

BY

"BLUE DRAGON-FLY."

AS far as the foreign contingent are concerned it may safely be said that the history of mountaineering in Japan contains no more exciting episode than the successful attempt on the peak of Ho-o-zan (9,554 ft.) by the Rev. Walter Weston in 1904.

This dramatic also somewhat acrobatic performance wi l be referred to later on, as no account of the conquest of this remarkable mountain would be complete without his own narrative which will be given in his own words.

But the memoirs of the "Mountain Goats" of Kobe, and the Bell Goat in particular also portray yet another sketch depicting the second successful scaling of the Phœnix Peak; and seeing that open confession is good for the soul, let it be understood the nom de plume of "Blue Dragon-fly" is only one of many with which from time to time the Bell Gota has christened himself, this record therefore may be taken from this "magazine" of Inaka, which description it may be said was written from personal observation and recollection.

There were three of us "on in that piece," the other two being the Flying Goat and the Sumiyoshi Goat; but without any false shame about the matter it must be stated that the honours of the day went to our goriki :—Fukazawa Yoshinaga and two of the Shimidzu brothers, all of Ashiyasu-mura.

The walk up the Tsuetate-toge on a bright day in October 1917 was a far more pleasant experience than the climb previously made prior to the ascent of Kaigane in 1916 described in Part III of this series. For the high peaks of Japan the middle of October is rather late in the season, as expeditions to the Alps necessitate camping out, and the thermometer at night at seven to eight thousand feet will certainly read somewhere round or less than the freezing point. However in this particular case the weather was responsible, as a terrific typhoon at the end of September said to have been the worst for half a century knocked everything in the way of communications endways, and our starting time was therefore somewhat delayed in consequence. The camping place at Omuro we found bereft of the woodcutters'

# NIPPON SANGAKU KWAI.

(THE JAPANESE ALPINE CLUB.)

Fujimichô IV: 6. Kôjimachi-ku, Tôkyô.
Postal Transfer Account: No. 4829 Tôkyô.

List of the Officers (Honorary).
Elected Nov. 26th, 1919.

**General Secretary.**

N. Takatô, Esq.

**Recording Secretary.**

S. Nakamura, Esq.

**Treasurer.**

Prof. C. Umezawa.

**Librarian.**

T. Takano, Esq.

**Editors.**

R. Kogure, Esq. Dr. H. Takeda. Prof. J. Tanabe.

**Council.**

| | | |
|---|---|---|
| Hon. K. Jô. | M. Saigusa, Esq. | Dr. M. Tsujimoto. |
| R. Kogure, Esq. | T. Takano, Esq. | I. Tsujimura, Esq. |
| K. Kojima, Esq. | N. Takatô, Esq. | Prof. C. Umezawa. |
| S. Kondô, Esq. | Dr. H. Takeda. | S. Yamakawa, Esq. |
| S. Nakamura, Esq. | Prof. J. Tanabe. | |

The object of the Club being promotion and diffusion of the knowledge of mountains, and everything concerning mountains, it always welcomes to its membership those anxious to further this object by their interest and support.

An applicant for admission into the Club must be proposed and seconded by three of the members, one of whom must be a Member of the Council, and it is necessary that he should fill up an official form with particulars of ascents made or nature of the work accomplished by himself, and send it in to the Club. The admission will be decided at a Meeting of the Officers.

Any ordinary member, on payment of the amount not less than 100 yen at a time, shall be exempted thereafter from the annual subscription, so long as he remains enrolled as a member.

Members are required, on their admission into the Club, to pay 5 yen as entrance fee. They ought to pay an annual subscription of 3 yen by the end of February. Members who fails to do so must pay an additional sum of 50 sen as special charge. Any member who does not pay his dues even in this way by the end of March is to be expelled. Payments to the Club are to be made through Postal Transfer Account or by P.O.O. Neither cash nor cheques are accepted.

Members are entitled to receive the Club's Periodical Publications. They may also attend the Ordinary Meetings of the Club and have access to the books and maps in the Club Library.

Every member shall receive a Club Badge on loan, which must be returned, on his resignation of membership.

Members who are away more than twelve months may, at their request, apply to be registered as "Absent Members" on payment of Yen 2 for fee. Absent Members may keep Club Badge; need not pay subscription; shall not get any of the Club's Publications; are not privileged to be present at any of the Club's Meetings; nor are they entitled to vote. When returned they should pay the arrears for the period of absence, and then shall receive the Club's Publications issued during their absence. In case their absence be prolonged more than three years, they have to resign membership, and return the Club Badge. If, however, they wish to rejoin the Club hereafter, they have the privilege of being admitted through an introduction by a Member of the Council only.

All communications should be addressed to the General Secretary. Enquiries requiring a reply should enclose return postage.

# SANGAKU

Vol. XV November 1920 No. 2

(English Supplement)

## CONTENTS

PAGE

Scrambles in the Southern Japanese Alps, IV-"Blue Dragon-Fly" . . . . . 1

Club Library . . . . . 7

Revision of the Club Rule . . . . . 8

About the Revision of the Rule . . . . . 9

Caution . . . . . 9

The Tenth Ordinary Meeting . . . . . 10

Martin Schellenberg—Obituary . . . . . 10

The Japanese Part of the Jaurnal . . . . . 12

Proceedings of the Club . . . . . 12

The Plates in the Japanese Part . . . . . 13

Tôkyô
Nippon Sangaku Kwai

The Journal of the Japanese Alpine Club

# SANGAKU

Vol. XV 1920 No. 2